

東京大学 高大接続研究開発センター主催シンポジウム 報告書

大学入学者選抜における 英語試験のあり方をめぐって(2)

2019年3月

東京大学 高大接続研究開発センター

はじめに

東京大学高大接続研究開発センターでは、昨年（2018年）2月10日に「大学入学者選抜における英語試験のあり方をめぐって」と題するシンポジウムを開催しました。そして、ちょうど1年後の本年2月10日に、昨年と同じタイトルで末尾に(2)が付いたシンポジウムを開催しました。本報告書はそのまとめです。

2017年7月13日に発表された大学入学共通テスト実施方針では、共通テストの英語試験について、2023年度までは実施するとされ、2024年度以降については未定となっています。そこで、今回のシンポジウムでは、現行の共通テストである大学入試センター試験の英語について、それがどのような試験であったかを検証することを目的の1つとしました。そのために、昨年まで大学入試センターの試験・研究統括官（副所長）を務められた大塚雄作先生と、現役の研究開発部教員である荘島宏二郎先生から、それぞれ、作成・実施の側面と、テストとしての機能の側面からご講演をいただきました。また、山口県鴻城高等学校の松井孝志先生には、センター試験英語の試験問題そのものについて検証していただくとともに、民間試験の特にライティングの問題についても取り上げていただきました。

その2024年度以降のことよりも身近な、2020年度に実施される大学入試については、2017年11月10日に国立大学協会が英語民間試験と共通テストの英語の両方の受験を必須とする基本方針を発表しました。これに対し、東京大学などいくつかの大学は、英語民間試験の受験を必須とせず、受験者が一定水準以上の英語力があることを高等学校が証明すればよいという方針を発表しました。こうした証明は高等学校にとっても初めてのことで、どのように取り組んだらよいかというヒントが必要だと思います。そこで、そのヒントを得ることをシンポジウムの2つめの目的として、高校生の英語運用能力のアセスメントに関する実践的研究を進めている静岡大学の亘理陽一先生にご講演をお願いしました。

しかし、東京大学のような方針をとる大学は現時点では少数で、多くの国立大学は国立大学協会の方針にしたがって、英語民間試験の受験を必須としています。複数の英語民間試験を共通テストの枠組みで使用することについては、昨年のシンポジウムでも多くの懸念が示されました（その内容は、昨年のシンポジウム後に登壇者が中心になって出版した『検証 迷走する英語入試』（南風原朝和編、岩波ブックレット）にまとめられています）。その懸念ははたして解消されたのか、どのような懸念がいまなお残っているのかを明らかにすることが本シンポジウムの3つめの目的でした。これに関しては、昨年度ご登壇いただいた宮本久也先生から全国高等学校長協会会長を引き継がれた東京都立三田高等学校長の笹のぶえ先生にご講演いただきました。

最後の討論では、開会の挨拶をいただいた東京大学理事・副学長の石井洋二郎先生にも参加いただきました。石井先生と登壇者との質疑の後、フロアからいただいていた質問を、本センターの濱中淳子教授と宇佐美慧准教授が整理して、登壇者に質問させていただき、ご回答いただきました。

今回も昨年度と同様、中継を視聴していただく副会場を用意し、昨年度を上回る 400 名以上の方にご参加いただきました。フロアからの質問も多く出され、討論の時間ではそのごく一部しか紹介できませんでした。そこで本報告書では、講演および討論のすべてを当日のスライド資料とともに収録するほか、フロアからの質問の全部を一覧表に掲載しました。そしてそれらの質問に対して、シンポジウム後に登壇者から回答していただいたものを「紙上回答」として併せて掲載しております。したがって、本報告書は、シンポジウムに参加された方にも新しい内容を提供するものとなっています。

なお、当日のスライドのより鮮明なものは、本センターのホームページから閲覧できますので、あわせてご活用いただければ幸いです。

<https://www.ct.u-tokyo.ac.jp/news/20190210-symposium2019-report/>

本センターでは、高大接続にかかわる研究開発を一層進めるとともに、これからも重要な事柄についてシンポジウム等を企画し、広く発信してまいります。今後とも、ご支援、ご協力のほど、よろしくお願いいたします。

2019 年 3 月

東京大学高大接続研究開発センター長

南風原朝和

東京大学 高大接続研究開発センター主催シンポジウム
「大学入学者選抜における英語試験のあり方をめぐって(2)」

- ◇日 時： 2019年2月10日（日）13：30～17：30
◇場 所： 東京大学本郷キャンパス
伊藤国際学術研究センター地下2階・伊藤謝恩ホール
◇主 催： 東京大学高大接続研究開発センター

— プログラム —

開会の挨拶 石井洋二郎 東京大学理事・副学長

講 演 南風原朝和 東京大学高大接続研究開発センター長
（前半） 「英語入試改革の現状と論点」

大塚 雄作 京都大学名誉教授／大学入試センター名誉教授
「大学入試センター試験はどのように作成・実施されてきたか」

荘島宏二郎 大学入試センター研究開発部准教授
「センター試験「英語」はどのような試験だったか」

講 演 松井 孝志 山口県鴻城高等学校教諭
（後半） 「高等学校から見たセンター試験と民間試験の「英語」について」

亘理 陽一 静岡大学教育学部准教授
「高等学校による英語運用能力のアセスメントについて」

笹 のぶえ 東京都立三田高等学校長／全国高等学校長協会会長
「これからの大学入学者選抜に望むこと」

討 論 講演者全員・石井洋二郎

司 会： 南風原朝和 東京大学高大接続研究開発センター長

東京大学 高大接続研究開発センター主催シンポジウム
「大学入学者選抜における英語試験のあり方をめぐって(2)」

目 次

はじめに

東京大学高大接続研究開発センター長 南風原 朝和..... i

開会の挨拶 東京大学理事・副学長 石井 洋二郎..... 1

講 演

「英語入試改革の現状と論点」

東京大学高大接続研究開発センター長 南風原 朝和..... 5

講演資料 11

「大学入試センター試験はどのように作成・実施されてきたか」

京都大学名誉教授／大学入試センター名誉教授 大塚 雄作..... 15

講演資料 25

「センター試験「英語」はどのような試験だったか」

大学入試センター研究開発部准教授 荘島 宏二郎..... 29

講演資料 35

「高等学校から見たセンター試験と民間試験の「英語」について」

山口県鴻城高等学校教諭 松井 孝志..... 37

講演資料 43

「高等学校による英語運用能力のアセスメントについて」

静岡大学教育学部准教授 亘理 陽一..... 47

講演資料 55

「これからの大学入試選抜に望むこと」

東京都立三田高等学校長／全国高等学校長協会会長 笹 のぶえ..... 61

講演資料 68

討 論.....	73
フロアからの質問.....	95
フロアからの質問への紙上回答.....	107
アンケート集計結果.....	147

開会の挨拶

東京大学理事・副学長

石井洋二郎

南風原：

皆様、こんにちは。時間になりましたので、東京大学高大接続研究開発センター主催シンポジウム「大学入学者選抜における英語試験のあり方をめぐって(2)」を開始したいと思います。本日はたくさんの皆様にお越しいただき、ありがとうございます。このテーマでのシンポジウムは昨年に続いて2回目となりますが、前回と同様、映像を中継する副会場を本会場の隣に設置しております。しかし、いずれの会場もスペースにゆとりがなく、ご不便をおかけしますがどうぞよろしくお願いいたします。

最初に、東京大学の石井洋二郎理事・副学長に、開会の挨拶をお願いしたいと思います。石井先生、よろしくお願いいたします。

石井：

皆さん、こんにちは。ただいまご紹介にあずかりました石井でございます。本日は連休中にもかかわらず、このシンポジウムに大勢の方にご参加いただきまして、誠にありがとうございます。昨日雪がちらつきましたので心配していたのですが、今日は見事に晴れ渡りました。本当は雪が積もっていたら、この積もった雪を解かすような熱い議論を、という気の効いたフレーズを考えていたのですが、それを使う必要もなく



なりました。

前回はそうでしたが、今回も受付開始後すぐに定員がいっぱいになり、隣で中継もなされるということで、この問題に対する社会の関心の高さがうかがわれます。お申込みいただきました方々の名簿を拝見いたしますと、大学、中学・高校、予備校などの関係者の方はもとより、文部科学省や教育委員会、大学入試センター、民間試験の実施事業者の方々、マスコミ関係の皆様、学生さん、そしてそれ以外、この問題に関心をお持ちの一般市民の方々まで、大変多様な立場の皆さんにご参加いただいております。私は今年のシンポジウムでも開会のご挨拶をさせていただき、その当時から、この英語試験の問題には強い関心を持っておりました。ただ、大学での私の主な職掌は教育でございますので、入試は直接の担当ではございませんので、その時はまだ、この問題に深く関わっておりませんでした。

しかし、その後、昨年5月に学内に入学者

選抜方法検討ワーキンググループというのが作られまして、その際に、どういうわけか総長からいきなり座長に指名されまして、それ以降は否応なくこの学内議論に深くコミットすることになった次第です。

そのワーキンググループでは、これは報道などでご存知の方も多いと思いますが、昨年7月に東京大学での英語民間試験の使用に関して優先順位を付けて3つの提案をさせていただきました。そのうち最優先の提案は、出願に当たって英語民間試験の成績提出を求めないというものでしたが、これに対しては学外からもいろいろな反響がございました。中には明らかに見当外れと思われるいささか子供っぽい反応もございましたけれども、多くの方々からは賛同のご意見を頂戴したと受け止めております。

ただし、学内にもいろいろな意見がございますし、いろいろな力学も働いておりますので、議論はそのまま答申の提案通りに進んだわけではございません。その結果が9月に発表いたしました基本方針、すなわち、民間試験の成績提出と高校による英語力証明書の提出を同等の選択肢として並列するという形になったわけです。その後、各大学でも次々に方針が公表されておりますけれども、対応はそれぞれまちまちという印象で、今日に至ってもなお収束する気配はございません。

いずれにいたしましても、大学入学者選抜における英語試験の問題は、民間試験の取り扱いだけではなく、共通テストの今後の存続の可否、あるいは高校でのアセスメントのあり方など、まだまだ検討すべきこ

とが多く残されております。したがって、感情的な言葉の不毛な応酬ではなく、冷静かつ率直な意見交換と、専門的な見地からの熟議が何よりも必要です。本日のシンポジウムがそうした実り多い意見交換と熟議の一助となることを期待しております。

なお、今回、私はご挨拶だけではなく、あとの討論にも参加するように言われております。南風原先生には、2階級特進でパネリストとするにはあと一步だけけれども、挨拶だけだった去年から比べれば1階級昇進であるというありがたいお言葉をいただいておりますので、少し偉くなった気がしております。

フロアの皆様に資料が配布されていると思いますが、その中の質問用紙にも私の名前が載っております。開会の挨拶をした者が質問を受けるとするのは異例のことではございますが、もし何かご質問があるときは、後ほどお書きいただければと思います。それでは本日はパネリストの先生方、どうぞよろしく願いいたします。これももちまして私のご挨拶とさせていただきます。

講 演

英語入試改革の現状と論点

東京大学高大接続研究開発センター長

南風原朝和

南風原：

石井先生、どうもありがとうございました。ということで、最初の講演に移りますが、私は2階級特進で本日はこちらから講演させていただきます。私からは「英語入試改革の現状と論点」ということで、お話させていただきます。前回は、中立な司会役に徹したところですが、あまり我慢すると体に悪いということが分かりましたので、本日は少し自分なりの考え方を混ぜながら進めたいと思います。

これ（スライド2、3）が今、議論のベースになっている大学入学共通テスト実施方針で、2017年のものです。赤字のところだけ見ますと、資格・検定試験のうち、センターが認定して、その試験結果およびCEFRの段階別成績表示を要請のあった大学に提供するというものです。認定という言葉を使っていますが、現在は、文科省も入試センターも認定という言葉を使っていない、要するに質を見て試験を認定したものではない、単に参加資格を満たしていることを確認したということですが、いずれにしても民間試験を使う。活用の参考のためにCEFRの対照表を提示するということです。

そして、受験生は高校3年生の4月から12月の間に2回までの試験を受けて、その結果をセンターが各大学に送付する。共通



テストの英語試験については、平成35年度までは実施し、各大学の判断で共通テストと認定試験のいずれか、または双方を選択利用する。つまり、文科省としてはどちらかを使えばよいという方針を示しているわけです。それだけ自由度が与えられていたわけです。

それに対して、国大協の基本方針（スライド4）というのが出まして、赤字のところにありますように、認定試験を一般選抜の全受験生に課すと。文科省はどちらかというのに対して、国立大学の集まりである国大協がこのような判断をしたわけです。今から思うと、ここに至る議論に、現在、各大学が非常に多くの時間をかけて議論しているその時間を、ここにかけるべきだったろうと思います。当時は各大学に照会がありましたけれども、照会の回答の期限が1週間後でした。1週間なのでほとんど英語の教員にも伝わっていない状況で、それなのに、とりあえず回答を集計してこのような

大きな決定をしてしまったのが国大協のやり方であったということです。

そういったことを受けて、昨年2月にシンポジウムを急遽企画しました(スライド5)。片峰先生が当時の国大協入試委員長でしたので、シンポジウムでは片峰先生にどうしてそういう決定をしたのかということ、ぜひお聞きしたいということで、片峰先生のスケジュールに合わせて、シンポジウムの日程を決めました。それ以外のシンポジストであった込山さん、羽藤さん、阿部さん、宮本さんは、全員、本日もおいでになっていると思います。

ただ、国大協の方では、その後も作業が順調に進められ、今度はガイドライン(スライド6)が3月に発表されました。その内容は、認定試験の結果を出願資格とするという方法と、加点をする、単に出願の可否ではなく試験の得点に加点する、そのどちらかというガイドラインを作成されました。これを受けて課題をもっと広く共有する必要があると考えまして、昨年のシンポジウムのシンポジストである高校長協会の宮本先生、京都工芸繊維大学の羽藤先生、東京大学の阿部先生、加えて大学入試センターの副所長であった荒井克弘先生に加わっていただいてこのブックレット(スライド7)を出版したところです。それが昨年の6月です。

国大協はさらに作業を進め、今度は参考例(スライド8、9)が出てきます。どのような出願資格かということで赤字のところ、たとえばCEFRの下から2つ目のA2以上を受験資格とすることが考えられる。あるいは、加点方式の場合には、たとえば英

語の2割くらいを民間試験にという、そのような配点が考えられるという参考例が出されました。

そこで本日の大きな論点として、2020年度から2023年度まで、つまり共通テストと民間試験を並行して行うというこの期間の各大学の英語入試の方針が大きな論点となります(スライド10)。焦点は民間試験の使用の是非、仮に使う場合は使い方をどうするかということです。well-informed decision と書きましたが、これは前回のシンポジウムで羽藤先生が発言された言葉で、十分な情報をもって根拠をもって大学は判断すべきだという発言がありました。そのキーワードをここに繰り返しております。入試の実施主体として、受験生に責任をもって説明できる方針を決めていただきたいということで、各大学がどうしていくかが論点の1つであるということです。

これ(スライド11)は東京大学の場合なのですが、下の方にありますように、昨年6月12日に東京大学新聞、これは東京大学の学生が発行する週刊の新聞で市販されております。養・英語部会、養というのは教養学部のことを学内では簡単に養と一文字で言っています。教養学部・英語部会から反発の声ということで、共通テスト英語民間試験、懸念解消されずということで、英語の専門の先生方の部会からこのような声が出されました。ちなみに6月12日という日は、先ほど石井先生がおっしゃった石井ワーキングの第1回目の日ということでありました。そのワーキングですけれども、これも先ほど紹介があったところですが、ワーキングか

らの報告がその1カ月後の7月12日に出されました。提案の1が出願に当たって認定試験の成績提出を求めないというものでした。他に提案2として懸念が解決されたら検討するという、さらに提案3を加えて全部で3つの提案がありましたが、ワーキングとしての優先順位は提案1の、英語民間試験の成績提出を求めないということでした。私自身も現時点ではこれが最良の方針ではないかと今も考えているところです。皆さんの資料にはないスライドを何枚か追加しています。これ(スライド12)もそうです。

そのあと、9月に基本方針の発表があり、12月25日にさらに詳細の発表があったところです(スライド13、14)。いずれか1つを求めるということで、1つ目が大学入試センターによって確認された民間の英語試験の成績A2レベル以上。2つ目が日常の授業における学習状況や試験の成績等から総合的に評価した結果、CEFRのA2レベル以上に相当する英語力があると認められることが明記されている高等学校等による証明書ということで、これは新しい案として出されました。この2つが対等な選択肢として出され、(3)としては何らかの理由でこれらを提出できないときはその事情を明記した理由書です。

これ(スライド15)も追加ですが、名古屋大学も同様の方針をとっているのですが、つい一昨日、選択肢の(2)に当たる英語力の証明書の具体的な案が出されました。このようなフォーマットに学校名と校長名、捺印で、下記の者は本校在学中に履修した

科目について、日常の授業における学習状況及び試験成績等から総合的に評価した結果、A2レベル以上に相当する英語力を有すると判断します。これに校長先生が署名捺印をして名古屋大学への出願の際に同封するというものです。非常にシンプルでかつ学校教育に重きを置いた内容になっています。

いくつか他の大学の様子を見ておきたいと思いますが、これ(スライド16)は静岡大学の方針で、総点250点のうち、CEFRの段階に応じて最高ランクだと50点の加点がもらえるというものですけれども、ここにこのような注釈がありました。上記の内容は2020年度にこのシステムが問題なく運用され、かつ英語認定試験が公正な実施形態で滞りなく実施されている状態であることを前提としています。普通こういうことは書かないですよ。相当心配があるということが表れているわけで、そういう心配があるときはどのような決定をすべきかが問われていると思うわけであります。

あちこちに苦悩がにじみ出ているわけですが、これ(スライド17)は公立の岩手県立大学で、学長メッセージとして出されています。赤字のところ、英語の資格・検定試験を利用することを4月に公表しましたがこの方針を変更し、利用しないこととしました。これは非常に清々しい発表です。受験生が不安を抱えたまま受験することを心配したためですということです。変更したところが大事です。4月から11月までの状況を見て、これは難しいと判断したということであります。鈴木厚人学

長からのメッセージということで、この方はちなみに、スーパーカミオカンデで、ノーベル賞の東大・小柴先生、梶田先生らと一緒に研究された方です（スライド 18）。

これ（スライド 19）は最近の記事ですけれども、右側の日本経済新聞で、被害をなくせと書いてあるのは、大学関係者の集まりで、なんとかこの改革の被害を最小限にしたいと皆言うわけです。ですが、被害はあってはいけないものなので、最小限にするのではなくゼロにしないでほしいということを書いたものです。それから事業者も負担増ということで、検定試験本来の良さが、選抜試験しかも共通テストに組み入れることでぎこちないものに変質してしまっているという心配があり、負担もかかるということで、この視点から問題を指摘したものです。左側は毎日新聞の記者の目という記事ですが、こちらに有名無実化した全員受験方針ということで、東京大学も必須としない、京都大学も名古屋大学も必須としない、北大、東北大は課さないということなので全員受験という、先ほどその議論に時間をかけるべきだったと言った国大協の決定は有名無実化しているということです。重要な指摘だと思います。

これ（スライド 20）は追加で、本日の朝日新聞の記事ですけれども、民間試験の使い方が国立大学で 2 つに分かれているという記事でしたが、実際には「使用しない」という 3 つ目の選択肢があって、それを東北大学、北海道大学、公立では岩手県立大学などが採用していますので、実際には 3 択です。先ほどお示ししたような見直し変更も

ありうるわけで、国大協の方針が基本的に有名無実化したことを踏まえて、各大学の主体的な判断が求められているところでもあります。

ということで、論点の 2 つ目（スライド 21）は、大きな論点 1 の下位の論点になりますけれども、民間試験について広く指摘されていて諸課題は解消するのか、異なる試験間の比較可能性、試験や採点の質の問題、これは結果の報告まで含めてです、いわゆる成績提供システムが安定運用できるのかも確認が必要になります。さらに、よく言われる受験機会の公平性、キャパシティ、障害者への配慮、事故対応の責任の所在なども考えていかなければいけない。試験対策による高校教育への影響もあります。このあたりは広く共有されている課題だと思いますので簡単に示します。

そのスライドの最後に書きましたのは、そういった課題に関連して、つい先日、12月に大学入試英語 4 技能ワーキンググループが文部科学省に設置されて、検討が始まったところです。この時点でこういうワーキングが設置されること自体が、いまなお課題が山積しているということの証左なわけなのですが、本日の登壇者のお一人、笹先生がこのワーキングの委員ですので、できれば可能な範囲でこのワーキングは今どうなっているのか、どのようなことがどこまで進められているのか、どのような見通しなのかを教えていただければと考えています。

論点の 3（スライド 22）としましては、先ほどの名古屋大学のフォーマットにもあ

りましたが、高等学校で英語運用能力を評価する場合、証明書のための評価だけではなく、より広く高等学校で英語運用能力をどう評価していくかが論点になるだろう。当然それに加えて、入試以上に重要なのは教育ですから、その指導の中でどのように英語運用能力を高めていくのかも合わせてこれは検討していく必要があるだろうということでもあります。

これ（スライド 23）は先ほどの共通テストの実施方針の後半ですが、平成 35 年度までは共通テストの英語試験を実施とあります。そこで論点の 4（スライド 24）としては、少し先の 2024 年度以降の英語共通テストを存続するのか廃止するのかということがあります。現時点でも懸念の多い民間試験に一本化するのかということですが、こちらでも当然 well-informed decision が求められ、責任のある方針決定が必要になります。

これ（スライド 25、26）は時間がないので後でご覧いただければと思いますが、昨年 6 月の時点では国大協はいいことを言っています。この時期が国大協の前の執行部の最後の時で、そこで執行部が変わって現在に至っているわけです。国の公式見解（スライド 27）としても、国会での答弁で、共通テスト英語を廃止するとは言っていません。その後の取り扱いについては現時点でお答えすることは困難である、これが現時点での国の説明であるということです。

ですから、論点 5（スライド 28）として、センター試験の英語の検証が今求められるわけで、どのような試験だったのか、どのよ

うに作成・実施されてきたのか、また試験対策によっても試験の妥当性は変わってきますので、対策の実態はどうだったのか、民間と比べたら、たとえばリーディングとリスニングは重なるわけなので、比べてどのようなものだったのかということと、仮に存続するとしたらどのような改善が求められるのかも論点です。論点のまとめ（スライド 29）で、講演者の方には 2、3、5 の各論を論じていただいて、それを通して大きな論点である 1 番と 4 番に関する well-informed decision に資することが目的であります。

本日の登壇者は、多くの分野で活躍されている方々ですが、本日のシンポジウムとの関連に限定してご紹介します。大塚先生は大学入試センターの試験・研究統括官であった先生です。荘島先生は現在まさに入試データの解析をされている先生、松井先生は高校学校で英語教育にかかわっておられ、特にライティングの指導の専門家であります。亙理先生は静岡県と協力して高校生の英語運用能力のアセスメントに関する実践的研究に従事しておられ、笹先生は先ほどのワーキングにも所属しておられます。石井先生は東大のワーキングの座長をしておられました。

本日はお一人約 20 分ずつの講演をさせていただいて、私の次の次の荘島先生のあとと、最後の笹先生のあとに休憩、この 2 回の休憩時間に質問用紙の回収をします。質問用紙の読み上げは本センターの濱中・宇佐美の両名が行います。質問用紙に私の名前がなくて石井先生の名前がありますので、私に質問があっても石井先生のところに書

いておいてください。たぶん、大丈夫だろう
と思いますので。ということで、私の講演は
以上となります。どうもありがとうございました
ました。



1

英語入試改革の 現状と論点

東京大学高大接続研究開発センター
南風原朝和

2

大学入学共通テスト実施方針 (2017年7月13日)

7. 英語の4技能評価

① **資格・検定試験**のうち、試験内容・実施体制等が入学者選抜に活用する上で必要な水準及び要件を満たしているものを**センターが認定し**（以下、認定を受けた資格・検定試験を「**認定試験**」という。）、その**試験結果及びCEFRの段階別成績表示を要請のあった大学に提供**する。

② 国は、活用の参考となるよう、CEFRの段階別成績表示による対照表を提示する。

3

大学入学共通テスト実施方針 (2017年7月13日)

③ センターは、受検者の負担、高等学校教育への影響等を考慮し、**高校3年の4月～12月の間の2回までの試験結果を各大学に送付**することとする。

④ **共通テストの英語試験については、制度の大幅な変更による受検者・高校・大学への影響を考慮し、認定試験の実施・活用状況等を検証しつつ、平成35年度までは実施し、各大学の判断で共通テストと認定試験のいずれか、又は双方を選択利用**することを可能とする。

4

国立大学協会の基本方針 (2017年11月10日)

(1) 「大学入学共通テスト」

(2) 英語4技能の評価

新テストの枠組みにおいて、センターが認定した民間の資格・検定試験（以下、「認定試験」）を活用することが有効であるが、十分な検証を行い、その実施・定着を図っていくことが必要であることから、国立大学としては、新テストの枠組みにおける5教科7科目の位置づけとして**認定試験を「一般選抜」の全受験生に課す**とともに、平成35年度までは、センターの新テストにおいて実施される英語試験を併せて課すこととし、それらの結果を入学者選抜に活用する。

★ここに至る議論に、いま各大学が
かけている時間をかけるべきだった！

5



2月10日(土)
13:30~17:30

大学入学共通テストの英語試験のあり方をめぐって

昨年のシンポジウム
(2018年2月10日)

講演者（敬称略）

山田泰造（文部科学省・大学入試室長）

片峰 茂（前・国大協入試委員長）

込山智之（ベネッセ・GTEC開発部長）

羽藤由美（京都工芸繊維大学）

阿部公彦（東京大学）

宮本久也（全国高校長協会会長）

6

国立大学協会のガイドライン (2018年3月30日)

2. 英語認定試験
(認定試験結果の活用)

新テストの枠組みにおける認定試験結果の活用については、各大学・学部等の方針に基づき、次の方法のいずれか、または双方を組み合わせて活用することを基本とする。

① 一定水準以上の認定試験の結果を**出願資格**とする。

② CEFRによる対照表に基づき、新テストの英語試験の得点に**加点**する。

7



検証
迷走する英語入試

南風原朝和 編

混乱は必至!

ブックレットの緊急出版
(2018年6月5日)

執筆者（敬称略）

宮本久也（全国高校長協会会長）

羽藤由美（京都工芸繊維大学）

阿部公彦（東京大学）

荒井克弘（元・大学入試センター副所長）

南風原朝和（東京大学）

8

国立大学協会の参考例 (2018年6月12日)

2. 英語認定試験

(1) 出願資格とする場合

出願資格とする水準の具体的な設定については、各大学・学部等が主体的に定める。（中略）具体的には、各大学・学部等の方針により、CEFR対照表に基づき、その**一定水準（例えばA2）以上を受験資格**とすることが考えられる。

9

国立大学協会の参考例 (2018年6月12日)

(2) 加点方式とする場合

英語認定試験の結果に基づき共通テストの英語の成績に加点する点数の具体的な設定については、各大学・学部等が主体的に定める。(中略)具体的には、各大学・学部等の方針により、英語認定試験の結果に基づく加点の点数をCEFR対照表に基づく水準ごとに定め、その最高点が共通テストの英語の成績と合わせた英語全体の満点に占める割合を、英語4技能学習のインセンティブを与える観点から適切な比重(例えば2割以上)となるようにすることが考えられる

9

10

【論点1】2020年度～2023年度の各大学の 英語入試の方針

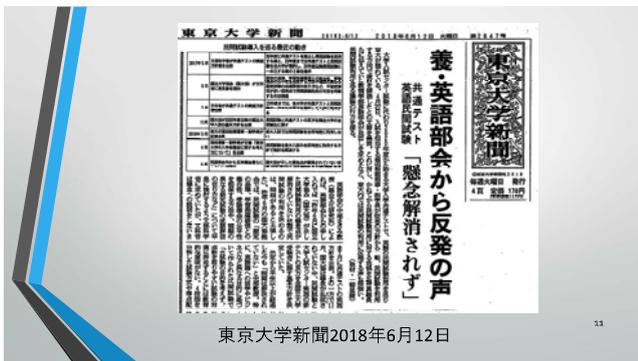
焦点は、民間試験の使用の是非と、仮に使う場合は使い方をどうするか

“well-informed decision” が求められる

入試の実施主体として、**受験生に責任をもって説明のできる方針**を

10

11



東京大学新聞2018年6月12日

11

12

東京大学・入学者選抜方法検討WG (2018年7月12日)

- 提案1：出願にあたって認定試験の成績提出を求めない。
- 提案2：認定試験をめぐる諸課題への対応について文部科学省ほか関係機関からの具体的かつ詳細な説明を受け、十分に納得のいく回答が得られたらその時点で認定試験の活用可能性について検討する。
- 提案3：認定試験のA2レベル以上の結果を出願資格とするが、一定の条件のもとに例外を認める余地を残し、可及的速やかに具体的な要件を定める。

12

13

東京大学・現時点での方針 (2018年12月25日)

2021年度東京大学一般入試(2020年度実施)においては、従来の出願要件に加え、次の(1)～(3)のうちいずれか1つを求めるとします。

- (1) 大学入試センターによって、「大学入試英語成績提供システム」の参加要件を満たすと確認された民間の英語試験(以下、「認定試験」という。)の成績(ただし、CEFRとの対照表でA2レベル以上に相当するもの)。

13

14

東京大学・現時点での方針 (2018年12月25日)

- (2) 日常の授業における学習状況や試験の成績等から総合的に評価した結果、CEFRのA2レベル以上に相当する英語力があると認められることが明記されている高等学校等による証明書。
- (3) 何らかの理由で上記(1)(2)のいずれも提出できない者は、その事情を明記した理由書。

14

15

名古屋大学の「英語力証明書」 (2019年2月8日)

名古屋大学総長 殿

学校名 _____

校長 _____ 印

下記の者は、本校在学中に履修した英語に関する科目について、日常の授業における学習状況及び試験成績等から総合的に評価した結果、CEFRのA2レベル以上に相当する英語力を有すると判断します。

15

16

静岡大学の方針 (2018年12月26日)

CEFR 加点(英語の総点 250 を想定した場合)
C2→50 C1→40 B2→32 B1→24 A2→16 A1→8

(註4) 上記の内容は、2020年度において、大学入試英語成績提供システムが問題なく運用され、且つ英語認定試験が公正な実施形態で滞りなく実施されている状態であることを前提としています。それと相違する状態となった場合には、状況に応じて、救済措置等を講じる可能性があります。

16

17

岩手県立大学の方針 (2018年11月26日)

高校生の皆さんへ（学長メッセージ）

本学では、2021年度入学者選抜の一般選抜においては、大学入試センターが認定した英語の資格・検定試験（認定試験）を利用することを本年4月に公表しましたが、この方針を変更し、認定試験を利用しないこととしました。

その理由は、岩手県内を含め地方において、高校生に等しく認定試験を受検する機会が確保できるか、受験料や会場までの交通費など認定試験への経済的負担が多いことなど、不安を抱えたまま受検することを心配したためです。（後略）

17

18

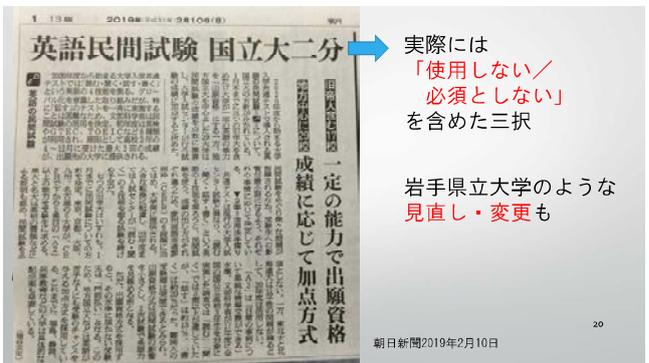


18

19



20



21

【論点2】民間試験を共通テストで使用する際の課題の検証

広く指摘されている以下の課題は解消されるのか

- 異なる試験間の比較可能性 — CEFR自体の限界も
- 試験や採点の質 — 結果の報告=成績提供システムの運用も
- 受験機会の公平性
- セキュリティ、キャパシティ、合理的配慮等 — 事故対応も
- 試験対策による高校教育への影響

※ 2018年12月、大学入試英語4技能ワーキンググループを設置

21

22

【論点3】高等学校における英語運用能力の評価のあり方

入試の際に求められる証明書のための評価だけでなく、より広く、高等学校での英語運用能力の評価のあり方

あわせて、高等学校における英語運用能力を高める指導のあり方

22

23

大学入学共通テスト実施方針（再掲） (2017年7月13日)

7. 英語の4技能評価

④ 共通テストの英語試験については、制度の大幅な変更による受検者・高校・大学への影響を考慮し、認定試験の実施・活用状況等を検証しつつ、平成35年度までは実施し、各大学の判断で共通テストと認定試験のいずれか、又は双方を選択利用することを可能とする。

23

24

【論点4】2024年度以降の共通テスト「英語」の存続・廃止

現時点でも懸念の多い民間試験に一本化するのか

“well-informed decision” が求められる

入試の実施主体として、受験生に責任をもって説明のできる方針を

24

25

国立大学協会の意見 (2017年6月14日)

- 1 共通テストの在り方
- (2) 英語4技能の評価

認定試験を「活用する」とこと、認定試験をもって共通テストの「代替とする」とことは、その実質に断絶がある。共通テストの英語試験を廃止して認定試験に切り替えることは、認定試験をもって共通テストの「代替とする」とことであり、**試験の作問主体が大学入試センターでないことがもたらす影響を詳細に検討すべきである。**

25

26

国立大学協会の意見 (2017年6月14日)

具体的には、これまでの大学入試センター試験における英語試験の果たしてきた役割・実績を検証するとともに、新たに導入する認定試験について、認定の基準、学習指導要領との整合性、受験機会の公平性を担保する方法や、種類の異なる認定試験の成績評価の在り方などについて早急に検討し、それらの見直しを示すべきである。そのような情報がない中ではあまりにも不確定な事項が多く、現時点で共通テストの英語試験の廃止の可否を判断することは拙速と言わざるを得ない。

したがって、少なくとも共通テストにおける英語試験の存続については、平成33年度入学者選抜に導入される認定試験の実施・活用状況等を検証の上、その後のしかるべき時期にあらためて判断すべきである。

26

27

国の公式見解 (2018年7月27日)

【城井衆議院議員からの質問主意書（2018年7月17日提出）】

政府は、二〇二四年度実施の入試から、英語については新テストを廃止して民間試験のみとすることを検討しているのか。仮に、検討しているとすれば、民間試験導入の検証をせずに、新テスト廃止を検討する理由について、政府の認識を明らかにされたい。また、英語の新テスト廃止については、国立大学協会は慎重な検討を求めているが、政府の認識を明らかにされたい。

【答弁書（2018年7月27日）】

平成三十五年までは引き続き実施することとしているところであり、その後の取扱いについては、現時点でお答えすることは困難である。

27

28

【論点5】センター試験「英語」の検証

センター試験「英語」は、どのような試験だったか

センター試験全体は、どのように作成・実施されてきたのか

高等学校での「対策」の実態はどうであったか

民間試験の「英語」と比べるとどうなのか

存続するとしたら、どのような改善が求められるか

28

29

論点のまとめ

- 【1】2020年度～2023年度の各大学の英語入試の方針
- 【2】民間試験を共通テストで使用する際の課題の検証
- 【3】高等学校における英語運用能力の評価のあり方
- 【4】2024年度以降の共通テスト「英語」の存続・廃止
- 【5】センター試験「英語」の検証

講演者には、論点2、3、5について論じていただき、それを通して、論点1、4に関する“well-informed decision”に資することが目的

29

30

本日の登壇者のご紹介

大塚雄作先生

前・大学入試センター副所長（試験・研究統括官）

荘島宏二郎先生

大学入試センターの試験評価解析研究部門に所属

松井孝志先生

英語教育、特にライティングの指導の専門家

30

31

本日の登壇者のご紹介

亙理陽一先生

静岡県と協力して、高校生の英語運用能力のアセスメントに関する実践的研究に従事

笹のぶえ先生

文科省の「大学入学共通テスト」検討・準備グループ
および大学入試英語4技能ワーキンググループの委員

石井洋二郎先生

東京大学の入学者選抜方法検討ワーキンググループの座長

31

32

本日の進行

お一人、約20分間の講演

荘島先生の後と、最後の笹先生の後に休憩

2回の休憩時間に質問用紙の回収

質問票の整理・読み上げは、高大接続研究開発センターの
濱中淳子 教授（入試企画部門）
宇佐美 慧 准教授（追跡調査部門）が担当

以上

32

大学入試センター試験はどのように作成・実施されてきたか

京都大学名誉教授／大学入試センター名誉教授

大塚雄作

南風原：

では引き続き大塚先生、よろしく願いします。

大塚：

皆さん、こんにちは。ご紹介いただきました大塚です。昨年3月までセンターで試験・研究統括官をしておりました。今はセンターから退いておりますが、いまだにセンター試験が円滑に行われるかどうかということは最大の関心事の1つでありまして、昨日は、私の住んでいる千葉では雪が多少なりとも積もる程に降りまして、これがセンター試験の時でなくてよかったという思いがまずもって出て来たりもしております。センター試験本番におきましては、今年もいくつか正解の追加や、小さなことはありましたが大きなトラブルなく無事にセンター試験が完了しましたこと、これは何をおいても皆様方のご協力がないとできないことでありまして、私からも心よりの御礼を申し上げておきたいと思っております。

さて、そのセンター試験ですが、いよいよ来年の試験をもって終了ということになります。スライド2に挙げておりますように、大学入試センターがかかわって、共通1次が11回、そしてセンター試験は来年で31回になります。それだけの積み重ねがある



ということは、これは実に貴重なことであると思います。

私はセンターに戻る前、京大にいましたけれども、大学におりますと、センター試験は年に1回、試験監督などの役割が回ってくることはありますが、基本的に他人事でありまして、何が起こっても別に自分にとってはどうでもいいという部分が正直ありましたが、センターに戻りまして、直にセンター試験に接してみますと、センターの教職員はもちろんです、センター試験にかかわってくださっている大学の先生方のセンター試験に対する熱意でありますとか真剣さ、特に、センター試験という1点に集中して皆さんが取り組む迫力はなかなか他では味わえないものがあると毎年感じることが出来ます。それだけに42回にわたって積み重ねられるセンターで実施してきております共通試験は、スライドには「文化資産」という言葉を使ってみました、先日、中央公論の対談記事では、山本理事長は「公

共財」という言葉が使われておりまして、思いは一緒なのだと思いますが、いずれにしても、センター試験はそういった域に達しているのではないかと思っている次第です。ですから、今日は英語の試験に関する話題も提供させていただきますが、1つの「文化資産」として積み重ねられてきた共通試験のノウハウや考え方を背景として、ぜひこれからの入試改革などを進めていっていただきたいという思いを込めて、センター試験についてご紹介させていただこうと思います。

まず、センター試験の特徴を共有しておきたいと思います。我々はしばしばセンター試験は、大規模、共通一斉、選抜試験という、3つの特徴を持っていると言っておりまして。センター試験も海外の共通テストを模範にはしてきておりまして、この3つが揃っている試験は世界的に見ても特異な試験であろうと思います。その意味で、日本でセンター試験が実際に経験してきたことは、同じ特徴が与えられる範囲において、これからの共通試験のあり方にも非常に重要な示唆をもたらしてくれるはずだと思います。

その特徴の第一に、センター試験は大規模であるということを取り上げてみます。センター試験はご存じの通り、50万人を超える受験生がおりまして、それだけに多様な受験生が含まれるということがあります。また、その規模の受験生に対応するために、試験会場も700試験場、約10,000試験室近くが用意されております。その状況でどのようなことが起こるかと言いますと、たと

えば、試験・研究統括官の立場からしますと、あとでも触れたいと思いますが、試験問題は何度もこれでもかというほど念入りに点検しながらも、問題冊子の印刷が完了したあとに残念ながらさらなる問題訂正を要する点が見つかったりいたします。その場合、試験場に問題訂正をファックスなどで試験直前に送り、試験室の担当試験監督に板書で問題訂正をお願いすることが毎年のように生じてしまいます。とても些細なところを直さないといけないということが基本的には多いのですが、その程度の間違いのないような問題訂正の板書も、10,000室ありますと、だいたい0.1%オーダー、10件くらい板書ミスをしてしまいましたという報告が入ってきます。センターからは、公平性という観点から適切な対処をしていただくということで、各試験室に具体的な対処方法を連絡して、公平性を担保する努力をしておりますけれども、これも10,000というオーダーの試験室があるからこそ起こることです。スライド3にも記しておきましたが、確率的にかなりまれな現象も実際に起こってしまうということです。先ほど、南風原先生が被害を最小にするという言い方があることを懸念しておられましたが、これだけ大規模な試験の場合は、最小という単位であったとしても、そのことが現実に起こってしまうということです。

もう一点、受験生の多様性という意味では、配慮を要する受験生への対応についても触れておきたいと思います。「合理的な配慮」ということが、今は、センター試験に限

らず求められる時代になっておりますけれども、たとえば、センター試験では、点字問題を毎年作成しております。今年は、英語のリスニング試験で「リスニング四天王」とも呼ばれている絵の選択肢が出て、ネット上で大騒ぎになっておりましたが、私はまず、この問題、点字でどう表現したのだろうということが気になったわけでありまして、図とか表とかが含まれる問題は、配慮を要する受験生に対する問題作成の時には非常に苦労するところでありまして、さらに、配慮を要する受験生には視覚ばかりでなく、さまざまな問題がありまして、どういう配慮が求められるのかということ、それぞれの問題に応じて、それこそ多様な要求が出て来ます。点字をはじめ、拡大文字、問題の読み上げ等々、それぞれの対応についてこんなに苦労しているのかということ、センターに行って初めてわかることでもありまして、そのことも1つ、おさえておいていただければと思います。

そういった受験生への配慮のなかに、マークすることができないという受験生に対しては、解答欄にチェックするとか、選択肢番号の数字を書くという答案も許容しております。そういった解答用紙は、センターにおいて、マークシートに記入し直して、何重もの確認を経てコンピュータに読み込んでいくという作業も行ったりもしております。

マークということに関して、もう1つ共有しておきたいことは、一般の受験生のマークシートの答案も、一意にコンピュータに読み込ませられるわけではないということがあります。受験生は一度書いたマーク

を消して書き直すこともありますが、薄いマークでも読み取れるように読み取り感度の設定を上げたりしますと、消し方によっては、消したものをマークしたと読んでしまい、ダブルマークと判定されてしまうこともありうるのです。センターでは読み取り感度を変えて二度読んでおまして、その二度読んだ結果が異なる場合には、そのマークシート用紙を引っ張り出して、人の目でチェックしてどちらが正しいかということを確認して、最終の解答結果としているわけです。そういうこともだいたい0.1%オーダーで生じておまして、毎年、数千枚以上の確認をセンターの教職員が行っているのです。そういう努力をしているということは、あまり共有されていないことかと思えます。マークシートだから100%人手はかかっていないだろうと思われる方もいらっしゃるというか、私自身もそう思っていましたが決してそんなことはないということです。なかなか大変なことが実際には起こっているということでもあります。

スライド4は「共通一斉」という点をまとめておきました。センター試験は、基本的に一度の試験で50万人の入試成績を公平にもれなく確保できなければいけないということがあります。たとえば、センター試験の英語のリスニング試験では、二回読みが採用されています。二回読みというのはセンター試験ならではの点だと思いますが、なぜ二回読むかと言うと、英語を聞いて問題冊子を読んで選択肢をマークするというリスニング試験の状況に受験生が慣れていないということ以上に、近くの席の受験生がく

しゃみしたり、飛行機が飛んだりといった日常的な雑音が偶然に入ってきたときに、二回聞ければ、何とか対応できる余地が確保されるであろうという配慮も含まれていると聞いたことがあります。そういったことで今、二回読みにセンター試験はなっているということです。センター試験は、時間内に逆戻りできませんので、聞き返すこともできません。そういうことがセンター試験のリスニングの二回読みの背景にあるということもあまり共有されていることではないのではと思います。

資格・検定試験はだいたい一回読みであると思いますが、その場合は、試験全体の得点が資格を与えるべき合格ラインを超えればよいということで、一時の日常的なアクセントであれば吸収されうるということもあるかと思いますが、「選抜試験」の下では、その問題が解けるか解けないかが合否にかかわってくるということがありますので、そういった公平性の担保も行われているということがあるわけです。

もう一点、リスニング試験は、ご存じの通り、いつも第一日目夕方5過ぎからの最後の時間に割り当てられていますが、なぜそんな時間にやらなければいけないかということも触れておきたいと思います。これも大規模試験であるから起こることなのですが、ICレコーダーの不具合が毎年報道されております。その場合、別のICレコーダーに替えて、不具合が起こった時点から先を進めていくことになります。再開テストと呼ばれておりますが、その時間を確保するために、次に別の試験がない最後の時間に

配置されているということです。実は、ICレコーダー自体の機械的トラブルは、毎年、二桁には収まっているようですが、多くは受験生の操作ミスによって起こります。やはり、0.1%オーダーで数百件の不具合が起こるのが通常ですが、再開テストを行うための配慮が時間割にも組み込まれているということは存外知られていないのではないかと思います。

次に、これも日本の入試の1つの大きな特徴だろうと私は思っていますが、センター試験の実施主体は「大学」であるということです。スライド5に、大学入試センター法の第十三条を示しましたが、そこに「大学が共同して実施することとする試験」と書かれています。文部科学省令十八条に、その試験を「大学入試センター試験」とすると書かれておきまして、新しい大学入学共通テストもこのような形で定義されていくのだろうと思いますが、それはともかくとして、「大学が共同して実施する」ということで、「大学」が主語になっているということです。センターは大学が共同して実施する試験のうち、問題の作成や採点等、一括して処理することが適当な業務を下支えする組織であるという位置づけになっているということです。

これをなぜここで申し上げているかというと、「大学が」というところで大学が関わっているのは問題作成の先生方を派遣する、あるいは試験会場を提供するというあたりになっているわけですが、今の入試改革の時にどういう入試にしていくべきかということは大学がむしろもっとイニシアティブ

をもって引っ張っていくべきではと思うところがあります。最近は、「大学入試センター」試験という名前が邪魔しているのかもしれませんが、センター「が」実施する試験を大学が利用してあげているという雰囲気があって、問題作成の先生方も大学がなかなか出してくれなかつたりもしております、その確保が難しくなっております。

あと、十三条はセンターの業務を規定している条項ですが、その業務の1つに「大学の入学者の選抜方法の改善に対する調査及び研究を行う」という項がありまして、敢えてこの部分を私は強調しておきたいと思えます。科学的、客観的な調査研究の知見に基づいて、センター試験、共通テストを行っているということが、外から言われる通り従属的に共通試験を実施するだけのセンターではなく、独立行政法人という名前がついておりますが、その「独立」たるゆえんになっていると思っております。

次に、センター試験の問題作成のスケジュールの例を見ておきたいと思えます（スライド6）。新しい大学入学共通テストに関しては、昨年の3月に高校の学習指導要領が告示されたところから、ほぼセンター試験の問題作成スケジュールにおおよそ対応させたものを最下段に参考として記載しておきましたのでご参照下さい。上段の方は、今までのスケジュール例となりますが、新しい学習指導要領が告示されて、ほぼ7年間かけて新しいテストが実施されることになります。7年というのは、実際に教科書ができるのに4年程かかり、それから3年間の年次進行が始まって、その最後に試験が

行われるという流れから来ております。その間に、まずは、高校、大学の代表者、関係者から成る委員会などが構成され、大所高所からどういう試験にするかという議論が始められ、試験教科・科目などが定められます。さらにそれぞれの試験を設計していくことになりますが、その際には、大学の専門の先生方が中心の委員会が科目ごとに設定されて、どういう問題構成にしていくかといったことが具体的に議論されていきます。そして最後に、やはり、大学の専門の先生方が委員となる問題作成の委員会において、問題が作成されていくという手順がとられています。そういう段階を踏んで試験が作られますから、7年もあれば十分に時間がありそうに見えますが、そうそう余裕のある日程になっているわけではないということがおわかりいただけるのではないかと思います。

スライド7は、そのスケジュールの要点をまとめておきましたが、2020年度に新テストが始まって、4年後の2024年度から学習指導要領の改定に対応した試験が始まるというのは、スケジュール的には簡単なことではないということをここにまとめておきました。スケジュール的に厳しくなる1つの理由は、「緊急対応用試験」も作らなければいけないということで、これはコストもかかることなのですが、リスクマネジメントとして、大きな事故や問題漏えいが起こった場合に出動させるべき「緊急対応用試験」は作成しておかざるを得ないだろうと思えます。今までそれを出動させたことはありませんが、本試験規模で準備する必

要がありますから、大きなコストがかかりますし、また、本試、追再試に加えてもう1セットを作らねばならないという大きな労力もかかってくることとなりますから、4年、4年で、新テスト開始、新学習指導要領対応試験開始というスケジュールはなかなか大変なことだということも、あまり共有されていないことかと思えます。

先ほど、大学の専門の先生方が科目ごとに委員会を構成して、問題の構成などを検討するという事に触れましたが、新テストは、また多少なりとも違った体制でやっていくことになるのではと思いますが、その委員会は、センター試験では「調査研究委員会」と呼ばれておりました。スライド8は、英語の調査委員会の最終報告の構成例です。現行のセンター試験の問題構成に関する最終報告でありまして、平成26年の3月に出版されたものです。これは公開されるものとは位置づけられておりませんので、皆さんと共有してもいいだろうと思う主立ったところをピックアップしておきたいと思えます（スライド9）。

まず、その最終報告の最初の章には、問題作成の基本方針が書かれております。既に、平成26年時点の新学習指導要領でも「4技能の言語活動の統合をはかる」といったことが書かれておまして、センター試験の基本方針として「4技能の総合的・統合的運用能力を測定する問題作成を志す」ということが挙げられております。また、4技能重視の流れの中で、たとえば、筆記試験、リスニング試験の試験時間を変えるといったことも提案されておりました。ただ、この点

は、他の外国語科目との関係もありますので、実現はしておりません。また、4技能を意識していますから、話す試験の導入も当然議論されていたわけでありまして、しかしながら、「実施面で現実的ではないので話す能力の測定は直接行わない」と書かれております。

調査研究委員会の最終報告には、その基本方針に基づきまして、問題内容についても具体的に規定されております（スライド10）。たとえば、様々な英語が国際的には使われているので、日本の高校の英語は北米の英語が中心ですけれども、それにとらわれる必要はないということも書かれております。他のイギリス英語や非母語話者の英語を取り入れることも考慮してよいと書かれておりますが、この辺は公平性の観点から試験問題の「点検」の過程で意見が出てくるところでもありまして、最終的なセンター試験においては、なかなか北米英語から外には出られないというのが現実かと思えます。

センター試験の「点検」について、スライド11にまとめておきました。問題作成は「教科科目第一委員会」が担当しております。我々は単に、「第一委員会」と呼んでおります。その第一委員会が作成し、改訂していく問題を、ほぼ第一委員会のOBで構成される「教科科目第二委員会」が点検することになります。第二委員会は、問題の改訂過程において三回ほど点検をしますが、そのほかに、「点検協力者」と呼ばれる高校教育関係者によるチェックも二回ほど行われます。さらに、科目横断的にチェックする第三

委員会の点検がやはり三回程度行われております。これだけ重層的な点検体制の下、綿密な点検が行われているにもかかわらず、試験冊子が完成後の校閲などで、問題訂正が毎年生じます。試験で完べきというのはそれだけ大変なことだということだと思えます。

試験実施後、さらに試験問題評価委員会がありまして、その評価結果はホームページに掲載されております。高校の科目担当の先生方、教科教育の学会などから評価をいただいております。それを受けて、第一委員会のリフレクションも行われております。また、問題は公開され、すぐに新聞紙上に載りますから、各方面から多くの問題照会が来ることとなります。それに対しても、第一委員会を中心に回答案を作成し、センターを代表して試験・研究統括官名で1つひとつ丁寧な回答に努めているところです。それはまた、試験問題に関わる1つの評価情報として、次の試験問題作成につなげていただいております。

科目ごとの問題作成基本方針のみならず、センターも全体的に問題作成要領を作成して、第一委員会の委員の先生方に周知徹底を図っております。その問題作成要領自体も非公開となっておりますが、その基本方針などは公表してよいことになっておりまして、その一部を紹介しておこうと思えます。まず、スライド12に掲げましたように、まずは、学習指導要領・教科書に準拠することということが記載されております。センター試験は、スライド5に示したセンター法の十三条にも記載されているとおり、「高

等学校の段階における基礎的な学習の達成の程度を判定することを主たる目的」とする試験でありますので、第一に求められる要点となります。ただ、学習指導要領に則しているということはどう捉えるかは、存外難しいことでありまして、センター試験はあくまで、高校卒業資格を判定する試験ではなく、大学教育に適応していくことができるかを判定するための大学入試ですから、教科書にある演習問題や Exercise とは基本的に異なる、大学教育の視点からの入試問題であることが期待されております。そういう難しい課題を問題作成の先生方にはお示しして、それにチャレンジしていただいている次第です。

それにも関連することですが、センター試験でも既に、「基礎的事項の理解の程度を見るほか、思考力や応用力を見る問題」を出題するようにお願いしております。スライド13は、英語の試験におけるそのチャレンジの例となる問題と思われるものを取り上げてみました。英語の第3問の一部ですが、1つの段落が提示され、それを構成する4つの文にアンダーラインが引かれており、その中で段落の主旨からしておかしな文を選びなさいという、平成26年度試験から新たに出題された問題です。よい文章をどのように書くかということを説明することは、我々でさえそう容易なことではないことですが、説明できなかつたとしても、よい文章を書くことはできます。そのような理解は、心理学では「潜在的な理解」と呼ばれたりもしております。その理解の程度を知るためには、ある解答のよしあしを評価させたり、

この問題のように文章のよしあしを評価させるという事例が、ここに挙げた論文などでも紹介されておりまして、そういう理論的な背景をもったチャレンジもなされてきております。

そのほか、センター試験の大事なポイントとして、公平性の問題、正解の一意性の課題なども、問題作成要領の基本方針に示されております(スライド 14)。今年のセンター試験でも、正解の一意性に関しては、正答選択肢の追加が本試験、追再試験で 1 つずつ出てきてしまいましたが、第二委員会の点検では最も力点が置かれる共通試験問題作成の基本的課題となります。

もう一点、共通試験は、極端な難問を回避し、適切な難易度を持つことが要請されるということも示されております。適切な難易度というのがどの程度の平均点となるべきかは、センターとしては具体的には公表してきているわけではありませんが、基本的に、平均点 60 点を目指しているということは皆さんが既に共有していることかと思えます。

英語の平均点について、共通 1 次から昨年のセンター試験までの推移をグラフ化してみたものがスライド 15 です。それこそ、項目データベースを作って、そこに IRT (Item Response Theory: 項目反応理論) に関わる項目パラメータなどの情報を蓄積できていれば、それによって難易度をコントロールすることは比較的やりやすいのですが、ハイステイクスの選抜試験では、問題がすべて公表されてしまう日本の試験文化の下では、なかなか項目データベースの秘匿

性を保つことが難しいということもあります。ましてや、項目パラメータを推定するためには予備調査も必要となりますので、ある程度の規模の予備調査を行う際に問題項目が露出される範囲はそう限定もできないという背景もあって、いわゆるアイテムプール方式は我が国の共通試験ではおいそれとは採用され得ないというのが現状です。ですから、平均点が 60 点になるように問題を作成するという事は、問題作成の先生方、第一委員会の名人芸に頼ってきているということです。このグラフを見ますと、共通一次の最初の頃は、かなりばらつきも大きい印象がありますが、センター試験に入って徐々に安定してきて、こここのところ、2017 年度試験が 123.7 点、昨年の 2018 年度試験が 123.8 点、年行われた 2019 年度試験の英語の平均点も 123.3 点という具合で、200 点満点で、零点数ポイント程度しか変わらない平均点が続いていますのは、私からしますと驚異的な安定度であると思えます。

ただ、なぜ平均点を毎年揃えなければいけないかということは、案外知られていないのではないかと思います。もちろん、理科や地歴公民など、選択科目間の難易度を揃えるということもありますが、それ以外に、大学が認めれば、センター試験は 3 カ年の得点を利用できることになっているということがあります。もちろん、その年の試験を受けることを求めている大学が多いのですが、その年の試験を受けなくても過年度の成績が使えるということがありますので、難易度はできる限り毎年揃ってなければまずいということがあるわけです。

ただ、ここで1つ注意していただきたいことは、平均点が安定してきているのに対して、グラフのスケールの関係で見にくいかと思いますが、標準偏差が増加傾向にあるということがあります。この要因を探ってみますと、1つ、浪人、いわゆる既卒者と現役の平均点の差が開いてきているということが出て来ました(スライド16)。以前は、それほど大きな差が両者に見られていないのですが、既卒者の平均点が上昇傾向にあるように見て取れます。実は、スライド17にありますように、センター試験の現役受験者の漸増傾向に対して、浪人の数は減っている傾向が見られます。最近では、現役志向が強まって、浪人は避けたいという風潮があると聞きますが、そのなかで既卒者は、目指す大学が明確で再チャレンジするという受験生に絞られてきていることが想定されますので、平均値が高くなってきているのではないかと考えられます。

一方、現役は、最近では、センター試験の出願は10月上旬となりますが、その後、AO入試や推薦入試などで合格して、センター試験を受ける必要がなくなったとしても、高校の教育的指導として、センター試験は受けて来るように言われるということがあられるようで、「記念受験」などとも言われているようですが、センター試験を受験はするものの、その成績を出願に利用しない現役生が増えているということがあります。

スライド18は、研究開発部の内田照久教授が中心になって進めている研究ですが、センター試験を受験して、その後の大学出願時にセンター試験の成績を使っていない

「センター試験未利用」受験生が22%、10万人くらいいるということが見出されています。4分の1近い数です。そういう「センター試験未利用」受験生の英語の点数を見てみると、スライド18の右側のグラフがそのようなのですが、かなり低い得点部分にピークがあり、平均点がある程度は下げる方向に寄与してしまっている可能性が示唆されます。「記念受験」と呼ばれるように、この成績未利用受験者は、現役が多く占めておりまして、未利用者の9割以上は現役となっています。共通試験の得点というのは、問題の内容的な難易度で規定されるだけでなく、受験者の学力レベルにも依存して決まってくるものですから、受験者層が変化してきている中、平均点を維持していくことは容易でないことがおわかりいただけるのではないかと思います。

また、この点に関して、センター試験の1つの課題が浮き彫りにされると思われれます。未利用受験者の増加ということも含めて、共通試験全体の受験生が増える傾向にあるということは、受験生の学力レベルの多様化が進んできていることは明らかであろうと思われれます。今般の高大接続改革の議論の経緯を遡ってみますと、共通テストも基礎レベルと発展レベルに分けるという議論もあったくらいでありまして、共通テストのバージョンは1つで足りるのかという問題です。これは、今後の研究開発課題として引き続き我々は取り組んでいかなければいけないことだろうと思っております。

共通試験に関わる研究開発課題は他にもいろいろありますので、スライド19に思い

つく主な課題をリストアップさせていただきました。これらの研究課題についての研究を深めていくためには、まず大事なことは、最近の入試の不正に関わる社会問題を見ていまして、入試というのは何もかも秘匿にしなければいけないという日本の風土がありますが、個人情報など決して出しはけない情報はもちろんあるものの、入試研究に関わる情報はもっと透明化していくことが求められる時代になりつつあるのではないかと思ったりもしております。透明化することで、研究においても、大学・高校・入試センターといった幅広い連携協力を密にしていくことができるようになるでしょうし、また、それを通して、よりの確な研究成果に結びつけられるということも期待できるだろうと思います。

もう1つ、この最下段に、英語に関する研究課題を記しておきましたが、成績提供システムに導入される膨大なデータをぜひしっかり分析して行ってほしいと思います。成績提供システムに参加する民間試験の比較研究等を進めることは、目的外ということが出て来たり、民間試験の淘汰につながったりする恐れもありますので、果たして上手くできるかどうかはわからない部分もありますが、共通テストに本気で民間試験を取り込むためには避けられない研究課題であると思いますし、入試におけるまさに well-informed decision につながることであるかと思しますので、是非、センターの研究開発部中心に研究を進めていただいて、その研究成果を公表・共有できればと思っております。

最後に、南風原先生から出された論点4にかかわって、これからの共通試験における英語の位置づけについて一言触れておきたいと思います(スライド20)。英語は受験者が多く、その得点は経験的に総合学力的な得点となっている印象があります。毎年、他科目の理科や地歴公民の得点調整をすべきかどうかを最初に検討する時に、それぞれの科目の受験者の英語の平均点に差があるかどうかをチェックしたりもいたします。それは、理科や地歴公民の科目受験者層の学力差があるのかどうかを見当づける1つの拠り所になるということです。得点調整は問題の難易度によるということが前提となりますので、学力差を捨象して平均点を捉える必要があり、それを直観的に検討するための非常にいい目安になっているということです。これは私の前の統括官であられた荒井克弘先生が、先ほど紹介のあったブックレットで書かれていますが、共通テストを扇子に例えれば英語がその要に当たるという言い方をされており、それは私自身もまったく同感するところであります。いずれにしても、共通テストにおける英語の試験は、英語だけで検討を進めればよいというものではなく、共通試験全体のあり方を踏まえたうえで、英語という科目のあり方を改めて検討する必要があるのではないかと私は思っております。

私からは以上です。どうぞご清聴ありがとうございました。

1



2

●『センター試験』という文化資産

- 大学入試センター試験 …… 2020年1月実施で終了（来年1月が最後）
- 戦後の共通試験
 - 進学適性検査（1947～1955）
 - 能研テスト（1963～1968）
 - 共通第1次試験（1979～1989）
 - センター試験（1990～2020）
 - 大学入学共通テスト（2021～）
- 日本の試験風土において、40年に及ぶ共通1次、センター試験の継続的实施
 - 共通試験の日本ならではのノウハウの積み重ね
 - 積み重ねられた資産を、今後に活かすことが肝要（課題はまだ山積しているが…）

2

3

●センター試験は大規模試験である

- 50万人を超える受験生（広範な多様性）
約700試験場・約10,000試験室での試験実施
- 確率的にかなりの希現象でも実際に起こり得る
 - ✓ 配慮を要する受験生への対応：点字問題のみならず、マークするのではなく、数字をチェックする方式や数字を書き込む解答方式にも対応している。
 - ✓ 受験生のマークの確認：マークシートを、読み取り感度を変えて2度読み込み、その結果が異なる場合（0.1%オーダー）には、大学入試センターの教職員が目で見つチェック。

3

4

●共通一斉試験へのチャレンジ

- 共通一斉
 - 一度の試験で50万人の入試成績を 公平に漏れなく 収集・管理する必要
 - ✓ リスニングの2回読み：限られた時間内に逆戻りできない流れの中で、日常的雑音などが偶然入る可能性を考慮しての措置というのが一つの理由。
 - ✓ リスニングの試験時間：試験時間を最後にしているのは、ICレコーダーなどの不具合や操作ミスによる中断の際に、再開テストの時間を確保するため。

4

5

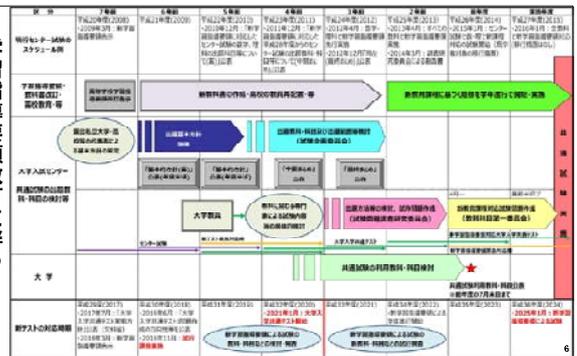
●センター試験の実施主体は「大学」

- 大学入試センター法 第十三条（センターの業務）
 - 一 大学に入学を志願する者の高等学校における基礎的な学習の達成の程度を判定することを主たる目的として **大学が共同して実施することとする試験** に関し、問題の作成及び採点その他一括して処理することが適当な業務を行うこと。
 - 二 大学の入学者の選抜方法の改善に関する調査及び研究を行うこと。
- 文部科学省令 第十八条
 - センター法第十三条第一項第一号の試験の名称は、**大学入試センター試験** とする。
 - 2 大学入試センター試験は、**各大学がセンターと協力して、同一の期日に同一の試験問題により、共同して実施するものとする。**

5

6

●学習指導要領改訂に伴う
試験改訂に
伴う
スケジュール例



6

7

●共通試験改訂に要する時間・コスト・労力

- 国公立大学の代表者・高校の代表者等の協議による大所高所からの基本方針「案」の策定 → 大学入試センターにおいて共通試験の試験教科・科目など、基本方針を固める …… 2～3年
- 科目の専門家（**大学教員**）から成る『新教育課程試験問題調査研究委員会』による具体的検討 …… 2～2年
- 『教科科目第一委員会』（**大学教員**）による問題作成と第二委員会（第一委員会OB）による点検 …… 2年
 - + 初年度は**緊急対応用試験**（本試験と同規模）作成
 - 改訂内容によっては過年度生のための**移行措置**
- ★ 大学入学共通テスト開始と学習指導要領改訂への対応が連続することは、**労力的、コスト的に、そう容易なことではない。**

7

8

●『新教育課程 試験問題 調査研究委員会』による英語試験の検討例 = 最終報告書

◆最終報告書の構成（平成26年・2014年3月）

- ① 問題作成の基本方針の策定
新学習指導要領の確認 → 基本方針
- ② 試験問題の出題範囲・内容・程度等の具体的検討
学習指導要領に定められた範囲を基本として
- ③ 試作問題の作成
リスニングでは、イントネーションに関する問題にもチャレンジ etc.
- ④ 問題作成委員会・点検委員会の構成案の検討
第一委員会の筆記部会・リスニング部会の委員構成案
点検に関わる第二委員会の構成案

8

①平成28年度以降の英語試験「問題作成の基本方針の策定」(調査研究委員会『最終報告』より)

- **新学習指導要領の確認**：……コミュニケーションのなかで、自らの考えなどについて内容的にまとまりのある発信ができるよう、……「聞くこと」や「読むこと」、「話すこと」や「書くこと」を結び付け、**四つの領域の言語活動の統合を図る**……4技能を統合的に活用できるコミュニケーション能力を育成
- **センター試験の基本方針**：……中学校・高等学校で約**3,000語**を学習……使用語彙や文法などの言語材料に留意しつつ、**4技能の総合的・統合的運用能力を測定する**問題作成
 - ✓ 出題範囲は、コミュニケーション英語Ⅰ、コミュニケーション英語Ⅱ、英語表現Ⅰ
 - ✓ **筆記試験140点(70分)、リスニング試験60点(30分)を提案**
 - ✓ 言語と文化に対する理解を求める(ただし、文化そのものの知識は問わない)
 - ✓ 積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度が背後に感じられる問題作成
 - ✓ **実施面で現実的ではない** → **話す能力を直接測ることは行わない**

②試験問題の出題範囲・内容・程度等の具体的検討(調査研究委員会『最終報告』より)

- 学習指導要領に定められた範囲を基本
- **さまざまな英語**が国際的に広くコミュニケーション手段として使われている実態に配慮
 - ただし、一定の狭い地域にしか通用しない語法、綴り、発音等は、使わない
- 英語を英語のまま直接理解したり、表現したりする力を測る問題を工夫
- 大問数・大問に含まれる小問数・試験時間・配点等の設定
- 筆記試験の総語数(分量) 3,500~4,000語を基本 *etc.*
 - ✓ なお、高校の英語教科書は、主に北米英語で書かれており、教科書の録音も北米英語の母語話者で行われているが、**広く世界で使われている英語を鑑みれば**、北米英語に限定する必要はなく、イギリス英語、非母語話者の英語を取り入れることも**考慮してよい**
 - **試験問題の点検の過程**で、日本で英語を学ぶ受験生の立場からの指摘により、基本的に、北米英語中心となっている(公平性の観点)

●センター試験の重層的問題チェック体制

- 問題作成 = **第一委員会**(教科科目第一委員会)
 - vs. **第二委員会**(問題作成OBが委員)
 - + 高校教育関係者等を中心とする「**点検協力者**」によるチェック(通常、第2委員会3回・点検協力者2回)
 - この他、科目横断的にチェックする**第三委員会**による点検
- 試験実施後の**試験問題評価委員会**による評価
 - <http://www.dnc.ac.jp/data/hyokka.html>
- 問題公開による各方面からの**問題照会**

●センター試験問題作成の基本方針(1)

- 点検における評価観点 ← センターの「問題作成の基本方針」
 - ただし、試験方法や個々の問題は、**独立に評価できるものではなく、試験全体の枠組の下で**、評価結果は違ってくる。
- **主な問題作成基本方針**
 - ① 高等学校学習指導要領に準拠し、**学習指導要領解説及び教科書に基づく**
 - 大学入試として、教科書にある練習問題、Exerciseなどは異なる、「大学が実施する入試問題であることが期待される。
 - ② 基礎的事項の理解の程度を見るほか、**思考力や応用力を見る問題**を出題

●「潜在的理解」を測る問題へのチャレンジ

- ◆ **平成26年・本試験 英語・第3問B**
- ◇ **高等学校教科担当教員による評価**
 - 今年度は「パラグラフのまとまりをよくするために取り除いた方がよい文」を追究し、**新しい形式が出題**された。昨年までは異なる問題に戸惑った受験者もいたかもしれないが、**論理的でまとまりのある文章を書くために必要な力を見ることのできる良問**である。英文は基本的に平易な語句を使って書かれており、文脈も分かりやすいので、**普段から論理的に文章を書くことを心掛けている受験者にとっては、解答しやすい問題**であったはずである。
 - (①・③ 正答率3/4強・6割強)
 - 文章の書き方などについて言葉で説明はできなかったとしても、適切でない部分はどこであるかは指摘できるということで、文章の推敲可能性にはつながると考えられる。ある種の**メタ認知**に関わる問題と位置づけられる。 = **潜在的理解**

① どの国が最も人口の増加が速いのか、またどの国が最も人口の減少が速いのかを調べよ。最も早く減少し、最も遅く減少する国を、それぞれ下線し、①から③までを答えよ。

② どの国が最も人口の増加が速いのか、またどの国が最も人口の減少が速いのかを調べよ。最も早く減少し、最も遅く減少する国を、それぞれ下線し、①から③までを答えよ。

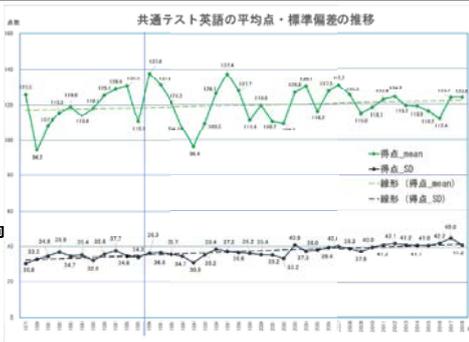
③ どの国が最も人口の増加が速いのか、またどの国が最も人口の減少が速いのかを調べよ。最も早く減少し、最も遅く減少する国を、それぞれ下線し、①から③までを答えよ。

●センター試験問題作成の基本方針(2)

- ③ どの教科書によって学んだかによって**不公平が生じないように**配慮すると共に、思想、信条、宗教、民族及び性等に関する内容、社会的に問題とされやすい内容の取扱いについては、**教育的に公平**であることに留意
- ④ 公表正解選択肢のほかに正解となることがないように注意 (**正解の一意性**)
- ⑤ 極端な難問は**回避**したり、問題数が**試験時間に適切な分量となるようにする**など、**各科目の平均点が60点程度となるよう配慮**

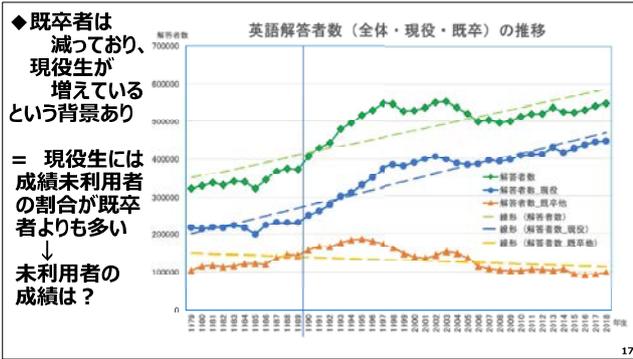
●平均点60点維持へのチャレンジ = かなり安定?

- ◇ **平均点維持の配慮**
 - ・ 過年度成績利用可能
 - ・ 広範囲の識別力の確保
 - ・ 高校教育への影響 *etc.*
- ◇ **標準偏差の増加傾向**



◆ただし、現役と既卒との平均点差が広がっていることに留意





● センター試験の課題の一つ

= 広範の学力層にどう対応するか

➢ 受験生の学力層の広がりのため、センター試験の問題作成では、得点の水準の安定と共に、広範囲にわたって識別力を保持するための努力が積み重ねられてきている。

✓ 資格・検定試験は、資格を与えるかどうかを決める境界において高い識別力をもつ

✓ 共通試験（選抜試験）では、大学・学部等の選抜単位ごとに、個人差を識別する必要があり、広範囲の学力レベルにおいて一定の識別力が求められる

→ 二つないしは複数の難易度バージョンが必要か？ 18

図4 「英語筆記」の出願者層別の学力分布の概

内田照久・橋本貴充・鈴木規夫 (2013). 18歳人口減少期のセンター試験の出願状況の年次推移と地域特性—志願者の2層構造化と出願行動の地域特性—日本テスト学会誌, vol.10, No.1, 47-68.

内田照久・中村裕行・橋本貴充・鈴木規夫・荒井克弘 (2016). センター試験の受験目的の多様化と学力分布の層別特性. 大学入試センター紀要, No.45.

- 入試に関わる研究開発の透明化・活性化への期待
- 大学入試研究成果等の透明化（個人情報を除く）
大学・高校・大学入試センター等の連携協力は必須
 - 共通試験全体に関わる研究課題
 - ✓ 広範な学力層をカバーする大学入試のあり方
 - ✓ 波及効果に関する計画的かつ中長期的追跡調査
 - ✓ 共通テスト受験料のアップを避ける入試方法
 - 共通試験の英語テストに関わる研究課題
 - ✓ 新たな入試メディアに関わる研究開発
入手に頼る試験からCBTへの移行は必須
 - ✓ 異なる民間試験の得点比較
成績提供システムに投入されるデータの分析 → 準備必要！
- 19

- 共通試験における「英語」の位置づけ
- 「英語」は、受験者が最も多く、単なる「技能」のみならず、経験的に、「総合学力」的な得点となっている印象
- Cf. 荒井克弘 (2018). 高大接続改革の迷走. 南風原朝和 (編著) 検証 迷走する英語入試—スピーキング導入と民間委託. 岩波ブックレットNo.984, 89-105.
- 「共通テストを 扇子に例えれば、英語は裏に当たる」
- 他科目・受験者層の得点比較の見当づけのための核
= 理科・地歴公民の得点調整検討の際に、科目選択群の学力レベルの判断はその群における「英語」の平均点差をまずは見てみる。得点調整は、学力差ではなく、問題の難易度差による得点差である場合に行う。
- 共通試験全体のあり方を踏まえた上で、「英語」という「科目」のあり方を改めて検討する必要があるのではないか
- 20

センター試験「英語」はどのような試験だったか

大学入試センター研究開発部准教授

荘島宏二郎

南風原：

では引き続き荘島先生、よろしくお願
い
します。

荘島：

本日はこのような場を設けてくださりま
してありがとうございます。大学入試セン
ターの荘島でございます。私からは引き続
きまして、データの側面から英語（筆記）お
よびリスニングについてご説明差し上げた
いと思っております。

ある年度のデータに着目して分析結果を
お示しします。ごく最近のデータです。毎年
の傾向はだいたい定まっておりますのでこ
こ5年程の傾向だと思っております。結構
なのですが、分析をお示しするこの年、志願
者数は582,672人です。ここから年度は明
らかになるのですが、一応伏せさせていただ
きます。このうち、本試験受験者は
582,221人で、英語（筆記）とリスニングを
共に受けた540,276人を分析対象としてお
見せします。ご覧の通りですがほとんどの
受験生は英語（筆記）とリスニングを受けて
います。こちら（スライド2）が主要20科
目の箱ひげ図です。分布の厚みは標本サイ
ズの大きさです。分布が厚い科目ほど受験
者数が多いことを表しています。我々テス
トの分析者が真っ先に気にするのは平均も



大事なのですがデータの散らばりが大事で、
真っ先に気にします。データの散らばりは
標準偏差や四分位範囲で、データの散らば
りの大きさを表すのですが、散らばりが小
さければ学力が高い人も低い人も狭いとこ
ろで似た点を取ることになってしまいます
ので学力の識別装置としてのテストの存在
意義、性能が疑われてしまいます。ですから
標準偏差、あるいは四分位範囲が大きかつ
たテストができた時に我々はホッとします。

箱ひげ図は、真ん中50%はこの箱の中
に入っていますということを示すものです。
たとえばこちらが英語（筆記）の箱ひげ図で
すが、この箱の中に全体のデータの50%が
入っていることを示すものです。この太い
実線は平均点です。細い実線が中央値を表
しています。今100点満点にリスケールし
ていますが元々英語（筆記）は200点満点
なのでだいたい90点から160点くらいの
間に全体の50%がこの中に入っていますと

いうことを表しています。こうして見ると国語の散らばりが少し小さいように見えるかもしれませんが科目特性がありまして、国語はとても学力が高くても高得点を取りにくいのです。またとても学力が低くても低得点を取りにくいという科目特性がありますので、散らばりとしては小さくなってしまいます。しかし、他のセンターの科目と比べてしまうと国語のテストの散らばりが小さく、少し識別力が小さいのかと思ってしまうのですが巷の、自慢するわけではありませんが、巷の国語テストに比べるとセンター国語のテストは性能がいいと思っております。一般に国語や英語のテストのように語学のテストは理系のテストに比べて散らばりが出にくいのですが、つまり識別力が低い傾向にあるのですが、センター英語は十分な散らばりを持つ、識別力の高いテストと言っていいと思います。

こちら（スライド3）は54万人の英語の筆記テストのヒストグラムです。平均はこの年124点だったのですが、最頻値、モードで言うと、152点のところにあります。例年だいたいこういう傾向なのですが、この右のほうのコブは浪人生です。浪人生がざっくり10万人くらいいてその7割8割は男子ですが、こちら辺に浪人男子がベターと張り付いている感じです。当たり前ですが浪人生は勉強している時間が長い分だけ現役生よりも平均的な学力が高いので、浪人生を取り除くと割と左右対称な現役生の分布が出てきます。選択式なので40点以下はとりにくいテストです。しかし学力が高い人はしっかり200点をとれるテストで

す。ですから学力が高い人はしっかり200点が取れて、学力が低い人はしっかり40点くらいはとらせるという識別力の高いテストとなっています。

こちら（スライド4）はリスニングの分布です。この年は少し難しいと言われました。平均点は50点満点中の22点くらいなのですが、最頻値は18点のところにあります。今年1月のセンターリスニングは平均点が約6割だったので、ここ最近の中ではリスニングの難易度が少し落ち着きましたが、それ以前はだいたいこのような分布になっていました。やはり浪人生が覆っていますが浪人生を取り除いてもあまり分泌の形は変わりません。そしてリスニングは全て四択問題ですので適当にマークシートを塗っても12, 3点はとれます。ですから10点以下は非常に取りにくいのですが、10点から50点までにデータがばらつくようなテストになっていると言えます。

こちら（スライド5）は英語（筆記）とリスニングの同時分布です。横軸が筆記で縦軸がリスニングです。相関で言うと0.7くらいです。実は毎年若干の曲線関係があるのですが、この年はその傾向が少し強めに出ています。この年、先ほども見ていただいたようにリスニングのテストが少し難しかったです。ですから、リスニングのテストが下位の学力層を識別するのを少し苦手としてしまった年でした。その分、英語の筆記の試験がここをローラーでならずようにグリグリして、英語の低学力層を識別するというテストになっているということです。一方で英語の筆記の試験は毎年英語の高学力

層にとっては易しいテストです。つまり、筆記のテストは高学力層の識別は苦手としている部分があるのですが、その分リスニングテストが高学力層を良く識別してくれています。いつもこのような相補関係があるわけではないし、こちらも狙ってやっているわけではないのですが、この年は非常に両者の良い相補関係が表れました。英語(筆記)とリスニングが250点満点の1つのテストとして使っても、低学力層から高学力層から大きいレンジに対して識別力の高いテストとしてうまく機能するのではないかと考えています。

なお、この年は現役率は82%で、例年の変動は凸凹しているのですが、先ほど大塚先生のご発表にありましたが、大きく言えば現役率は上昇傾向でして、つまり現役志向率が高まっているので浪人率は下降傾向です。12年前は浪人率が25%くらいだったのですが、毎年凸凹ありますが、毎年0.5%くらいずつ減っていて、今の17%くらいになっています(スライド6)。一口に浪人と言っても一番多いのが当たり前ですが一浪生で、次に多いのが二浪です。三浪、四浪と続いていくわけですが、この年の最長老は85歳の方でした。この方の生まれた時は1933年なのですが、何が起こったかという1月にナチスが政権を獲得し、ヒトラーがドイツ首相に就任しています。3月にはルーズベルトが米国大統領に就任し、ニューディール政策が始まります。同3月に日本が国際連盟を脱退したあの年です。10月にはドイツも国際連盟を脱退です。悪いことだらけな気がしますが12月23日に今の

天皇陛下がご誕生されました。つまりこの年の最長老は天皇陛下と同一年だということです。ちなみに最長老が90歳を超える年もありますので、この年最長老が85歳というのはむしろ若いほうです。毎年受けに来てくれる長老たちが今年も受けに来てくれるとホッとします。逆に受けに来られなくなってしまうと心配になってしまいます。

こういうことをずっと話していただきたいのですが次に行きたいと思います。次に相関構造をお示しします(スライド7)。これは主要20科目の科目間相関行列です。対角線は1.0で黒塗りにしています。白塗りの部分がありますが、制度上、「倫理、政治・経済」と「倫理」、そして「倫理、政治・経済」と「政治・経済」という、同一名称を含む科目どうしを同時に選択受験できないという規則があり、実際は間違っただけで受験してしまう子がいるのですが制度上そうなので、ここは欠測と処理しているために白抜きになっています。

縦に見ていきます。1つ1つ細かく見ていく時間がないので簡単にざっくりご説明してきますが、たとえば国語は相関が高いのは、英語や生物と、特に相関が高いです。それから世界史、日本史、地理という地歴3科目と相関が高いのは物理、化学、生物と言った理科3科目と相関が高いということがあります。続いて公民4科目も理科3科目と相関が比較的高いという構造を持っています。数学は理系科目全般に相関が高く、理系科目の中心的な科目であるという存在感が出ています。理科科目は地歴公民科目、先ほど申し上げたように地歴公民科目と相

関が高いです。もっと丁寧に行きたいのですが全体に相関が概して高いです。

英語（筆記）とリスニングをこちらの図（スライド 8）で見てくださいたいのですが、こちらが英語（筆記）とリスニングの他科目との相関をレーダーチャートで図示したものです。英語（筆記）はご覧のように全方位的に他科目と相関が高いことが分かります。特に地歴 3 科目（世界史、日本史、地理）です。それから数学 2 科目（数 1A、数 2B）と、理科 3 科目（物理、化学、生物）、と特に相関が高くなっています。地学と現社と政経の相関が少し低いのですが、特に地学と英語（筆記）の相関が少し低いのです。地学は受験者数が 2000 人くらいしかいません。ですから受験者層の能力の散らばりが小さいから相関が伸び悩んでいるのかと思ったり違います。なぜかという、地学を選択して受けに来る子たちが、少し学力が低い子たちの割合が多いということです。そういった構造は現社と政経にもありまして、これらの科目を選択して受けに来る子たちの学力が少し低いという事実があって相関が伸び悩んでいます。というのも、数学と英語（筆記）の相関が高いのは、当たり前ですが数学と英語（筆記）が共にできる子が受けに来てくれるから相関が伸びます。しかしそうではないというのはつまり学力が少し低い子が多く受けに来ることがあるからではないかと考えております。

それからリスニングは、筆記と形はほとんど同じなのですが、全科目について 0.1 から 0.15 ほど相関が弱いです。ちなみに男子の方が相関が強めに出て、女子の方が相関

が弱めに出て、それは女子の方が好きな科目が多科目化せずに偏在化しやすいということがあるからだと思います。

今の相関構造を受けて因子分析の結果をお示しします（スライド 9）。因子分析とはここでは学力の成分を細かく見たら一体何成分なのか、学力という心の空間が何次元なのかを探索するための分析手法ですが、学力の成分が 1 成分だと思ったり、2 成分だと思ったり、3 成分だと思ったり、4 成分だと思ったりした場合の分析結果について順次お示ししていきます。選択科目なので半分以上データが欠測しているデータなので、MAR という特別な仮定をおいて分析していますが少し無理がかかっている可能性があるのですがとりあえずお示いたします。まず 1 因子、つまり学力の成分が 1 個、ただ 1 つだと思った場合の分析結果をお示します。1 因子で分析すると非常に 1 因子目の因子負荷量がどの科目も高くなっています。つまりセンターはたくさんの科目を実施しているのですが、総じてある種の一般学力を測定していると言えます。もちろん教科学力は生まれつき備わっているものではなく後天性のもので、この一般学力はある種の勤勉性と言い換え可能です。私学の先生で、センター利用入試で入ってくる子はまじめな子が多いと言ってくれる方がいらっしゃいますが、センターで良い成績を取るためには、ある種の持続性を伴う、勤勉性が必要だと思っています。会場には私学の関係者もいらっしゃいますが、センター利用入試はまじめでいい子が取れますので、引き続きセンター試験

及び大学入学共通テストをご利用いただければと思います。

因子数 2 で分析すると、1 因子目は相変わらず全科目に負荷が高いので基礎学力と名付けました。2 因子目が理数科目に負荷がかかった因子が出てくるので理数学力と名付けました。図で表しているのは後でもう少し正確に述べますが、階層因子分析という形の特徴的な結果です。因子に階層性がある時に特徴的な構造です。階層のどちらが上でどちらが下かということまでは分析が教えてくれないのでこれは分析者の、私の解釈ですが、このような学力の構造になっているのではないかと考えています。時間がないので 3 因子の結果を飛ばして 4 因子のほうに回ります。4 因子で分析すると、基礎学力、理数学力、古典学力、英国学力とも呼ぶべき因子が抽出されてきます。階層性については私の解釈ですがセンター試験から分かる学力の構造は各種の学力が並列的に存在しているのではなく階層構造を示していると思っています。このうち英語と国語は、あくまでも私の解釈なのですが、基礎学力のさらに下の基礎を構成している気がします。理由はあまりたいしたことではありませんが国語とくっついているということで下に配置しました。

階層因子分析（スライド 10）というのは 1 つの一般因子、ここでは基礎学力ですが、ドカンと全科目を説明しておいて、一般因子で説明できない残りの科目の相関を階層因子という因子で説明するという、この構造を階層的因子分析と言います。因子間に階層性がある時に出てくる構造なのですが、

先ほど申し上げた通りどちらが上でどちらが下かというところまでは分析が教えてくれないので、この上下関係はあくまでも私の解釈です。

最後に私の発表をまとめさせていただきます（スライド 11）。1 つ目は、大塚先生からもお話がありましたが、英語だけではありませんがセンター試験の問題は教科教育が専門の大学の先生が 20 人ばかり集まって、2 年がかりの議論を経て作っていたているものですので、テストの内容的妥当性で言えば、我が国最高の品質だと思っています。私は主に英語部会とリスニング部会に出入りして、交流させていただいております。毎年分析結果を作問の先生方にフィードバックしていますが、そこでは今日よりもっと突っ込んだ資料を持って行って先生方と議論させていただいています。センターで問作やったださる先生はもちろん教科教育の専門家ですが、必ずしもテストの専門家ではありません。センターで問作をやっていただいている 2 年間で私のような人間と交流し、多少なりとも教育測定、教育統計のことを知っていただき、持ち帰って本務校で生かして下さるとうれしいと思っています。ぜひ会場の先生方もうちに来て問題作成をやっていただきたいと思っています。お待ちしております。

センターではどこの問題作成チームも大変熱心で活発です。しばしば問作チームの数人が意気投合して研究チームへ発展して科研費を取ったり論文を書いたり学会発表しています。私も何度も誘われて一緒に研究をしましたし、現在もやっています。問作

チームもセンターで組織し、20人からの同一科目の専門家を一堂に集めることで基本的にはそこで問題作成をやっていただくのですが、しばしばそれだけにとどまらずそこで研究者どうしの創発が起きています。センターは国内の教科教育研究者のネットワークを維持することで、国内の教科教育研究を側面から支援しています。引き続きセンターに対する厳しくも温かいご批判やご支援をお願いいたします。

2点目ですが英語（筆記）、リスニングは言うまでもなく現在最大の受験者科目です。大塚先生から荒井先生のお言葉を借りる形で、英語は教科教育の扇の要であるという表現がございましたように、教科科目の女王たる地位に君臨しています。実際に相関構造や因子分析から見ても教科科目の評価構造の中心的役割を果たしています。もう一つは相関構造の中心であるがゆえに、一般学力あるいは勤勉性の代表的な指標であるということです。センターの中でデータ分析をする時に、手っ取り早く学力の変数を作ろうと思った時は、我々は英国数の和得点を使います。当たり前ですが、それだけ英国数は学力の代表性が高いのですが相関構造を見ると英語の筆記はその3科目の中でもより中心的な役割を果たしていると言っていると思います。

最後に識別力と信頼性が非常に高いです。アルファ係数で言うところの年はわずかに届きませんが0.9を超えるときもあります。ちなみに今年は0.9を超えました。

ありがとうございます。以上で私の発表を終わりたいと思います。ご清聴ありがと

うございました。

南風原：

荘島先生、どうもありがとうございます。以上が前半ということで、前半は大塚先生、荘島先生、私を含めてある意味1因子で、心理統計、テスト理論を専攻しているメンバーとなります。前半のお二人は論点の4と5、すなわちセンター試験はどのような試験であったのかということを中心にお話しいただきました。後半は高校英語教育や共通テストとしての民間試験の課題に焦点を当てた議論を行いたいと思います。これから少し休憩を取りますので、質問用紙の前半部分をぜひお書きいただいております。後半は15時5分に開始しますので、それまでに着席ください。よろしく願います。

1

2019年2月10日
東京大学高大接続研究開発センターシンポジウム

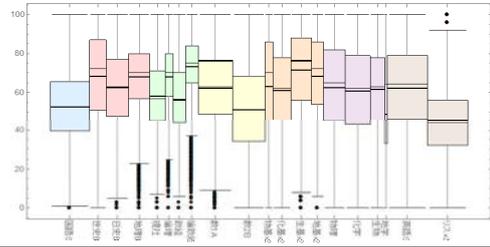
センター試験「英語」は どのような試験だったか

庄島宏二郎
大学入試センター研究開発部
shojima@rd.dnc.ac.jp

2

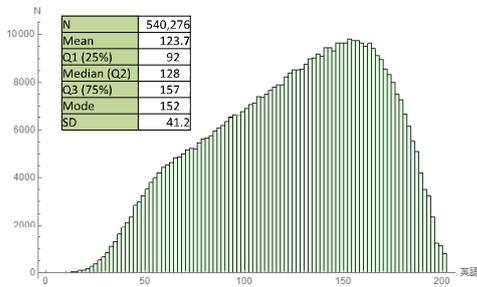
本試英語・リス受検者の科目得点

- 志願者582,672人
- 本試験「英語」受検者546,612人
- 本試験「リス」受検者540,290人
- 本試験「英語&リス」受検者540,276人



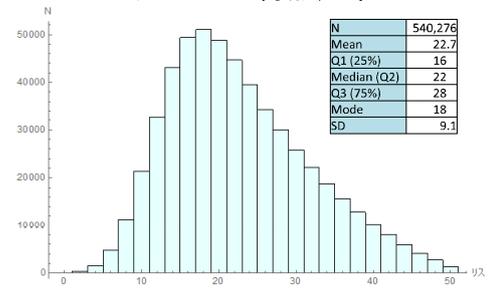
3

英語(筆記) 得点分布



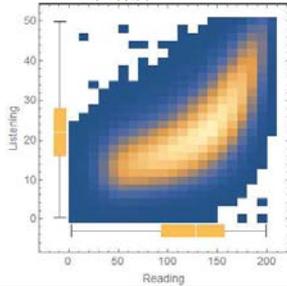
4

リスニング 得点分布



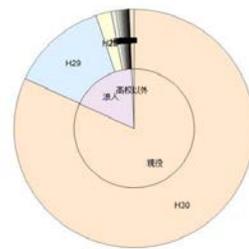
5

密度分布 本試受検者 英語×リス



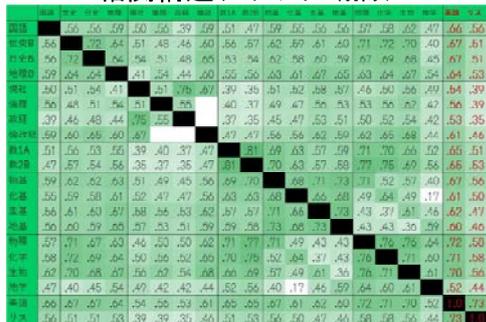
6

現浪	N	割合(%)
現役	442,530	81.9
浪人	94,144	17.4
高校以外	3,602	0.7



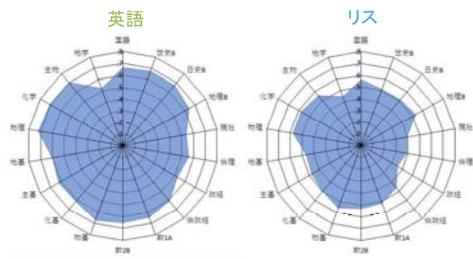
7

相関構造 (ペアワイズ削除)

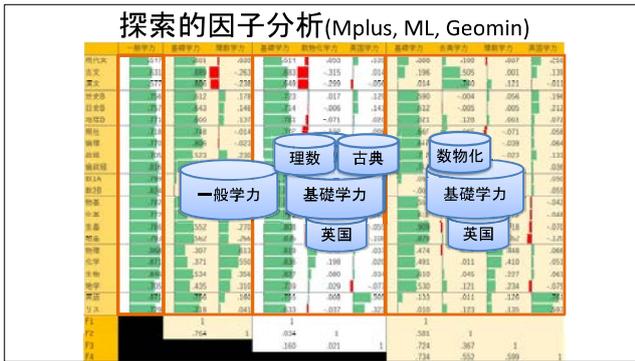


8

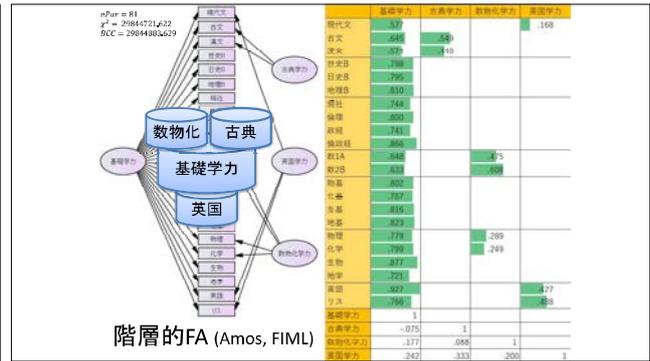
相関構造 (ペアワイズ削除) 英語・リス with 他科目



9



10



11

- センター試験「英語・リス」のまとめ
- 熱心な作題部会の先生方の丁寧な作題
 - 研究チームへしばしば発展
 - 最大受験者科目
 - 教科・科目の相関構造の中心的役割
 - 一般学力 (or 勤勉さ) をある程度代表
 - 識別力と信頼性(アルファ係数)が高い

12

ご清聴感謝いたします

大学入試センター
 荘島宏二郎

高等学校から見たセンター試験と民間試験の「英語」について

山口県鴻城高等学校教諭

松井孝志

南風原：

それでは後半を始めたいと思います。松井先生からどうぞよろしくお願いいたします。

松井：

山口県から参りました松井孝志です。私の方からは、高校教員の側から見たセンター試験の英語と民間試験の英語ということで今回南風原先生の方から依頼を受けたのですが、主にセンター試験の話をして最後に民間試験の特にライティングに関して言及したいと思います。

私は都立高校2校で15年、都内の私立女子校と共学校6年、そして今の現任校の地方、山口県の私立高校です。名称に県と入っていますが私学です。そこに12年ということで、もうすぐ33年の高校教員生活が終わろうとしています。私の今いる山口県鴻城高校は、1学年200人強の学校規模で、そのうちセンター試験を受験するのは毎年1割程度です。今年のセンター試験の現役志願率が44%と聞いているのですが、日本中の高校3年生なら高校3年の44%しかセンター試験を志願していない、つまり56%、半数以上の高校3年生にとっては、センター試験は無縁なわけです。しかも私の学校は今1割程度しかセンター試験を受験して



いません。しかし受ける人一人にとっては重いです。ですからそういったことも併せて考えていただければと思います。

私の方からの問いかけとしては、先ほども荘島先生の方から統計的な話は十分出ていて、荘島先生の話聞く限りはセンター試験でいいのではないかという気持ちが私も非常に強いのですが、あまり言われな、「ことば」そのもの、英語そのものについて少し考えていただきたい(スライド2)。もう一つは、今日私が言うような分析は、問題が公開されて正解が分かっているからこそできる考えであって、これが民間試験になって一部ブラックボックスとか問題を持ち帰れないとなった場合にどうするのかも考えていただきたい。

いろいろな資料がセンター試験を考えるにあたって高校側にはあるわけですが、一番は試験問題、大学入試センターの公式サイトに公開されるのはかなり経ってからで、今はたとえばこの1月に行われたセ

ンター試験であればメディア大手の新聞等に問題が公表されるという形になっていると思います（スライド 3）。それから業者、予備校と言ったところが生徒の自己採点の集計を大量に全国規模で行って、40 万人、50 万人規模で集計して、それがデータとして得られる。それから、大学入試センターの公式サイトにも載っている試験問題評価委員会報告書、そして、予備校等が教科ごとに特に開催しているセミナーといったものでセンター試験はこういう問題が出るからこういう指導をしたほうがいいのではないかということが行われています。あまり多くはないですが、英語としてセンター試験がどういうテストなのかということについて論文にもなっていますが、その他には学習指導要領と解説、これは先ほど大塚先生の話にもありましたが出題が学習指導要領に則っているかといった切り口で我々も見わけます。毎年これ（スライド 4）が評価報告書に出るわけですが誰が作っているのかといつも見ながら思っています。というのは私が感じるのとかなり違うからです。

こちら（スライド 5）に要約で私が気になるところを赤で出しました。試験の総得点に対してそれぞれの設問が識別としてそれぞれ機能しているかというのは、統計を取ると個々の問題に多少のノイズがあっても吸収できると思います。ところが先ほど見たように、対策には問題が生じてきます。次の学年の高校生、今の高校 3 年生に対して高校 2 年生、高校 1 年生は前の年に出た問題を勉強するわけです。そうすると勉強するにあたってノイズがあると、ノイズをノ

イズとして排除できない学力層の子は全部ひっくるめて受けるわけです。高校側で指導している私としてはそれは避けたいので、私は先ほどのこういう高校側からの報告書に頼らず自分でも毎回問題を解いて、自分の学校の生徒で 3 年生で受験したものの再現答案を作ることとずっとやってきました。

たとえばセンター試験の出題範囲はこうなっています（スライド 6）。今は高等学校で必修なのはコミュニケーション英語 I のみです。ですからそれ以外の科目は必修でやらなくても卒業できるわけです。それに対してセンター試験の出題はコミュニケーション英語 II と英語表現 I。多くの進学校と言われるような学校では、英語表現 II までやっていると思うのですがセンター試験はこのコミュニケーション英語 I、II と英語表現 I の範囲です。では皆さん、たとえば新学習指導要領や共通テストの試行テストで注目されるようなディスカッションというような活動はセンター試験でカバーしているでしょうか。していません。受験生は話せませんから。試験の時は黙っていないといけません。ところが、学習指導要領の解説には、ディスカッションについて言及があります。いいことが書いてあります（スライド 7）。いいことが書いてあるのですが、これは英語表現 II の解説です。ですから、センター試験の範囲の中でディスカッションをそのままやることはできないわけです。にもかかわらず現行では第 3 問に当たりますか、あそこで話し合いを読ませるという出題が出ています。近年ではリスニングのテストで第 4 問の B が 3 者による話し合いを

聞いて設問に答えるという形に変わっています。しかしあれはディスカッションではありません。ディスカッションは出せないわけですから、私は「もどき」と呼んでいます。

そういったセンター試験の対策に関しては私の学校は先ほど言ったように 1 割程度しか受験しませんから、そんなに学校を上げてセンター、センターというところではありません。私は今進学クラスの担任をしているので勢い「適切な進路指導」をしてくれという保護者からの要望も来ますのでやらざるを得ません。この中で学校採択教材というものがあります（スライド 8）。ここに持ってきましたが学校でその採択教材を採用すると、センター試験はこんな特徴を持った試験ですという冊子がついてきます。付録です。これに何か要点がたくさん書いてあるのですが、ごちゃごちゃしていて私は読む気になりません。最終的に英語が苦手な生徒はどうするかというと、これに出てくるところだけをしゃにむに暗記して試験に臨もうとするわけです。

これ（スライド 9）が私の学校での模擬試験、この太字になっているところを全員が受けます。全員と言っても進学クラスの 1 クラスです。これ以外の細い字で書いてあるところは、希望者にこういう模試があると言って告知して学校の外に受けに行ってもらいます。これは後で話題になるかもしれませんが、受験料を考えると学校一括で申し込んでいるものは 3200 円くらいで受けられます、1 人 1 回。センター試験のリスニング用の機器を使うとさらに 3000 円

くらいかかります。学校外で受けるたとえば K というのは K 塾なのですが、このものを受けてその時リスニングの機材を使うと 6000 円近くかかります。学校外で受けるときに、今は山口市内に会場がありますが以前は徳山まで行かないと受けられませんでした。そうすると地方、田舎はそういうものでして、私も東京から山口に行つてかなりびっくりしたことが多かったのですが、地方では模試を受けるだけでも大変で、そうすると学校で全部抱え込もうというところが多くなると思います。

私自身は模擬試験の指導に対してものすごく消極的です。私としては英語をやっているのだから英語をやろうと、私が教えたのは模試対策ではありませんとずっと言っているのですがなかなか今のご時世、それでは受け入れられなくなってきています。学校によっては模試の模試をやるとか、前年度の模試を次の学年が受けるときの直前にやって去年の今の時期はこんなことが出ていたということをやる、または模試が終わったあとに間違ったところも含めてノートを作って提出とか、そういうことをやっている学校さんも多いと思います。私はどうなのかと思うわけです。

今日会場に模試を作っている方もいらっしゃると思いますが、このスライドのどちらかが模試です（スライド 10）。あえて劣化コピーですかということを書きましたがこちら（右）が模試です。こちら（左）がセンターです。スクリプトを見てください（スライド 11）。配付資料の方にタイポ、ミスがあります。皆さんの印刷資料にある“bought”

ではなく“brought”が正しいです。ポーっとしてしまいました。今のは南風原先生からの受け売りです。センターの対話は良くできています。それに対してこちら、かなり真似して、模してはいるのですが、最初から半そで朝出てきたということは、朝はそれなりに気温が高かったのではないですかということです。だったら、ここは、「寒い」ではなく「気温の変化」への言及でなければおかしいわけです。そうではないですか。私はこういうところが気になって仕方がありません。言葉として英語を扱っているわけですから。次、彼氏なのかは分かりませんが“we”です。センターはちゃんと“I”です。正解はこれ(④)になるのではと思うのですが、男の子が着ていた長袖シャツを女の子に貸したら男の子はどんな格好をしているのですか。男の子も含めて寒いのなら上着を貸そうか、俺はまだ中も長そでシャツだから大丈夫だ、とでもなりますよね。最初から長袖シャツしか着ていない男の子が、たとえばタカシという男の子が、トモヨという女の子に、「いや、俺のシャツを着ろ、長袖の分まだましだろう」と振った時にトモヨが、「それではタカシが寒いじゃない」、という話になるのではないかと思います。生きた言葉のやり取りとはそういうことだと思います。それに比べると、対話に要素を全部盛り込んでディストラクターを入れました。長袖シャツも出てくる。スカーフ、セーターも出てくる。カタカナ語ではセーターだけれども英語では“sweater”だということまで分からなければいけないのか、いろいろなことを詰め込んで模擬試験を作っているの

ですが、まず言葉のやり取りになっていないという気がします。非常に言葉の感性が貧しい人が作問しているという。これで英語ができる、できないと言われても私は嫌です。

では本家はどうなのか。これ(スライド 12)は、私はモンスターボックスと呼んでいます。年によっていい問題もありますが、予備校系のセミナーを受けてきた人の話を聞くと、英語としてあり得ない組み合わせを排除すれば正解が残るというわけです。問題作成部会もそれなりに好評でしたと書いてくれているのですが(スライド 13)、追加のスライドを1枚入れています。これ(スライド 14)は2015年度ですが、ここは変ではないですか。“I wouldn’t”、“It wouldn’t”、これも不自然だという臭いがプンプンしましたが、まだ後ろの続き具合によってはあり得ると思います。それに比べてここ、動詞の原形が来るのなら、dream は不定詞を取りません。このように英語としてあり得ないものは示さないで欲しいのです。これは英語教師としての私の考えです。

急ぎます。よくセンター試験は2技能試験だと批判されます(スライド 15)。私は4技能のことをカタカナで「ヨンギノー」とよく言っているのですが、工夫されている問題をちゃんと評価しないとこの後の共通テストに残せませんから、リスニング(スライド 16)、ここだけはどうしても聞いて欲しいところがあります。リスニングのかなり前半にある問題ですが次(スライド 17)のスク립トを見ながら聞いてください。

どうですか。上手いですね。たぶん高校生

はほとんどがこの単語“xenophobia”を知りません。今は印刷して見えていますからなんとなくそんな単語を言っているのだろうと思います。意味の分からない単語でこの単語の意味を知りたい時、普通は「この単語はなんていう意味？」と聞くとおもいます。これをいきなり読み上げています。しかも、回答する側はためらっています。なぜ躊躇するのか。私は昨日飛行機で来ましたが、アクロフォビア（高所恐怖症）です。xenophobiaで外人嫌いとか外人恐怖症という意味を彼女に知られては困るみたいな何かエスニックバックグラウンドに重要な問題があるのでしょうか。たとえば民間試験のETSはセンシティブレビューと言って特定の文化に依存しているとかヘイトとかオフensiveなものに対する配慮が行き届いています。ではセンターではここになぜわざわざこのxenophobiaという語を使ったのか。

今、人物設定の話をしました。たとえば次（スライド18）、先ほど言った「もどき」の問題ですが、ディスカッションを模したもので、ある図書館横の駐車場の空地に何を作るのかという、地域住民の議論が設定されているのです。図書館駐車場横の空地です。にもかかわらず最初に口火を切って意見を言うジャックはこういうわけです（スライド19）。落ち着いて「本を読む」のうってつけだと。いや、横は図書館です。こういった場面設定をもっともらしくするのは試行テストでも出ているのですが（スライド20）、いちいち全部は読み上げませんがそれぞれの問題になぜこれほど事細かく設定を英語で書いているのか。これを読

めなかった受験生は本文を読むときに必ず間違えます。そうすると二重に間違えさせていることになります。

次の問題（スライド21）は筆記試験での原典の書き換えです。こちらは本試験（左）、こちらはその原典（右）。亘理先生、その節はお世話になりました。論文を送っていただきました。私はこの“identified”という語義に悩みました、どういう意味で使っているのか。“identified by the FBI”とか、そういうことではありませんから。あと、“numerous”の数の幅がイメージできませんでした。それに対して原典はシンプルです。原典でいいのではないかと思います。なぜこう書き換えたのか。それによってかえって難しくなっていないのでしょうか。

長文問題。昔は第5問に論説文がありまして、黎明期です。最近では第6問に論説文がありますが、これ（スライド22）はテキストインスペクターというケンブリッジがやっているもので語彙を分析すると、CEFRのB2+レベルです、C1+レベルですと出るので、このあたりもケンブリッジの術中にはまっているという気がしないでもないですが、現行のセンター試験の論説文でもC1です。十分ではありませんか。内訳（スライド23）、目盛りが少し違うので気を付けていただきたいのですが、ちゃんと分かりやすい語彙を中心に難しいものを配置しています。よくできています。正答率も高いです。第2問、第3問に比べてもたぶん有意に高いのではないかと思います。私はそういう資料が荘島先生から出てくるといいなとひそかに思っていたのですが、な

かなかそれは難しいと思います。

これ（スライド 24）は大塚先生が言ってくれたので私はもう詳しく言いませんが、不要文選択問題は絶対に残すべきだと思います。これはライティングの力を見るのにも絶対に必要な問題で、これを継続しないのは何を考えているのだろうと思います。ここにスライドが印刷されていますのであとでご覧ください（スライド 25）。

時間が超過してきましたが、民間試験で気になるのは、ライティングです（スライド 26）。スピーキングばかりが取りざたされますが特にライティングのお題設定です。何をディレクションとして出して何を書かせるのかというところが申し訳ないですが、かなりお粗末だと思います。広島大学は英検の準1級とケンブリッジ英検の FCE で同じレベルでみなし満点という制度を現在でもやっていますが、ライティングではこの2つを並べられません（スライド 27）。私もライティングを四半世紀指導してきましたがこれを同じものだというのは無理があると思います。GTEC、150 語程度で書け。TOEIC の SW300 語以上、これも同じには評価できないと思います（スライド 28）。

ということで TOEFL でも IELTS でも、バーを上げててもそれほど記録が伸びるわけではありません。トレーニングしてその成果を測るのがテストです。私は教師ですから授業の中でやっていることのほうが大事です。ただ、授業でやっていることが全部テストで測れるわけではありません。測定ばかりやっても健康にはなりません。そして、民間試験の英語についてはあまり触

れる時間がありませんでしたが、問題の自身が分からないことが多いわけです。テストでどういう「ことば」が交わされているのかについてもこの後議論していければと思います。時間をオーバーしてすみませんでした。ありがとうございます。

1

東京大学高大接続研究開発センター主催シンポジウム
『大学入学者選抜における英語試験のあり方をめぐって(2)』
2019年2月10日 於：東京大学・伊藤謝恩ホール

高等学校から見たセンター試験と民間試験の「英語」について

松井孝志 (山口県鴻城高等学校)
tmrowing@nifty.com

2

本日の問いかけ

- 「四技能」「二技能」の議論の前に、センター試験の「英語」の「ことば」そのものにもっと関心を!
- センター試験の問題は全て公開されているからこそ、分析・評価が可能。今後「民間試験」に丸投げでいいのか?

3

センター試験「指導」にあたっての参考資料

- DNCの提供する「試験問題と解答」
- 業者による「データサーチ」から得られる各種データ
- 試験問題評価委員会報告書
- 予備校等の提供するセミナー、書籍
- 研究者による論文等
- 「学習指導要領」とその「解説」

4

高等学校教科担当教員の評価・意見

教科	出題範囲	出題内容	出題数		配点	難易度
			19年度	20年度		
英語	A 基礎的知識	A 語彙	2	2	8	中
		A 文法	4	2	8	中
英語	B 読解力	B 読解力	10	10	30	中
		B 読解力(長文)	2	4	12	中
英語	C 読解力(短文)	C 読解力(短文)	3	3	10	中
		C 読解力(短文)	3	3	10	中
英語	D 読解力(長文)	D 読解力(長文)	3	3	10	中
		D 読解力(長文)	3	3	10	中
英語	E 読解力(長文)	E 読解力(長文)	4	3	10	中
		E 読解力(長文)	4	3	10	中
英語	F 読解力(長文)	F 読解力(長文)	3	3	10	中
		F 読解力(長文)	3	3	10	中
英語	G 読解力(長文)	G 読解力(長文)	3	3	10	中
		G 読解力(長文)	3	3	10	中
英語	H 読解力(長文)	H 読解力(長文)	3	3	10	中
		H 読解力(長文)	3	3	10	中
英語	I 読解力(長文)	I 読解力(長文)	3	3	10	中
		I 読解力(長文)	3	3	10	中
英語	J 読解力(長文)	J 読解力(長文)	3	3	10	中
		J 読解力(長文)	3	3	10	中
英語	K 読解力(長文)	K 読解力(長文)	3	3	10	中
		K 読解力(長文)	3	3	10	中
英語	L 読解力(長文)	L 読解力(長文)	3	3	10	中
		L 読解力(長文)	3	3	10	中
英語	M 読解力(長文)	M 読解力(長文)	3	3	10	中
		M 読解力(長文)	3	3	10	中
英語	N 読解力(長文)	N 読解力(長文)	3	3	10	中
		N 読解力(長文)	3	3	10	中
英語	O 読解力(長文)	O 読解力(長文)	3	3	10	中
		O 読解力(長文)	3	3	10	中
英語	P 読解力(長文)	P 読解力(長文)	3	3	10	中
		P 読解力(長文)	3	3	10	中
英語	Q 読解力(長文)	Q 読解力(長文)	3	3	10	中
		Q 読解力(長文)	3	3	10	中
英語	R 読解力(長文)	R 読解力(長文)	3	3	10	中
		R 読解力(長文)	3	3	10	中
英語	S 読解力(長文)	S 読解力(長文)	3	3	10	中
		S 読解力(長文)	3	3	10	中
英語	T 読解力(長文)	T 読解力(長文)	3	3	10	中
		T 読解力(長文)	3	3	10	中
英語	U 読解力(長文)	U 読解力(長文)	3	3	10	中
		U 読解力(長文)	3	3	10	中
英語	V 読解力(長文)	V 読解力(長文)	3	3	10	中
		V 読解力(長文)	3	3	10	中
英語	W 読解力(長文)	W 読解力(長文)	3	3	10	中
		W 読解力(長文)	3	3	10	中
英語	X 読解力(長文)	X 読解力(長文)	3	3	10	中
		X 読解力(長文)	3	3	10	中
英語	Y 読解力(長文)	Y 読解力(長文)	3	3	10	中
		Y 読解力(長文)	3	3	10	中
英語	Z 読解力(長文)	Z 読解力(長文)	3	3	10	中
		Z 読解力(長文)	3	3	10	中
英語	AA 読解力(長文)	AA 読解力(長文)	3	3	10	中
		AA 読解力(長文)	3	3	10	中
英語	AB 読解力(長文)	AB 読解力(長文)	3	3	10	中
		AB 読解力(長文)	3	3	10	中
英語	AC 読解力(長文)	AC 読解力(長文)	3	3	10	中
		AC 読解力(長文)	3	3	10	中
英語	AD 読解力(長文)	AD 読解力(長文)	3	3	10	中
		AD 読解力(長文)	3	3	10	中
英語	AE 読解力(長文)	AE 読解力(長文)	3	3	10	中
		AE 読解力(長文)	3	3	10	中
英語	AF 読解力(長文)	AF 読解力(長文)	3	3	10	中
		AF 読解力(長文)	3	3	10	中
英語	AG 読解力(長文)	AG 読解力(長文)	3	3	10	中
		AG 読解力(長文)	3	3	10	中
英語	AH 読解力(長文)	AH 読解力(長文)	3	3	10	中
		AH 読解力(長文)	3	3	10	中
英語	AI 読解力(長文)	AI 読解力(長文)	3	3	10	中
		AI 読解力(長文)	3	3	10	中
英語	AJ 読解力(長文)	AJ 読解力(長文)	3	3	10	中
		AJ 読解力(長文)	3	3	10	中
英語	AK 読解力(長文)	AK 読解力(長文)	3	3	10	中
		AK 読解力(長文)	3	3	10	中
英語	AL 読解力(長文)	AL 読解力(長文)	3	3	10	中
		AL 読解力(長文)	3	3	10	中
英語	AM 読解力(長文)	AM 読解力(長文)	3	3	10	中
		AM 読解力(長文)	3	3	10	中
英語	AN 読解力(長文)	AN 読解力(長文)	3	3	10	中
		AN 読解力(長文)	3	3	10	中
英語	AO 読解力(長文)	AO 読解力(長文)	3	3	10	中
		AO 読解力(長文)	3	3	10	中
英語	AP 読解力(長文)	AP 読解力(長文)	3	3	10	中
		AP 読解力(長文)	3	3	10	中
英語	AQ 読解力(長文)	AQ 読解力(長文)	3	3	10	中
		AQ 読解力(長文)	3	3	10	中
英語	AR 読解力(長文)	AR 読解力(長文)	3	3	10	中
		AR 読解力(長文)	3	3	10	中
英語	AS 読解力(長文)	AS 読解力(長文)	3	3	10	中
		AS 読解力(長文)	3	3	10	中
英語	AT 読解力(長文)	AT 読解力(長文)	3	3	10	中
		AT 読解力(長文)	3	3	10	中
英語	AU 読解力(長文)	AU 読解力(長文)	3	3	10	中
		AU 読解力(長文)	3	3	10	中
英語	AV 読解力(長文)	AV 読解力(長文)	3	3	10	中
		AV 読解力(長文)	3	3	10	中
英語	AW 読解力(長文)	AW 読解力(長文)	3	3	10	中
		AW 読解力(長文)	3	3	10	中
英語	AX 読解力(長文)	AX 読解力(長文)	3	3	10	中
		AX 読解力(長文)	3	3	10	中
英語	AY 読解力(長文)	AY 読解力(長文)	3	3	10	中
		AY 読解力(長文)	3	3	10	中
英語	AZ 読解力(長文)	AZ 読解力(長文)	3	3	10	中
		AZ 読解力(長文)	3	3	10	中
英語	BA 読解力(長文)	BA 読解力(長文)	3	3	10	中
		BA 読解力(長文)	3	3	10	中
英語	BB 読解力(長文)	BB 読解力(長文)	3	3	10	中
		BB 読解力(長文)	3	3	10	中
英語	BC 読解力(長文)	BC 読解力(長文)	3	3	10	中
		BC 読解力(長文)	3	3	10	中
英語	BD 読解力(長文)	BD 読解力(長文)	3	3	10	中
		BD 読解力(長文)	3	3	10	中
英語	BE 読解力(長文)	BE 読解力(長文)	3	3	10	中
		BE 読解力(長文)	3	3	10	中
英語	BF 読解力(長文)	BF 読解力(長文)	3	3	10	中
		BF 読解力(長文)	3	3	10	中
英語	BG 読解力(長文)	BG 読解力(長文)	3	3	10	中
		BG 読解力(長文)	3	3	10	中
英語	BH 読解力(長文)	BH 読解力(長文)	3	3	10	中
		BH 読解力(長文)	3	3	10	中
英語	BI 読解力(長文)	BI 読解力(長文)	3	3	10	中
		BI 読解力(長文)	3	3	10	中
英語	BJ 読解力(長文)	BJ 読解力(長文)	3	3	10	中
		BJ 読解力(長文)	3	3	10	中
英語	BK 読解力(長文)	BK 読解力(長文)	3	3	10	中
		BK 読解力(長文)	3	3	10	中
英語	BL 読解力(長文)	BL 読解力(長文)	3	3	10	中
		BL 読解力(長文)	3	3	10	中
英語	BM 読解力(長文)	BM 読解力(長文)	3	3	10	中
		BM 読解力(長文)	3	3	10	中
英語	BN 読解力(長文)	BN 読解力(長文)	3	3	10	中
		BN 読解力(長文)	3	3	10	中
英語	BO 読解力(長文)	BO 読解力(長文)	3	3	10	中
		BO 読解力(長文)	3	3	10	中
英語	BP 読解力(長文)	BP 読解力(長文)	3	3	10	中
		BP 読解力(長文)	3	3	10	中
英語	BQ 読解力(長文)	BQ 読解力(長文)	3	3	10	中
		BQ 読解力(長文)	3	3	10	中
英語	BR 読解力(長文)	BR 読解力(長文)	3	3	10	中
		BR 読解力(長文)	3	3	10	中
英語	BS 読解力(長文)	BS 読解力(長文)	3	3	10	中
		BS 読解力(長文)	3	3	10	中
英語	BT 読解力(長文)	BT 読解力(長文)	3	3	10	中
		BT 読解力(長文)	3	3	10	中
英語	BU 読解力(長文)	BU 読解力(長文)	3	3	10	中
		BU 読解力(長文)	3	3	10	中
英語	BV 読解力(長文)	BV 読解力(長文)	3	3	10	中
		BV 読解力(長文)	3	3	10	中
英語	BW 読解力(長文)	BW 読解力(長文)	3	3	10	中
		BW 読解力(長文)	3	3	10	中
英語	BX 読解力(長文)	BX 読解力(長文)	3	3	10	中
		BX 読解力(長文)	3	3	10	中
英語	BY 読解力(長文)	BY 読解力(長文)	3	3	10	中
		BY 読解力(長文)	3	3	10	中
英語	BZ 読解力(長文)	BZ 読解力(長文)	3	3	10	中
		BZ 読解力(長文)	3	3	10	中
英語	CA 読解力(長文)	CA 読解力(長文)	3	3	10	中
		CA 読解力(長文)	3	3	10	中
英語	CB 読解力(長文)	CB 読解力(長文)	3	3	10	中
		CB 読解力(長文)	3	3	10	中
英語	CC 読解力(長文)	CC 読解力(長文)	3	3	10	中
		CC 読解力(長文)	3	3	10	中
英語	CD 読解力(長文)	CD 読解力(長文)	3	3	10	中
		CD 読解力(長文)	3	3	10	中
英語	CE 読解力(長文)	CE 読解力(長文)	3	3	10	中
		CE 読解力(長文)	3	3	10	中
英語	CF 読解力(長文)	CF 読解力(長文)	3	3	10	中
		CF 読解力(長文)	3	3	10	中
英語	CG 読解力(長文)	CG 読解力(長文)	3	3	10	中
		CG 読解力(長文)	3	3	10	中
英語	CH 読解力(長文)	CH 読解力(長文)	3	3	10	中
		CH 読解力(長文)	3	3	10	中
英語	CI 読解力(長文)	CI 読解力(長文)	3	3	10	中
		CI 読解力(長文)	3	3	10	中
英語	CJ 読解力(長文)	CJ 読解力(長文)	3	3	10	中
		CJ 読解力(長文)	3	3	10	中
英語	CK 読解力(長文)	CK 読解力(長文)	3	3	10	中
		CK 読解力(長文)	3	3	10	中
英語	CL 読解力(長文)	CL 読解力(長文)	3	3	10	中
		CL 読解力(長文)	3	3	10	中
英語	CM 読解力(長文)	CM 読解力(長文)	3	3	10	中
		CM 読解力(長文)	3	3	10	中
英語	CN 読解力(長文)	CN 読解力(長文)</				

17

スクリプト

W: What does the word “**xenophobia**” mean?

M: **Hmm**, why don't you look it up in the dictionary?

W: Can I borrow yours? I forgot mine today.



18

場面設定の尤もらしさとは？ 2013年本試験第3問B

- 次の英文は、アメリカのある町で住民が集まって、**図書館**駐車場横の空き地の利用法について議論している場面の一部である。
- Bob: OK. Let's get started. I see we have well over a dozen people here to discuss what to do with the area next to the library parking lot. Would anyone like to start with some suggestions? ... Yes, Jack?
- Jack: I think there's enough space for a small park with at least one tree, maybe two ... and (中略). Maybe (中略). Along one side, we could (中略).

19

議論の口火を切ったJackの決めゼリフは？

The park could be an ideal place to sit and **read a book**.

20

2018年11月実施「共通テスト」試行調査より

- 第2問B
Your English teacher gave you an article to help you prepare for the debate in the next class. A part of this article with one of the comments is shown below.
- 第3問A
You found the following story in a blog written by a female exchange student in your school.

21

筆記・第4問：原典を書き直すと易くなる？

2017年本試験

原典：
<https://www.sciencedirect.com/science/article/pii/S0169204614002370>

- These areas were identified by flat open spaces, often having numerous markings painted for games and benches set in different places.
- This area type is characterized by level (flat) open areas, often with various painted markings for games and benches placed in different places.

22

筆記・読解：難易度は何で測る？

1992年 第5問 (論説文)

2018年 第6問 (論説文)

CEFR LEVEL

CEFR LEVEL

B2+

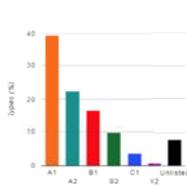
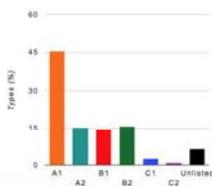
C1+

23

読解素材文語彙レベルの比較

1992年 第5問 (論説文)

2018年 第6問 (論説文)



24

注目すべき問題：筆記 第3問 不要文選択

問3 29

Making something on your own may take you a lot of time and hard work, but it can give you a great feeling of achievement. Spending every weekend and holiday for a couple of years, Todd built his own house without hiring professional builders. ㉠With his colleagues' cooperation, he often took several days off from work to take a rest. ㉡He bought land in a rural area and cleared it. Then, he put up a tent so that he could sleep there at night while working on the house. ㉢His friends sometimes helped him pour cement, carry wood, and install electric cables and water pipes. ㉣He built the house little by little, often staying alone in the tent. Now, he has finished a nice two-story house with a basement, and he is very proud of his accomplishment.

25

読解問題ではなく、ライティング代替問題として

- 多様なテキストタイプでのパラグラフの構成
- 話題と主題
- 「つながり」と「まとめり」
- 概要・一般 → 個別・詳細・具象
- 時系列での展開と段落内での時制のコントロール
といったライティング学習に対しての波及効果を生む可能性を秘めている

26

大学入試と民間英語試験の「ライティング」

大学入試

- 国公立大学の個別試験で多い。
- 分量もテキストタイプも大学により様々。筆記試験の大問中に含まれることが多い。
- 1題のみを課す大学が多い。

民間試験

- 試験業者により内容・構成・分量・試験時間等が著しく異なる。
- 同じ業者の試験でも、CBTと紙ベースで問題の構成や内容が著しく異なるものがある

27

異なる試験で同じライティング力を測れる？

- | | |
|---------------------|-------------------------|
| 「英検」準1級 Composition | ケンブリッジ英検 FCE (B2 First) |
|---------------------|-------------------------|
- 「お題」に従い、与えられた四つの観点を含めて、120-150語程度で書く
 - お題は1題で、所謂「意見文・論証文」
 - 語彙や文法、リーディングも含み、試験時間は90分
 - ライティングセクションは、2つのパートで構成され、1時間20分
 - “articles, email, essay, letter, report, review” といった多様なテキストタイプをカバー
 - パート1は必須で140-190語
 - パート2は3題から1題選択

28

そのCEFRランクの意味は同じ？

「できるだけたくさん書け」といわれるが
実情は150語程度で評価される
GTEC B問題

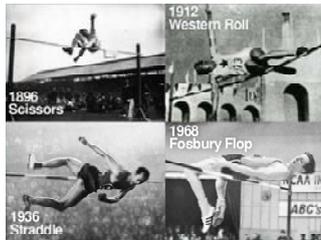
300語以上の分量での解答を
求められるTOEICのエッセイ



29

バーを上げれば、記録は伸びるのか？

Image Source: Britannica Academic



30

そして最後に

- どのような試験であれ、受験者が行う活動は必ずしも実際の言語運用と同一ではない。
- 健康診断は大切で有益だが、診断ばかりを繰り返しても、健康は増進しない。
- 試験でやりとりされる「英語」の「ことば」そのものに関心を！

高等学校による英語運用能力のアセスメントについて

静岡大学教育学部准教授

亙理陽一

南風原：

松井先生、どうもありがとうございました。続けて、亙理陽一先生、お願いします。

亙理：

皆さんこんにちは。静岡大学の亙理です。今日、私の研究者人生で、これほどきれいにスライドを印刷してもらえる日が来るとは思わず、今後二度とないと思うのですが、PDFで欲しいという方はこちらのURL(スライド1)でダウンロードできるようにしておりますのでご参照ください。それ以外にデータが必要な場合は、私が今日この後生きて帰ればご返事しますのでお問い合わせください。ちなみにこれ(ripee)、Rest in peace, English education、「英語教育よ、安らかに眠れ」の略です。

今日のお話ですが、この南風原(編)(2018)を前提とさせていただきます(スライド2)。こちらはお読みいただいているという前提でお話していきます。「このそうそうたるメンバーの中でなぜおまえなのか」というのは一番私が思っていることなので、立場を先に明示しておきたいと思います。外部試験の導入については現状のままではもちろん反対です。ただ、各試験の内容の妥当性については、今日は論じません。南風原(編)が論じているように、公平性や実施可能性の点で大きな問題があることは明らかだと思います。ただし…というので留保を付け



ているのですが、妥当性の点で学習指導要領との絡みがちゃんとしていないという理由で外部試験をちゃんとさせようとするという主張の仕方は、僕はまずいと思っています。その点は後で触れます。

私の場合は非常勤講師も含めて大学で英語を教えて13年目になるのですが、英語教員養成課程に今います。7年目ですがこれまで30人少しのゼミ生が小中高の教員になってきました。私の原動力として、彼女たちを無責任な世に送り出して、この無責任な流れに加担させたくないという思いがあります。また、教育方法学という専門柄、小中高と一緒に授業を作っています。年間60時間くらいの授業を観察する機会を貰っていて、週に1回くらいは授業を見に行っていることになりましたが、その3分の2は高校がフィールドです。私自身が元々文法指導専門にしている、高校の方が相性がいいということもありますが、やはり英語教育の大きな課題は高校にあるということで、高校の指導主事の方々と一緒に授業作りを、

学校の先生方と授業作りを進めています。今日の話はそこがベースにあるということをご理解ください。

最後に、これは自慢なのですが、教員免許を持っていません。今まで英語の検定・資格試験を一度も受けたことがありません。しかも英語圏に留学経験もなく、全く何もない。これが自慢で、そういう存在はこの業界では貴重だと思っているのですが、2年前に TESOL のサミットに、どういう経緯かアメリカ大使館の派遣で行きました。文科省に照会があった時に信州大学の酒井先生が推薦を受けたのですが、なぜか私もくっついてアメリカ大使館に派遣されました。私は酒井先生のお供で、ただ後ろで話を聞いていればいいかなと、「やった、ギリシャに行ける」ぐらいに思っていたのですが、行ってみるとプレジデントの横の席を割り当てられ、日本代表として話をしなければいけませんでした。この場には 64 カ国以上の 200 人くらいがいたのですが、日本から来ているのはアメリカ大使館の人と酒井先生と私だけだったので、そのテーブルで How about Japan? と言われたら私が日本のことを全て答えなければいけない。この時が今まで私が英語を使った経験の中で一番難易度が高かったと思うのですが、幸いなことにこの場の誰も「君は A2 相当以上の英語力を持っているのかね?」とは言いませんでした。大変ありがたいことでした。

前提に少しだけ補足をしたいのですが(スライド 3)、先ほど荘島先生が「学力」という目に見えないものを実際のデータから探索的因子分析を通じて探ったように、いわゆる英語力と言われているものも目に見えないわけです。目に見えない直接観察

できないものを測ろうとした時に、確かにライティング、スピーキングは直接書いたもの、話したものが観察できるわけですが、いわゆる 4 技能推進派の人達は、その直接観察できるという部分を過信しすぎなのではないかと思っています。つまり、書いたり話したりしたことがそのままその彼・彼女のスピーキング力、ライティング力を表しているわけではありません。そのことがズレたままで「4 技能でやれば全てが…」、「バラ色の未来が…」という議論が多いような気がします。先ほど申し上げた通り、私自身はこういう資格・検定試験は一度も受けたことがありませんので、そういうのを 1 回受けるくらいなら『ボヘミアン・ラブソディ』を 3 回見て、そのことについてみんな話したいという立場の人間です(スライド 4)。

もう一つだけ前提に補足をしておくと(スライド 5、6)、外国語教育メディア学会という名前をここで宣伝したいと思って入れたのですが、去年の夏にこの問題のパネルディスカッションがありました。そこでお話したことなのですが、「外部試験を導入すると、英語授業が変わる、波及効果がある」と推進派が言うわけです。ですが、その間には先生がいるという事実を、やはり 4 技能推進派は若干無視しているというか過小評価しているように思います。つまり、その先生がどういう考え方を持っているかによっては、4 技能を伸ばす授業改善は全くもたらされないかもしれない。4 技能を伸ばす授業改善になればもちろん良いことですが、その教師の「観」もしっかりとらえる必要があると思っています。

1 つ例を挙げると、私が授業観察に赴い

ていて頻繁に見かける実体としてこんなことがあります(スライド7)。目的が全く分からない音読。あるいは暗唱。画像はタブレット風のものを持っていますが、ハンドアウトを生徒に持たせて、場合によっては寝ている生徒を寝かせたくないという動機もあったりするわけですが、やにわに立たせてペアで向かい合わせて教科書の本文を一文ずつ音読させたり、というのが日本全国の授業で見られると思います。単語にしても、バーツとハンドアウトにリストになっていて暗記させるのですが、その後の授業では一切生かされることのない。こういう授業をまます。

とすると、某試験、名前を出すと怒られるかもしれないのでイニシャルで言うと、G・T・E・Cに、こういう問題があります(スライド8)。パートAは全部で6問あって、音読の問題です。ホームページにはちゃんと狙いが書かれていて、聞き手に情報が伝わるか、それらをより効果的に伝えられているか、語彙・文法・発音・流暢さを見る。こういうふうにスペックは書かれていますが、これを見た先生がコミュニケーションな授業をしていて、「文脈・役割を意識して演じてもらえれば、話す力の総合的な指標にもなるだろう!」と考えて音読させるとはとても思えません。テストがこうなっていれば、GTECが外部試験として生徒の入試に直結するとなれば、この先生が当然思うのは、「音読量を増やせば音読問題の対策になるはずだ」ということでしょう。つまり先生がどういう考え方を持っているか次第で、テストが仮にいい出来であろうとなかろうと、授業に4技能の授業改善をもたらすとはとても期待できないわけです。

時間の都合で尻切れになるのが嫌なので、ここでもう結論を言ってしまうのですが、私の結論・提示したい論点は3つです(スライド9)。まず、妥当性・信頼性のある判定を教員側に課するのは現状、酷であるということ。そういう意味で、東大にも今日、説教しに来ました。次に、アセスメント能力の涵養はこれからだと考えたほうがいいと思います。つまり、先生方がそれをできるようになることは重要だと思っていますし、否定するものでもありませんが、それには時間と経験が必要だということです。最後に、学校の先生がする評価は、陸上の記録で言えば「追い風参考記録」だと私は思っています。つまり先生方は、少し背中を押すようにして子供たちのことを評価していくのですが、それでもいいという能力観がどれだけ世の中に共有されているか。現状、世の中がギスギスしてカチツとした能力を求める限りは、これは上手くいかないと思っているということです。

具体的に本題に入りますと(スライド10)、これも外国教育メディア学会のパネルディスカッションでお話したことなのですが、現状、高校はかなり頑張っています。つまり「パフォーマンス・テストを導入しなさい」という動向に対応して、授業の中にそれを取り入れようとしています。でも、いきなりなんです。たとえば6時間、8時間くらいの単元があった時に、それまでは教科書を1パートずつやっているのに最後に突如話してみてもか、じゃあ150語で書いてとか急に求めてしまう。下支えとなる学習活動や、求められる「書く・話す」を実際に使うことを積む経験をさせずにいきなり本番、そしてそれきりというパターンです。私は

この話をする時に、私自身の体育の授業の「跳び箱飛ばせませんでした。はい次、鉄棒回れませんでした。はい次、マット回れませんでした。はい次」というあの苦い経験を思い出すが、英語がそうになってしまいかねないという実態をまます。

東大が外部試験入試に慎重な対応を取った時に私が気になったのが、(2)です(スライド 11)。字が小さくて恐縮というか、私を読みづらいのですが、「日常の授業における学習状況や試験の成績等から総合的に評価した結果、CEFR の A2 レベル以上に相当する英語力があると認められることが明記されている高等学校等による証明書」。南風原先生が言及された名古屋大学みたいなことを校長名でやるとしても、先生方はそれほど不真面目ではありません。現状も英検や GTEC の結果をもって判断しているように、何らかの形で責任を持った評価をしようとするはずです。そのことを先生方に課するのが本当に彼らを楽にすることになるのか、本当にいいのかということです。

私の問いは、そして実際にそれができるのかということです(スライド 12)。まじめにやろうと思った時に先生方がそれをできるのか。高校教員が実際に「日常の授業における学習状況や試験の成績等から CEFR の A2 レベル以上に相当する英語力」の有無を測ることができるのかを今日の問いとして、データをお示ししたいと思っています。

静岡県は、約 90 の公立高校があるのですが、全ての高校で Can-Do リストを作成しています。各学校の実態に合わせてステージを分けて、目標としては高校卒業までに B1 に達するというところまで、全ての高校

がそうなるわけではありませんが 5 領域で作っています。パフォーマンス・テストについても、各高校が望んだものかどうかはともかく、実施回数は増加傾向にあります(スライド 13)。これは 2016 年と 17 年のデータですが、だいたいざっくり言うと、3 年間、コミュニケーション英語と英語表現で、スピーキングとライティングについて 10 個から 12 個程度のパフォーマンス・テストをやっている。高校生はそれを経験しているということになります。

お手元の資料(スライド 14)では Under Review で査読中でしたが、査読が通りましたので「印刷中」になりました。この論文の研究で、パフォーマンス・テストの内容分析を今年行いました。平成 29 年度に総合教育センターの方で、こちらの記述にあるような形で、CEFR の A2 レベルを算出するために用いたパフォーマンス・テストを提出してくださいという形で集めました。県内の 84 高校から 90 のタスクが集まりました。こちらを分析した結果を今日お伝えします。つまり、先生方は A2 レベルのタスクを作れるのかということです。

結果はこうでした(スライド 15)。A2 レベルと分類・評価されたタスクは 83 の内 38、45.8%でした。B1 や B2 のタスクを出していた高校は生徒に挫折感ばかり味わせていたのではないかと心配になるわけですが、やはり問題は A1 と分類された 31 の方です。つまり、A2 レベルのタスクを求められているのに A1 に分類されたということは、各高校は現状としては難易度を低めに作成する傾向があると言えるのではないかと。また、今年度はスピーキングでデータを集めたとのことですが、この年、一応両方置

いてあったにもかかわらずライティングが53.7%であるということは、やはり書く方のパフォーマンス・テストに偏っているというのも事実です。ただ私は高校を回っている実感として、スピーチ 30.5%、インタラクティブ 15.7%は、「静岡県はここまでやっているのか、頑張っている」という方の評価を持ちますが、会場の皆さんがどう思われるかは分かりません。一応バランスとして、3つの内ライティングが一番多かったということです。

具体例を1つ見ますが、A1と分類されたタスクはこれです。自分の好きな、もしくは嫌いな物事や人物を紹介する文を書きなさい。タスクとして見た時に、これを達成するのにA2レベルの英語力は必要ありません。自分の好きなもの、人を書ければいいだけなので、A1レベルで達成できてしまう。これは優れたパフォーマンスの生徒のライティングパフォーマンスとギリギリの合格ラインのパフォーマンスを出してもらっています。ゆっくりお示しする時間はないのですが、これくらいのタスクを4割弱の高校は作りがち、それは高校のレベルの実態もあると思うのですが、先生方がA2を測りたいと思った時にA2を出せているとは言いがたいというのは事実です。

傾向と特徴だけまとめるとこんな感じでした(スライド16)。ライティング・タスクはargumentativeに偏っているという実態がありました。Narrativeやexpository、つまり物語文や説明文を書くのは少なく、「ホニャララすべきである、賛成か反対か」、たとえば「外部試験を導入すべきであるか否か」というようなものばかりだったということです。その際、課題としてはルーブリ

ックの記述が不明瞭であるとか、書いた内容と評価の関連が不透明で、とにかく語数や文数だけが求められるといった条件設定の必然性のなさが指摘されました。スピーチ・タスクについて言うと、タスクは何を言うかは学習者が決めるべきことですが、書いたものを覚えて発表する形式がやはり多かった。Preparedなスピーチは原稿を見て読んでもいいわけですが、ただ覚えたものを再生するだけ、つまり暗唱的なスピーチタスクになっている傾向が見られました。インタラクティブ・タスクはShow and Tellがほとんどで、何か好きなものを紹介したり写真を見せながらスピーチしたりするわけですが、状況設定と要求される言語使用にずれがある。

もう1つの問題は、例の多さで、指示の時点で例がたくさん載っているものがあります。例があまりにも多すぎて、その例を言えばいいのだとなると、自分の単語に置き換えるだけのパターン・プラクティスになってしまうということで、実質的にパフォーマンス・テストがタスクとなっていない側面があるということが分析から見えてきました。

これはB1と分類されたタスクで、この教科書を作っている人も会場にいるわけですが、バイオディーゼル・アドベンチャーというレッスンで、高校生にバイオディーゼル・アドベンチャーの話があるかどうかは別として、これをリテリングするタスクです。ルーブリックも用意してありますが、リテリングの目的が不明で、この状況や条件設定で先生が求める言語使用が期待できそうにありません。どうしてこういうことが、つまりB1のタスクが生まれてしまうかという

と、一方で A1 のほうもそうかもしれませんが、CEFR レベルで言うと A2 というのはこの辺です(スライド 17)。私はこの文科省の表の CEFR で、R で区切れているところが、いつも味があると思って使い続けているのですが、「この能力!？」とまず思っています。ホリスティックなスケールで言うと「身近で日常の事柄や単純で直接的な情報交換」、つまり“CEFR”という大仰だけれど、A2 レベルで求めているのはそれほどたいそうなことではありません。ただ一方で教科書は、これは新指導要領の記述ですが、話題、支援、活動、言語のパズルの組み合わせが半端ではなく複雑なことになっていて、そうすると当然日常的话题だけではなく社会的な話題が教科書にたくさん入っています。実際読んで面白いと思うのがそちらの話題だったりするので、高校の先生が教科書を採択するときには社会的な話題が多く入っているものを選んだりすることもある。1 冊の教科書に日常的话题しか入っていないものはありません、なぜなら指導要領の要求を満たせないからです。そうすると社会的な話題のレッスンでパフォーマンス・テストを作らなければいけない時、先ほどのような無理が発生します。そこが、先生方が苦しんでいるところです。

その点で教科書と折り合いをつける工夫が必要で、いくつか参考にできる例もあって、静岡県内では共有しています。ここでは教科書で学んだ心理学の学説に従って友達にアドバイスという例だけ紹介するのですが、こんなものです。読む時間は無いと思うのですがどうでしょう。Science of Love という、なぜ人は人を好きになってしまうのかという心理学の学説を紹介するレッスン

があります。近くにいるとつい好きになってしまうとか長い時間いると…といった話です。その学んだことをもとに友達の相談に応える、これが、味があって僕は好きなタスクですが、お父さんみたいな人をつい好きになるという、「私、変かな？」という。もう 1 個、これは A と B の 2 つが用意してあって、お父さんのことを本当に嫌いなのかという、「お父さんのにおいが嫌なの、私、変なのかな？」という、その先生の当時の実感がこもったようなテストですが、これを教科書で学んだことを使って話すという時に、教科書と折り合いがちゃんとつけられている先生はルーブリックと実際の現れをしっかりと立てて評価できています。これを全ての先生が今できるわけではありません。

某、これもイニシャルで言うと E・I・K・E・N がこういうライティングの試験を出していますが(スライド 18)、水道会社や電気会社に不満があるのかそういう問題が多いのですが、これも当然社会的な話題になるので英語表現の授業を教科書通り進めていけば対応できそうと先生が思うよりは、これを見たら、何度も英検ライティング対策が必要だとなってしまうのではと思います。

もう一度、結論と論点の繰り返しなのですが(スライド 19)、外部試験を有名無実化するための手段としては、名古屋大学のような手、あるいは東大がとった手は賢いと思います。静岡大学の勇気のなさを恥じたりもします。ただ、長期的リスクを考えたほうが良いと思っています。つまり私もここに阿部先生のツイートを引用したのですが(スライド 20)、この一方で我々の業界が失う信頼をもう少し考えたほうが良い。つまり私の少なくとも接する範囲の高校の先

生あるいは管理職の方の多くは誠実です。その誠実な先生方がいい加減にやるとは思えないので、真剣にやろうとすると彼らの負担が増える。いい加減にやるとすれば結局、英語の先生は英語力をちゃんと評価する力はない。そういう風に世の中にメッセージを送るというだけになってしまいます。これはセオドア・ポーターという人が言っていることですが(スライド 21)、どうしてこういうデータや「エビデンス」が求められるかという、社会での専門家に対する信頼が弱い時だというわけです。つまり我々教員が信頼されていないということです。本来は阿部先生の言う通り、学校の所属長あるいは英語の先生が「君は間違いなくA2以上の力がある」と言えば世の中がそれを信じるというのであれば、それで十分だと思いますが、現状がそうになっていないということです。そこを適当にやってしまえばいいというのは、やはり失うものが大きすぎると思います。

繰り返しませんが、アセスメント能力の涵養には時間がかかります(スライド 22)。ただ難しいなと思っているのは、この業界は今まで、先生自身の英語力の判定や推薦入試、あるいはスピーチコンテストなどを含めて、外部試験を利用してきた過去があります。つまり我々は自前でそれを作る努力をせずに外にゆだねてきた歴史があるので、今から変わるかなというのは気になっています。

最後にもう一度言いますが、学校の先生は追い風で生徒たちを授業の中でその気にさせてちょっとだけ出来る感を感じさせてどんどん育ててきているので、我々がどれくらいその評価を、「確かにその子は、今は

そうではないかもしれないけれども大学に入ってから確かに英語を伸ばしていきましょう」と信じられるかどうか。その先生の「追い風参考記録」を受け入れられる世の中だといいなとは思っています。

外部試験をめぐる話で、どうしてもライティングとスピーキングに視点が向いているので触れておきたいのですが、センター試験や共通テストをなくした時に、外部試験や高校の先生は、リーディング、リスニングについて荘島先生が示したようなあの識別力を出せるのでしょうか。つまりリーディングやリスニングの過程は見えない分、より多くの項目や高い精度が必要で、センター試験が積み上げてきたその高い精度を他が代替できるようにには私には思えません(スライド 23)。ですから4技能の話をする際にスピーキング・ライティングに議論が集中しがちですが、同時に失われるリーディングとリスニングの高い精度の方がよほど問題があつて、日本全国に松井先生がいればいいのですが松井先生は1人しかいません。しかも日本全国に松井先生がいると異常なフィギュア愛が増えてしまうという弊害もあるから、1人でいいです。そうなると、センター試験が蓄積してきたものは守るべきだと思っています。ということで、現状は十分にできるとは言えないですが、東大や名古屋大のメッセージとして、先生方は試験の結果よりもっと1人1人のことを見ようという含意を汲み取ります。牧歌的な結論に落ち着いて恐縮ですが、生徒の英語運用能力をみる能力を鍛えようということかと思います(スライド 24)。

ちなみに今日発売の雑誌でそういう原稿を書きましたので、この話の続きに興味が

おありの方は是非お読みください（スライド 25）。ご清聴ありがとうございました。

南風原：

亙理先生、どうもありがとうございました。なぜ亙理先生が招聘されたか、今ご自身が証明してくれたかと思います。

1

東京大学高大接続研究開発センター主催シンポジウム
「大学入学者選抜における英語試験のあり方をめぐって(2)」
2019年2月10日、東京大学本郷キャンパス伊藤国際学術研究センター

高等学校による英語運用能力の アセスメントについて

巨理 陽一
静岡大学
watari.yoichi@shizuoka.ac.jp
bit.ly/ripee190210wtr

2

立場

- 外部試験導入: **反対** (内容の妥当性は今日は論じない)
- まず南風原(編) (2018)を、ただし... (後述)
- 専門: 教育方法学・英語教育学
- 大学英語教員 13年目
- 英語教員養成課程 7年目 (ゼミ生は8割以上教員に)
- 小中高との授業づくり: 年間約60時間授業観察(2/3は高)
- 教員免許、検定・資格試験受験、英語圏留学経験: **一切無し**

無責任な世の中に送り出して
無責任に加担させたくない



3

前提に少しだけ補足

直接観察できない

観察可能な部分で判断できることに期待をし過ぎでは?

4

英語検定・資格試験を1回受けるなら
*Bohemian Rhapsody*を3回観て
それについて誰かと語り合いたい

<https://twitter.com/moyamamo10/status/1066943522559782913>

5

前提に少しだけ補足2

(巨理, 2018, 外国語教育メディア学会(FTED))

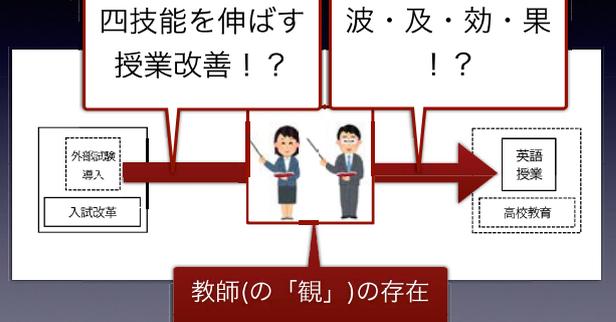


Cf. <http://terasawat.hatenablog.jp/entry/2018/07/31/153429>
<https://news.yahoo.co.jp/byline/terasawatakunori/20180710-00088888/>

6

前提に少しだけ補足2

(巨理, 2019, 外国語教育メディア学会(FTED))

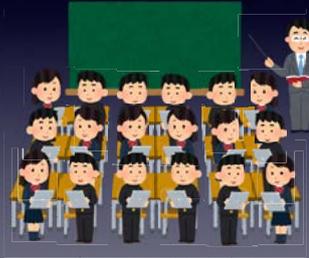


7

前提に少しだけ補足2

(巨理, 2018, 外国語教育メディア学会(LET)PD)

- ・ 頻繁に見かける実態(1)
- ・ 目的の曖昧な音読・暗唱
- ・ その後の授業で生かされることのない単語暗記

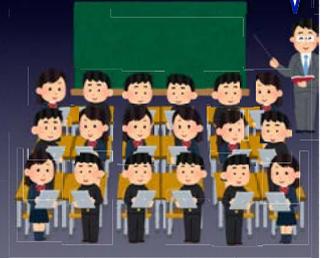


8

聞き手に情報や主張が伝わるか・それらをより効果的に伝えられているか+語い、文法、発音、流ちょうさ

木口川大

音読量を増やせばGTEC音読問題の対策になるはずウ!



<https://www.benesse.co.jp/gtec/fs/sample/gtec/speaking.html>

9

結論・論点

- ・ 妥当性・信頼性のある「判定」を教員側に課するのは現状、酷
- ・ アセスメント能力の涵養はこれから: 要時間・経験
- ・ 「追い風参考記録」でもいいじゃんという能力観は可能か

10

本題

(巨理, 2018, 外国語教育メディア学会(LET)PD)

- ・ 頻繁に見かける実態(2)
- ・ パフォーマンス課題を取入れ(ようと)してはいるが
- ・ 下支えとなる学習活動・求められる技能の使用経験を積む言語活動が単元がない
- ・ いきなり本番、そしてそれっきり

本当にあった怖い「単元」

	内容	評価
① 1st	教科書 Part 1	聴取テスト
② 2nd	教科書 Part 2	聴取テスト
③ 3rd	教科書 Part 3	聴取テスト
④ 4th	Review	聴取テスト



11

2020年度(2021年度入学)選抜)以降における入学選抜方法の検討について

2020年度東京大学一般入試における出願要件に関する予告

2018年12月25日

東京大学入試広報委員会

東京大学では、5月26日に公表した「2021年度東京大学一般入試における出願要件の追加について」に基づき、新たな出願要件について検討し、記載内容を決定しましたのでお知らせします。

【決定内容】
2021年度東京大学一般入試(2020年度入試)においては、従来の出願要件に加え、次の(1)~(2)のうちいずれか一つを定めることとします。

(1) 入試センターによって、「入試センター試験」の受験条件を満たすと確認された民間の英語試験(以下、「認定試験」という。)の合格(ただし、CEFRと同等のスコアを有する試験)を提出すること。

(2) 日常の授業における学習状況や試験の成績等から総合的に評価した結果、CEFRのA2レベル以上に相当する英語力があると認められることが確認されている高等学校等(※)に在籍していること。

(3) 同様の理由で上記(1)~(2)のいずれも満たさない場合は、その事実を明記した理由書。

https://www.u-tokyo.ac.jp/ja/admissions/undergraduate/e01_admission_method_04.html

12

【問い】

高校教員は実際に

「日常の授業における学習状況や試験の成績等」から

「CEFRのA2レベル以上に相当する英語力」

の有無を測ることができるのか

パフォーマンス・テスト

・ (望んだものかはおもかく)実施回数増加傾向

静岡県 科目	Speaking		Writing	
	2016	2017	2016	2017
コミュ英I	1.8	2.7	0.7	1.2
コミュ英II	1.9	2.4	0.8	1.0
コミュ英III	1.1	2.6	0.6	1.4
英表I	1.5	2.4	1.4	2.6
英表II	1.7	2.3	2.5	3.0

https://drive.google.com/open?id=1Ln2oL_C_Ytx-VjllJeh_UAEFZL3JP7c

パフォーマンス・テストの内容分析

(出口マクドナルド・福田・亘理, under review)

・ 平成29年度作成・実施パフォーマンステスト

・ 静岡県内84高校、90タスク

・ CEFR A2のSpeaking/Writing力測定

・ 共有・改善のために県総合教育センターが収集

平成29年度版「CAN-DO リスト」における達成率調査書

平成29年度の「CAN-DO リスト」において、CEFRのA2レベルのスピーキング力またはライティング力の達成率(内部)を算出するために用いたパフォーマンステスト(複数回実施した場合は任意の1回)について以下の項目を記入してください。

A2レベルのタスクになっているか

レベル	n = 83	
A1	31	37.3%
A2	38	45.8%
B1	13	15.7%
B2	1	1.20%

- ・ 対象学年
 - ・ 1年 28.2%, 2年 41.2%, 3年 30.6%
- ・ 領域内訳:
 - ・ ライティング: 53.7%
 - ・ スピーチ: 30.5%
 - ・ インタラクション: 15.7%

傾向と特徴

- ・ Writingタスク: argumentativeに偏っている
 - ・ 「〇〇(すべき)である、賛成か反対か」
 - ・ 課題: ルーブリックの記述の不明瞭さ、書いた内容と評価の関連の不透明さ、語数・文数設定の必然性のなさ
- ・ Speechタスク: 書いたものを覚えて発表する形式
- ・ Interactionタスク: Show and Tell
 - ・ 課題: 状況設定と要求される言語使用のずれ、「例」の多さ

ごく基本的な個人情報や家
買物、地元の地理、仕事
直接の関係がある領域に関
文やよく使われる表現が理解
簡単で日常的な範囲な
身近で日常の事柄につ
単純で直接的な情報交
応じることができる

学習指導要領:
(話題) 日常的な/社会的な
×
(支援) 多くの/一定の/ほとんどなし
×
(活動・資料) ...を基に/活用しながら
×
(言語) 基本的な/多様な語句や文

	A2	A1
A2	<ul style="list-style-type: none"> ・ 多くの場合、簡単な表現のある発音で述べられれば、身近な話題に関する短い会話や身近な事柄に関する短い説明の概要や要点を理解できるようにする。 ・ 身近な話題に関して簡単な発音で述べられた短い説明を読み、概要や要点を理解できるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 日常生活に関する事柄や個人的な関心事(趣味、学校など)について、ある程度事柄をすれば会話に参照することができるようにする。 ・ 身近な話題について、簡単な語句や文を用いて、自分の意見やその理由を述べることができるようになる。 ・ 身近な事柄(自分、学校、地域など)について、簡単な語句や文を用いて、短い説明や文を書くことができるようになる。
A1	<ul style="list-style-type: none"> ・ 多くの場合、簡単な表現のある発音で述べられれば、身近な事柄(自分、学校、地域など)に関する短い会話や説明を理解することができるようにする。 ・ 身近な事柄(自分、学校、地域など)に関する短い説明を読み、イラストや写真を見ながら、概要を理解することができるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 多くの場合、簡単な語句や文を用いて、身近な事柄(自分、学校、地域など)に関する短い説明や文を書くことができるようになる。 ・ 身近な事柄(自分、学校、地域など)に関する短い説明や文を用いて、簡単な説明や文を書くことができるようになる。 ・ 身近な事柄(自分、学校、地域など)に関する短い説明や文を用いて、簡単な説明や文を書くことができるようになる。

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyō/chukyō3/056/siryō/_jcsFiles/sFieldfile/2015/10/29/1363262_10.pdf

英検2級
(allegedly, A2~B1)
ライティング
80語~100語

→

英検ライティング
対策が必要だ!
何度も100語
書かせよう!

木口川大

- ・ 2018第2回: Today, some people buy products that are good for the environment. Do you think buying such products will become more common in the future?
- ・ 2018第1回: Some people say that too much water is wasted in Japan. Do you agree with this opinion?
- ・ 2017年第3回: Some people say that the number of cars in cities should be limited. ...

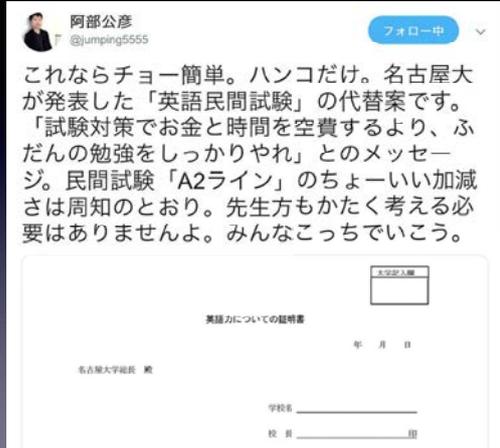
http://www.eiken.or.jp/eiken/exam/grade_2/solutions.html

19

結論・論点

- ・ 妥当性・信頼性のある「判定」を教員側に課するのは現状、酷
 - ・ 外部試験導入を有名無実化するため？.....長期的リスク
- ・ アセスメント能力の涵養はこれから: 要時間・経験
 - ・ Cf. 外部試験・権威的判定に委ね受けられてきた歴史的経緯
- ・ 「追い風参考記録」でもいいじゃんという能力観は可能か
- ・ 単元を通じて・重ねてパフォーマンス・テストに向かっていく授業という特質

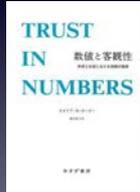
20



21

Porter (1995)/ポーター (2013)

- ・ 社会での専門家に対する信頼が弱いとき、あるいは弱くなったとき、エキスパート・ジャッジメントに代わるものとして「数値」あるいは「手続き化」がすすむ。定量化あるいは手続きの標準化とは、力をもつ部外者が専門性に対して疑いを向けたときに、その適応として生じるのである (p.303)。



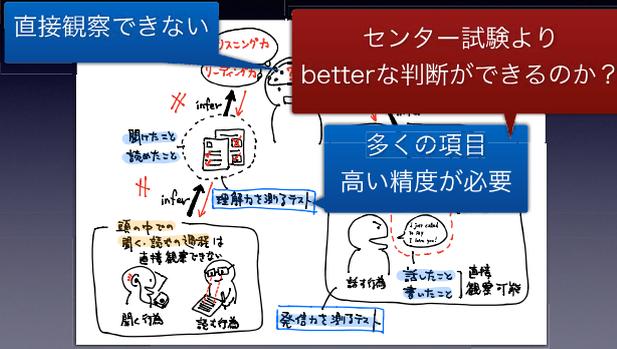
22

結論・論点

- ・ 妥当性・信頼性のある「判定」を教員側に課するのは現状、酷
 - ・ 外部試験導入を有名無実化するため？.....長期的リスク
- ・ アセスメント能力の涵養はこれから: 要時間・経験
 - ・ Cf. 外部試験・権威的判定に委ね受けられてきた歴史的経緯
- ・ 「追い風参考記録」でもいいじゃんという能力観は可能か
- ・ 単元を通じて・重ねてパフォーマンス・テストに向かっていく授業という特質

23

結論・論点

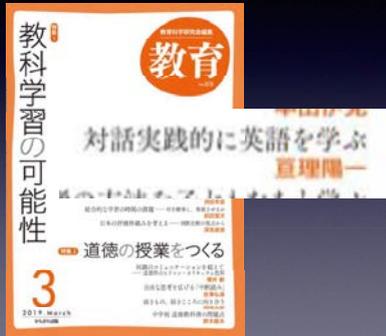


24

【答え】

現状は十分できるとは言えない
しかし含意として言えるのは:
試験の結果より
もっと生徒一人ひとりのことをみよう
生徒の英語運用能力をみる能力を鍛えよう

最後に宣伝



これからの大学入学者選抜に望むこと

東京都立三田高等学校長／全国高等学校長協会長

笹のぶえ

南風原：

続けて後半最後になります。笹のぶえ先生、どうぞよろしく願いいたします。

笹：

こんにちは。東京都立三田高等学校の校長の笹でございます。私の教科の専門は、国語です。今日は、英語の試験の内容に対する視点からではなく、今年度、全国高等学校長協会会長として、高大接続改革に関係する会議に出席したり、全国の高等学校の校長先生方と情報交換をしたりする中で、英語の資格・検定試験について考えたことを、受検する生徒を抱えた高等学校の関係者の立場からお話いたします。

多くの高等学校の関係者は、これからの時代に向けて、「高校生に育成したい力として英語教育の充実が必要である」と共通理解をもっています。「英語の4つの技能をバランスよく育成すること」の重要性についても共通認識をもっています。さらに、「高等学校の学習の成果として、大学入試で、この4つの技能を評価すること」、これ自体も否定しているわけではありません。また、現在様々な目的で作られた民間の英語の資格・検定試験が、これまでの大学入学試験で、目的をもって活用されてきた実績も評価していますし、その資格・検定試験の質等を否



定するものでもありません。

では、実施が、ここまで迫ってきているこの時期に、「このまま実施が可能だろうか。」というような不安が、広がる一方なのはなぜでしょうか。それは、民間の英語資格・検定試験の活用が検討された当初から、課題であると指摘されていた事柄について、具合的な解決が果たされていない上に、実施の時期が近づけば近づくほど、さらに、新たな課題が見えてきたからです。もしもう、後戻りはすることができないならば、「大学入学共通テストの枠組み」で行う民間の英語資格・検定試験として、安心して受検できる環境を整えていただきたいと思います。

今、全国の高等学校関係者は、「この資格・検定試験を初めて受検することになる現在の高校1年生に、不要な負担をかけずに英語の資格・検定試験を実施する環境を整えて欲しい。」「指導する者として、安心して資格・検定試験の受検会場に、生徒達を送り出

せる環境を整えて欲しい。」という思いでいます。

まず、スライド2をご覧ください。1年前のこのシンポジウムで、全国高等学校長協会(*以下全高長)の前任の会長である宮本久也氏が、「高等学校で英語の4技能を育成し、それを大学入試で評価するという全体の方向性への理解は進んでいる。」が、「4技能評価に民間の資格・検定試験を活用することに心配の声は多い。」という現状を紹介しました。そして、①から⑤の心配・不安の理由を具体的に示しました。しかし、会場の皆様方が既に、長く耳にしてきたこの不安要素や課題が、1年経った今日に及んでも、解決されていないのです。そして、昨年、宮本氏が、最大の問題であると強調された、この以下の2つでさえも、一年を経た今日でも、解消されていないのです。この不安や問題の解消こそが、「高校生に不要な負担をかけずに、民間の資格・検定試験活用への環境を整備してください。」という高等学校側の思いを、叶えることにつながると考えます。

本日は、全国47都道府県の高等学校に実施したアンケートを基に、現在も継続している不安や課題について、改めてお伝えしたいと思います(スライド3)。各都道府県から、10校の高等学校に回答をお願いしました。内訳は、進学校4校、進路多様校4校、専門高校2校です。8項目の質問と9項目めとして、「実施に向けて不安に感じていること」の自由記述の回答を求めました。

まず、スライド4の①にあるように、新しい資格・検定試験を作ってもらって、それで一本化してこの4技能を測ってほしいと

いう声が約4割です。既存の民間の資格・検定試験を活用するのであれば、選択を受検生、高校生に任せるのではなく、文部科学省や大学が、選定または指定してほしいという声が合わせて約6割もあります。つまり、この資格・検定試験に対して、不明瞭な現状で、高校側も悩んでいる状況です。②の検定料については、実施されている民間の資格・検定試験の現在の検定料を想定して、昨年のアンケートに比べて、3000円から5000円という回答が増えています。現実的な考え方になってきたといえますが、しかしこれは、できるだけ費用は低くしてほしい、ということに変わりはなく、この高額な検定料を、決して高校現場が甘受しているわけではありません。

スライド5の③と④、資格・検定試験の活用と英語全体満点に対する割合については、次(スライド6)にお示しします⑤の項目と同様に、高等学校は、民間の資格・検定試験を、必要最低限の出願資格として活用すべきだ、という意見が優勢を占めています。これまでも全高長は、「ハードルは低くウエイトは小さく」とずっと言い続けてまいりました。既に公表された活用方法、本日、南風原先生からもお話がありました。そうした活用方法には、大学が、高校生の現状や地域の現状を判断して下さった結果が反映されていると感じています。⑥の受検の時期については、学校で指導するというのが約6割でした。

こちら(スライド7)の⑦のほうでは、学校で指導するは、直接の得点に結びつくような受検対策指導を、授業で実施する、講習

や放課後に実施するという対策が含まれたものです。⑧では、共通テストの継続実施を望む声が67.4%です。センター試験のリスニング試験等でも、時には不都合が生じていることは皆さんもご存知の通りです。しかし、大学入試センターが30年に及び蓄積してきた作問力や、検証力、運営力など多面的に評価して、高等学校は、大学入試センターに信頼を寄せています。そして、これを引き継ぐ形でたぶん作られていこう大学入学共通テストに、高等学校は強い期待を寄せているということです。

ここ(スライド8)からは、民間の資格・検定試験導入について、具体的に高校現場で、心配や課題について、記述回答の中から拾ってみました。たとえば、TOEFLやTOEICのように、扱う文化的背景や用いる語彙が違う検定試験を受検することの公平性はどうか、CEFRの対照表も、大学入試に民間の試験を使っているのかという議論が始まった当初の頃と、現在私たちが目にしているものは、異なっています。CEFRを基準値とすることについて、疑問が生じます。現在のセンター試験では、全国で約700の全ての会場で一斉に同じことが、実施要綱に従って実施されています。非常に管理された実施体制で行われています。だから仮に1会場で事故が発生したとしても公平に対処できるようになっているわけです。それが、実施時期も違う、内容も異なる資格・検定試験で、もし事故が起こった場合、どうなるのでしょうか。ある1会場でのトラブル対処が、公平に全資格・検定試験に反映されるかということ私達

は非常に不安に思っています。

資格・検定試験の実施主体と対策問題集の作成主体が同じあることについて不正はないのかと、これは議会でも話題になっていることは皆さんもご存知だと思います。国に準ずる機関が、チェック機能を完備し、罰則規定をしっかりと設けて対応している資格・検定試験もある一方で、自社の倫理規定のみで対応する予定であるという実施主体もあります。資格・検定試験の運営において、公平公正な高校入試が至上命令の高等学校側からすれば、こうした点が非常に強く不安を覚える原因であります。こうした点を、新たな課題が生じてきていると、とらえています。

受検機会の確保(スライド9)については、地域的、経済的、実施日程等の理由で、望む資格・検定試験を受検できない環境に置かれる高校生が存在してしまいます。

学習指導要領の内容(スライド10)では、大学側は、大学入試の時点で、どのような英語力を測りたいのでしょうか。各大学からの資格・検定試験の内容に対する分析や評価が、私達高校現場には十分に伝わっていません。アドミッション・ポリシーと資格・検定試験の位置づけがよく分かりません。

年末に、『大学入学共通テストの枠組みで行う民間の資格・検定試験に関する受検ニーズ調査』の結果が出ました。全国の大雑把な傾向として、6月と10月の受検ニーズが高いという結果が出ました。この6月と10月の時期は、高等学校では、春の体育祭、秋の文化祭、春のインターハイ予選、秋の新人

戦、様々な行事が目白押しの時期です。資格・検定試験の実施は、学校行事や部活動等の高校生の日常の活動に、大きな影響を及ぼすものです。

高等学校は、生徒の受験指導のために、各大学の情報を求めています(スライド 11)。日々の受験勉強や志望校調整に、このことは影響を与えるからです。これまで、受験生は、各大学の受験科目が何であるかで、受験対策をしてきました。しかしこれからは、それに加えて、英語の資格・検定試験の扱いも視野に入れなければなりません。「2回の受験のチャンスをどう生かすか」まで、受験スケジュールに組み入れて対策することになります。進路指導を担当する教員や担任の進路指導に、非常に大きな負担がかかることになります。

障害のある受験生への対応、セキュリティ対策など、これまでの大学入試センターには、ナショナルスタンダードの大学入試センターの試験を実施して積み重ねてきた経験があります(スライド 12)。高等学校の多くの教員も生徒も、それと同じ程度のことを、これから開始されるだろう英語の資格・検定試験の実施においても求めています。検定料については、経済的負担を軽減するために、国は、低所得者層の進学を支援する給付型奨学金の中に、大学等の受験料も含めてくれました。ある検定団体で、一定の基準を設けて割引を検討するところもあります。しかし、これまででは、センター試験の検定料18,000円でだけで済んでいたものが、最低でも1回の英語資格・検定試験の検定料が加わることになります。それが2回に

なる生徒もあれば、対策のために複数回受験する生徒も出てきます。試験会場から遠い地域の生徒であれば、交通費と、場合によっては宿泊費も加わってきます。家庭の経済力が受験機会を狭める可能性もあるということ自体が大きな問題ではないでしょうか。

2018年12月、昨年 of 年末です、『英語4技能情報サイト』が整備されました(スライド 13)。高等学校の生徒や保護者、教員が英語の資格・検定試験を容易に比較することが可能になりました。既に皆様方も目を通していていると思います。しかし比較したことで、一層課題が見えてきたと私は感じております。たとえば、『大学入試英語提供システム参加要件』では、「毎年度4月から12月の間に複数回の試験を実施すること」という条件を出してありました。しかしサイトをご覧くださいと、12月に試験予定がない団体が複数あります。採点等を考慮すると、12月に実施は難しいという判断であるとは伺いましたが、現状で多くの高校生は、全ての資格・検定試験が、4月から12月に受験できる、受験の機会があると理解していると思います。これからは、高等学校は、「3年生の4月から11月の期間に受験するように」と指導せざるを得なくなると思います。また試験実施会場についても、システムの参加要件では、「毎年度全都道府県で実施すること」という条件が付いています。「当分の間、受験希望者が著しく少ない地域では、近隣の複数県を合わせた地域で合同実施することができる」との条件の方が優先され、地方のブロックごとに実施を

公表した団体が多い状況です。これは明らかに地域格差です。

検定費用については、CEFR の A2 以上で、最も安い検定料を設定している団体が 6,900 円です。高いものでは 25,380 円です。先ほどスライドで最初に示しましたが、全高長のアンケートでは 3,000 円程度だったわけです。今後の実施会場の確保状況によっては、さらに値上げも考えられるという団体もあります。一方で、世界共通の資格・検定試験なので、日本が大学入試に活用するという事情を鑑みても値下げは無いと説明しているところもあります。回数に関しても、「1 回の試験で英語の 4 技能全てを評価するもの」と、システムの参加要件にあったと私は記憶しておりますが、リスニングとリーディングのテストとスピーキングとライティングのテストを別日程で、組み合わせで受検しなければ 1 つの検定にならないという設計をしている団体もありました。これは、受検機会をさらに制約します。

高等学校では、計画的に、先を見通して、年間の行事計画や教科の指導計画を作成しています。何月何日に、どこの会場で、何の試験を受けられるのか、という情報がまだ全く公表されていない状況です。「2019 年 11 月までに公表する」と、情報サイトにうたったところもありますが、学校の暦の速度と民間の暦の速度のずれを感じます。先にお話ししたニーズ調査が実施日の設定、実施会場の確保や検定料の低廉化につながる資料となるよう、文部科学省は、指導していただきたいです。

大学側からかなり情報が提供されるよう

になりました。こちら（スライド 14）は 12 月末に作ったものですので、少し数字が違いますが、今後、私立大学も含めてどのように活用していくかということの情報を、高校に早く公表していただきたいと思います。活用方法の決定の際に、ここまで繰り返して述べた、高等学校の不安や課題の現状を考慮していただき、受験生に不要な負担、不安を与えないことを第一義に考えていただきたいと思います。

2018 年 8 月に、例外措置を示す『大学入学共通テストの実施方針追加文』が出ました（スライド 15）。この活用の『ガイドライン』が、2 月に、全高長をはじめとした関係機関に通知されています。全高長も、事務局や代表校長と共に、この内容を検討しています。例外措置の扱いは、高等学校の校長の判断にゆだねられる部分も大きいので、現場の校長先生が判断に迷わないように、『追加文』の趣旨が正確に共有される『ガイドライン』にしなければいけないと考えています。8 月に『追加文』が発表された際に、「高校 2 年生の受検が前提」であるように誤解された方も少なからずおられると聞いております。『追加文』はあくまでも例外措置を定めたものですので、誤解や誤読をされないためにも、『ガイドライン』の策定に、全高長も協力したいと考えております。

最後に、英語の資格・検定試験を受検する生徒達のために、文部科学省や各都道府県の教育委員会をはじめ、実施主体である民間の団体の方々、資格試験を活用する大学の方々をお願いします（スライド 16、17）。2020 年度中に英語の資格・検定試験を受検

する生徒に、不要な負担や不安や戸惑いを与えないために、速やかに、①「いつ」、これは何月何日のレベルで、②「どこで」、これは具体的な検査会場の明示を、③「いくらで」、これは経済弱者はもちろん、全ての受験生の負担軽減を考慮し、④「どのように」、これは「大学入学共通テストの枠組み」で行う民間の英語資格・検定試験として公平な運営のあり方を公表することで、ご回答をいただきたいと思います。受験する生徒、保護者、学校関係者に、早く「安心」を与えて欲しいと思います。

地域によっては、学校会場を利用しなければ、かえって地域格差や経済格差が生じるところがあるのは事実だと思っています。その場合、各学校や各民間団体に運営をゆだねるのではなく、運用のルール策定などは、文部科学省に指導していただき、都道府県教育委員会どうしが情報を共有し、連携していただきたいと思います。現在の資格・検定試験の実施の状況では、1つの会場で複数人が受験するような際、受験者と受験者の机の間隔を正確に測り、厳正な受験環境を確保しようとマニュアルを作って実施している民間団体もあります。しかし一方で、隣の生徒の声が聞こえることが前提で「聞き取ることができるようリスニング力の生徒であれば、最初から自分で回答するから大丈夫です。」とおおらかな考え方をされている民間団体もあります。場合によっては、民間団体どうしが情報交換し、自社の有する運営の知見を他社と共有し、効果的な運用に結び付けていく努力も必要ではないでしょうか。「大学入学共通テストの

枠組み」で行う民間の英語資格・検定試験です。資格・検定試験実施のための実施マニュアルの公表、公平性や安心安全を担保できる公的なルールの策定があれば、運用に関して高等学校の不安は減少するものと思います。

そして、各大学には、全国の受験生の置かれている環境を検討していただき、「大学入学共通テストの枠組み」で行う民間の英語資格・検定試験として、各資格・検定試験の活用の方向性を定めていただくことを重ねてお願いしたいと思います。予定通りに行けば、受験生は2020年の4月にこの試験を受検するわけです。残すところ1年2カ月しかありません。14カ月しか残っていません。昨年のシンポジウムの報告書を読み直してみても、1年経っても諸課題が解決されていないことに対して、私は「つらく」思いました。しかし、どの課題を解決していけばいいか、それは1年前に比べて、ずいぶん明らかでかつ具体的になってきたと思います。ぜひ受験生に不要な負担をかけずに英語の資格・検定試験を実施する環境を整えていただきたいと思います（スライド18）。長くなりました、以上です。ありがとうございました。

南風原：

笹先生、どうもありがとうございました。1点、私から補足をしたいと思うのですが、今検定料がかかると、地域によっては時間も非常にかかるという話が出ましたが、それである資格が得られたり、ある検定で力が確認できたりというのはそれなりの価値

があると思います。ただ今回の共通テストとしての利用は、それだけ時間をかけて、宿泊までしてお金をかけて得られるものは何かと言うと、出願資格です。やっと受験できる、というだけです。これまでは出願は誰でもできたわけです。それを得るためにそれだけの時間とお金がかかるということです。あるいは加点で、数パーセントの加点が得られるか、あるいは、結局得られなかったり、出願資格を失ったりと、それだけのための値段であり時間だということを確認しておきたいと思います。ウェイトを低くというのも一理ありますが、ウェイトを低くすればするほど、それにかかるお金・時間とのバランスが悪くなるというのが、先ほど私が示した日本経済新聞の記事で指摘したことです。

最近、柴山文部科学大臣出された高等教育研究改革イニシアティブ、いわゆる柴山イニシアティブが出されていますが、そこで基本的な考え方として、国の責任において意欲ある若者の高等教育機関への進学機会を確保する、ということが大きく出ています。今回の改革が、出願資格を得るのにこれだけハードルが高いというのは、むしろこのイニシアティブに反するのではないかと感じましたので、一言補足させていただきます。

では休憩に入ります。この間に後半用の質問用紙、あるいは前半用のものももしあれば出していただければと思います。休憩を取りまして、討論の開始を35分から行いたいと思いますのでよろしくお願いします。

1

東京大学高大接続研究開発センター 主催
シンポジウム
平成31年2月10日

これからの
大学入学者選抜に
望むこと

東京都立三田高等学校長
全国高等学校長協会会長
笹のぶえ

2

1年間で何が解決したのか

- ①学習指導要領との整合性
- ②家庭の経済力による影響
- ③地域格差による影響
- ④高等学校における英語教育が変質してしまう懸念
- ⑤大学入試での活用方法が明確になっていない

最大の問題

- ・民間の資格・検定の内容が3月末までに明らかになっていない
- ・各大学がどう活用するかが新年度にならなければ明らかにならない

3

全国高等学校長協会 大学入試対策委員会 調査1

高大接続改革における新たな大学入試の在り方
～新たな大学入学者選抜の円滑な実施に向けて～

回答数 全国 470校
実施時期 平成30年8月

4

全国高等学校長協会 大学入試対策委員会 調査2

- ①民間の資格・検定試験の活用について

a 新しく民間が策定すべき	42.1%
b 既存の資格・検定試験の中から 文部科学省が選定・認定すべき	45.3%
c 既存の資格・検定試験の中から 大学が指定すべき	12.6%
- ②妥当な認定試験の受検料について

a 1000円から3000円	58.5%
b 3000円から5000円	38.3%
c 5000円から8000円	3.0%
d 8000円以上	0.0%

5

全国高等学校長協会 大学入試対策委員会 調査3

- ③民間の資格・検定試験の活用について

a 得点化して加点	16.6%
b 出願資格	26.4%
c 出願資格と加点の併用	14.3%
d 大学が自由に活用	29.4%
e いずれともいえない	13.4%
- ④民間の資格・検定試験の最高点の英語全体満点に対する割合について

a 2割以上	15.5%
b 大きい方が良い	7.9%
c 小さい方が良い	43.6%
d どちらともいえない	33.0%

6

全国高等学校長協会 大学入試対策委員会 調査4

- ⑤民間の資格・検定試験への出願資格について

a 必要最低限の出願資格	59.1%
b インセンティブ	9.4%
c どちらとも言えない	31.3%
- ⑥民間の資格・検定試験の受検時期について

a 学校で指導	60.6%
b 生徒自身で考える	12.1%
c 行事を見直す	4.3%
d いずれともいえない	22.6%

7

全国高等学校長協会 大学入試対策委員会 調査5

- ⑦民間の資格・検定試験に向けた指導について

a 学校で指導する	64.7%
b 学校で指導しない	10.4%
c どちらともいえない	25.1%
- ⑧平成36年度から英語の共通テストがなくなることについて

a 継続実施	67.4%
b 民間の試験利用への移行	9.4%
c どちらともいえない	22.8%

8

全国高等学校長協会 大学入試対策委員会 調査6

- ⑨民間の資格・検定試験で心配なことや課題について
- 公平性の担保
 - ・異なる検定試験とCEFRの対応表で公平性が保てるのか
 - ・機器の性能、トラブルによって受験生に不利益が生じるのではないかと
 - ・大学側が求める検定試験にばらつきが出る可能性があることや大学の扱いに差がでる
 - ・検定試験が特定の業者に偏ることが想定されるが、滞りなく実施可能なのか
 - ・受検料が極めて高額であるため、家庭の経済力や職業が学力差につながってしまう
 - ・問題漏えい

全国高等学校長協会 大学入試対策委員会 調査7

⑨民間の資格・検定試験で心配なことや課題について

○受検機会の確保

- ・地方では、受検できる試験ががざられてしまう
- ・料金・交通費からの受検機会の不均等
- ・いずれの資格・検定試験も受検料が高額であり、経済弱者にはきつ
- ・TEAPやTOEFLは、大都市圏での開催なので、地方の生徒の受検機会が制限されてしまう

全国高等学校長協会 大学入試対策委員会 調査8

⑨民間の資格・検定試験で心配なことや課題について

○学習指導要領と授業

- ・民間の資格検定試験の内容が高等学校学習指導要領に準拠しているのか
 - ・民間の資格・検定試験に対応するための授業にならないか
 - ・道具としての英語も大切だが、学問としての英語も大切にすべき
 - ・高度な学問研究を行っていくために必要な英語力の減退につながるのではないか
 - ・現在の資格・検定の目的が、大学入試のためではない
- #### ○各種大会・学校行事
- ・学校行事との日程調整が不安
 - ・高校3年生の各種大会への参加など、学校内外での諸活動が制限されてしまう

全国高等学校長協会 大学入試対策委員会 調査9

⑨民間の資格・検定試験で心配なことや課題について

○その他

- ・各大学において、受け入れる資格・検定試験の指定・公表を早期に行ってほしい
- ・制度の詳細と各大学の扱いを早急に明示してほしい
- ・4技能を適切に評価できる資格・検定試験を採用する方向性についてはっきりとした指針を早い時期に示してほしい
- ・民間の力を活用すること自体は良いと考えるが、自社の利益誘導に利用されないように何か歯止めも必要である

全国高等学校長協会 大学入試対策委員会 調査10

⑨民間の資格・検定試験で心配なことや課題について

○その他

- ・英語の4技能の重要性は認識しています。外部機関に頼るのではなく、大学入試センターが4技能を測る新たな試験を作成すれば良いと思う
- ・現在の民間の資格の設定が、大学が求めている英語能力と合致するのかが
- ・検定試験の費用負担分については、大学入学共通テストの検定料とトータルで、現行のセンター試験検定料相当額に収まるような工夫が必要
- ・無料または補助金を出すべき

英語4技能情報サイトから

大学入試英語提供システム参加要件では (2018年12月)

実施時期…毎年度4月から12月の間に複数回の試験を実施すること

⇒ 12月実施予定なしが4団体

⇒ 2020年度実施日は未公表

会場……毎年度全都道府県で実施すること

⇒ 47都道府県予定は4団体

⇒ 2020年実施会場は未定

検定料……適切な検定料であることを公表していること

⇒ 最低5800円から最高25380円

回数……1回の試験で英語4技能の全てを極端な偏りなく評価するもの

であること

⇒L&RとS&Wの両方の試験を受検する必要がある

各大学の状況

国立大学協会のガイドライン(2018年3月)

- ①一定水準以上の成績を「出願資格」にする
- ②成績に応じて共通テストの英語の成績に「加点」する
- ③「出願資格」と「加点」の併用

⇒A: 出願資格	16校
B: 得点換算して加点	21校
C: 「A」+「B」	8校
D: 利用しない	1校
E: 検討中	20校

(2018年12月末現在 河合塾調べ)

「大学入学共通テスト実施方針(追加文)」の ガイドライン 未公表

- ①非課税世帯であるなど経済的に困難な事情を証明できること
- ②離島・へき地に居住または通学していること
- ③高等学校の学びに支障がないと学校長が認めた者
- ④病気等のやむを得ない事情により受検できなかった等の者

大学入試英語成績提供システムの 資格・検定試験を 14ヵ月後に受検する生徒のために

- ①いつ・どこで・いくらで・どのように実施できるのか確定を
⇒「2019年11月までに公表」では遅すぎる
- ②信頼性のある運営体制の公表を
⇒学校会場を利用するのか?
センター試験並みの管理は可能か?
機器の確保は?
- ③地域格差・経済格差の課題の解決を
⇒大学入学共通テスト受験者全員にその検定料プラス資格・検定試験の検定料の負担が強いられることへの対応は?
ニーズ調査の結果を有効活用した場合の会場と検定料は?

**大学入試英語成績提供システムの
資格・検定試験を
14ヵ月後に受検する生徒のために**

- ④各大学は扱いをどうするのか決定を
⇒志望校と併願校
- ⑤各大学からの資格・検定試験の内容の検証を
⇒大学入学時に必要とする英語力を測れる検定であるか？

ご清聴ありがとうございました

2020年に初めての資格・検定試験を
受ける全ての者が、
希望する時期に
希望する会場で
安心して受検できることを
要望します。

討 論

討 論



南風原：

それでは最後の討論を開始したいと思います。討論の前半は登壇者の間でのやり取りで、後半に皆さんからいただいたご質問の、全部にはお答えできないと思いますが一部選んで回答していただくこととしたいと思います。最初に石井先生のほうから、今日のご講演をお聞きになって質問やコメント等ありましたらお願いできればと思います。

石井：

ありがとうございます。最初に申し上げますが、私は本日、ここに東京大学を代表する者として出ているわけではございません。したがって、以下の発言は全て個人としての資格であるということをお断りしたいと思います。6人の先生方のご発表を、いずれも大変興味深く、また面白く聞かせていただきまして、それぞれにお聞きしたいこともいろいろあるのですが、あまり時間をとってなんですので、簡単にコメントしながら3人の先生方にご質問

させていただきたいと思います。

まず大塚先生ですが、センター試験を1つの文化資産としてきちんと評価して受け継いでいくべきであるというご主張に深い共感を覚えました。また50万規模の試験を公平公正に実施することの大変さ、ご苦労ということも大変勉強になりました。特に私が重要だと思ったのは、センター試験の実施主体が大学であるというご指摘です。これはスライドでもございましたように、センター法に大学が実施すると書かれており、また文部科学省令第十八条に確かに、大学入試センター試験は各大学がセンターと協力して同一の期日に同一の試験問題により協働して実施する、と明記されております。つまりイニシアティブは大学にあるわけですが、今回問題になっております民間試験は、まず実施主体が大学ではない、民間事業者である。また実施される期日もバラバラであり、試験問題もバラバラである。これで公平公正な入学試験の代わりができるのかというのは、誰でも思うことだと思います。

昨年 9 月に東大の五神総長が当時の林文部科学大臣と会談いたしまして、大臣はその場で、大学入試センター業務における英語の成績の提供について、その位置づけを明確化するために関連省令の改正を検討することを約束されたと伺っております。これは当然、民間試験の成績提供についてはあくまでもシステムについてセンターが責任を持つ。したがって、問題が生じた場合には当然文科省が最終責任を持つということの意味していると了解しております。その約束を信じたからこそ、東大としては民間試験の成績提出を選択肢の 1 つにするという決断をしたわけです。その後、この省令改正作業がどの程度進んでいるのか明確な方針が示された様子はありませんが、もちろん大臣の言葉ですから当然重いわけで、これは鋭意検討中なのだと思いたいと思います。関係者の方、いらしたらよろしく願いいたします。

大塚先生はまさにセンターでお仕事をしておられましたので、これはご質問ですが、そのお立場から今度の民間試験に関して文部科学省、大学入試センター、各大学、民間事業者、それぞれがどのような責任を負うべきであるのかということをお伺いしたいと思います。これが大塚先生へのコメントと質問です。

荘島先生はいろいろ資料を示しながらエビデンスベースのお話をしてくださいました。資料を見ただけでは専門性が高くて私にはよく分からなかったのですが、ご説明を伺ってセンター試験のことが大変よく分かりました。特に最長老で 85 歳の受験者が

いるというのは私も勇気づけられて、まだまだ受けられると思ったのですが、いまはこれだけのコメントにとどめておきます。

松井先生、高校から見たセンター試験の評価、大変参考になりました。特に場面設定の不自然な問題というご指摘は非常に面白くて、ことばそのものの重要性をご指摘なされたことにも非常に共感を覚えました。brought と bought でボーッとしているんじゃないよというところで、チョコちゃんが登場するとは思いませんでした。本当は松井先生にいちばん伺いたいのは、上着を貸すの貸さないのという時に松井先生と同じ名前を持つタカシの相手役のトモヨというのはいったい誰なのか、ということなのですが、これはプライバシーにかかわることなので、冗談として置いておきます。

亘理先生とのお話とも絡むのですが、東京大学が出願資格の 1 つとして高等学校長による英語力の証明書提出ということを選択肢として採用したということがあります。これは基本的に、個々の受験生の英語力について一番正確に把握しておられるのはやはり高等学校の現場で日常的に指導に当たっておられる先生方であるはずである、したがって東京大学としてはそのご判断、評価を信頼し尊重するという基本的な考えに基づいたものです。その意味で、本来こちらのほうが第一の選択肢であって、民間試験はこれを補う第二の手段として位置づけるほうが正しいようにさえ私は思っております。ただ、亘理先生からは、やはり妥当性・信頼性のある判断を教員側に課するのは酷であるというお話もございました。これも非

常に実証的な裏付けに基づいたお話で、なるほどと思うところが多かったです。

ただ東京大学について申しますと、我々が求めているのはあくまでも出願資格の判定材料にすぎません。つまり A2 レベルの英語力があれば東大に入れるとは一言も言っていないわけです。入ってからの授業にそれで十分だとも全く言っていない。より高度な英語力が必要で、それは二次試験の個別試験で判定するということなのですが、世間にはそこを勘違いして、東大が A2 レベルでいいとは情けない、などということを使う人もいます。こういう勘違いは非常に困るわけですが、私の基本的な考えは、やはりとるべき人を誤って落としてはいけない。法律の世界で「疑わしきは罰せず」という言葉がありますが、入試に関しては「疑わしきは排除せず」というのが基本的な考えです。

つまり A2 レベルであるかどうか厳密には分からないのだけれどもどうしようかと思ったら、巨理先生の言葉では「追い風参考記録」で出願資格を認めていただきたいと思います。出願資格ですから、それは単に試験を受けられるということにすぎません。今までは、さっき南風原先生もおっしゃっていましたが、高校卒業資格があれば誰でも受けられたわけですから、それを英語という1科目の成績でこのように制限すること自体に、私は依然として強い違和感を持っております。

それで私のワーキングが出した第一の選択肢というのは、民間試験は使わないというものだったのですが、いろいろな事情で

そうならなかった。しかし文科省は入試の多様化を推進してきたはずですから、今回のように出願資格を画一的に制限するというのは、むしろ多様化に真っ向から反する方向性なのではないか。いろいろな背景を持つ受験生に門戸を開くことこそやらなければいけないことなのではないかという気がいたしますが、以上は私個人の見解です。

そこで松井先生にお伺いしたいのですが、証明書を発行しなければならない高校側から見れば、やはりいい加減な判定はできないというのは当然だと思います。いい加減でいいとは我々も思っておりません。しかし、今申し上げたような出願資格としての A2 レベルを判断するということは、教えていच्छる立場から見てそんなに困難なことなのか、あるいはそれほど難しくなくできることなのか、ぜひお伺いしたいと思います。これが松井先生へのご質問です。

巨理先生は、今の問題にもし絡んで何かございましたらご発言いただければと思いますが、教師の役割の重要性というご指摘は私もその通りだと思っております。また、長期的リスクを避けるべきだというご指摘も本当におっしゃる通りですので、少し我々も考えなければいけないと思っております。

最後に笹先生ですが、全国の高校を束ねるお立場から様々な懸念を非常に明確に、しかもアンケート結果を引用しながらお示しいただきまして、私も大変参考になりました。その中で、もはや引き返せないから何とかちゃんとしてほしいというご発言もございました。これは本当に切実な声だろう

と思います。私は引き返せると本当は思っていますし、引き返すべきだとも思っていますが——これは東大としてではないですよ、私個人がそう思っているだけですが——現実に高校生を見てらっしゃる立場からすると、これは当然のご心配だろうと思います。

受験生の立場、高校生の立場を考えると、いうことは非常に重要なことだと思いますが、今回は、とにかく改革はすればいいではないか、課題が生じたら後から修正すればいいということ、かなり責任のある立場の方がおっしゃっている。しかしその時テストを受ける受験生から見たら一度きりの、あるいは何回か受けられるかもしれませんが、非常に貴重な受験機会です。その受験生たちを制度改革の実験台に使うかのような発言は、私は全く許すことができません。数々の問題が未解決であることが分かっているのに、まず制度を変えてしまおうというのは、50万人の受験生にかかわる入試改革に関しては軽々に言えることではない。しかし「改革」と言えばいかにも進歩的に聞こえますので、異を唱えるとまるで反動的な、守旧派のように見られてしまう。中には、英語の先生方が特に反対しているが、それは自分達の古い教え方を否定されたような気がしているからなのだろう、ということさえおっしゃっている方がいる。これは今の英語教育の現場を全くご存知ない発言です。高校はもちろんですが、大学でも今、先生方はどれだけ教え方を変えて工夫していらっしゃるか。いまだに、東大に入るとシェイクスピアの講読ばかりやっていると思

っている人がいるのではないかと、私は信じられない思いです。

またベラベラと喋ってしまいましたが、笹先生のご発表の中で、4技能は大事である、だから50万人を対象とした共通試験の枠組みで大学入試センターが主導して共通テストをやるのが理想であるというお話がありました。私もその通りだと思いますが、これが技術的にはまず無理だろうということから、民間試験があるのだから利用すればいいのではないかという話が起きてきた。それなら少し話を変えて、そもそも4技能を測ることは50万人対象では無理だから、やらなくてもいいのではという立場もあると思います。そうまでしてコストをかけてやる意味が本当にあるのかどうか。高校側から見て、それでも4技能を測るような共通試験を何らかの形でやるべきだと思うのかどうかということをお伺いしたい。

さらに、これはむしろ荘島先生や大塚先生にお伺いすべきなのかもしれませんが、そのようなテストをもし本当に統一的に作るとして、それが現実に可能なのかどうかもお伺いしたいと思います。長くなりまして申し訳ありません。ありがとうございました。

南風原：

ただいまお話のありました引き返す可能性についてですが、先ほど休憩時間にも問われましたが、引き返す規模の問題もあると思います。文科省の基本方針は共通テストまたは民間試験または両方と、非常に幅

広く設定されているわけで、その範囲内では今は各大学が問われています。各大学レベルであれば岩手県立大学のように引き返すこともできるし、未定のところはすぐできると思いますのでまだ可能性は大きいと思います。

スピーチを大事にする石井先生ならではのトモヨク・クエスチョンも出ましたが、これは私も気になっていたもので、できればお答えいただき、ということ。そして大塚先生には、責任の所在の問題、松井先生には学校による判断の問題、特に出願資格という観点からということで、笹先生にはそれでも4技能をやるべきか、できるのか、できるのかについては大学入試センターの方々にもお聞きしたいということで、順番にお願いします。

大塚：

石井先生からいただいたご質問は非常に重たいというか、私はその視点で十分に考えたことがないので的確なお答えができるかどうか心もとないのですが、それにかかわって1つ私の方からお伝えしたいことは、そもそもセンター試験という共通試験は、大学の個別試験があってこそその共通試験であるわけでありまして、共通試験と個別試験の役割分担がもっと強調されるべきであろうということです。それに民間試験というのが加わってきておりますし、文科省ということも出ておりましたけれども、そういった要素が付加されてくるのであれば、それらも含めた役割分担ということを考えていかないといけないうらうと思います。

言い換えれば、大学入学共通テストに全て詰め込むわけにはいかないということです。現状の学事暦からして、今は1月の第3週の土日の2日間に試験日を設定して、監督なども出していただいておりますけれども、では英語の4技能試験をやるからそれで試験時間を増やして2日を3日にすることができるとかということさえ、大学にとっては大変なことありますし、なかなかそこまでやり切れないということがあるわけです。

たとえば試験時間を長くするとか、研修をしっかりと積んだ採点者をたくさん用意することができるかということがあれば、それこそ先ほど最後の方で石井先生から質問があった、共通試験の枠組みでセンターが4技能試験をやっていくことも、可能性はゼロではないと私は思っておりますけれども、ただその場合に、スピーキングにしてもライティングにしても、今の記述式も同じような問題を抱えていますが、誰が採点するかという点で実は大学に関わってくることになるという見方はあまりされていない印象があります。もし、共通テストの枠組で英語4技能試験も実施するのであれば、大学の英語の先生はほぼ総動員でそれにかかっていたかかないといけなくなる、あるいは高校の英語の先生までそれに担ぎ出されることも当然考えておかなければなりません。それだけの覚悟を皆がしてくれるのであれば可能だという言い方はできると思います。

あるいは今、CBTでスピーキング、ライティングをやるという方式も入ってきております。センターでも当然、研究開発部のほ

うで CBT のモニター調査を毎年やっております。それなりにそういった形の方式の試験ができるということはセンターの研究開発部で見通しは立ってもいるのですが、ただこれを 50 万人一斉で、今の形でやるとなると、IC プレーヤーのような単純な機器で、不具合が 500 人出て、新聞で騒がれるということもあるわけでありますから、それがどの程度の規模になるのかということを見積るとそうそう簡単には踏み切れないということがあります。全員に鉛筆の代わりにタブレットを持参しろというわけにもいきませんし、そういったことに容易に踏み切れない課題が山積しているということがあるわけです。それは、大学入試センターだけで解決できることではありませんで、大学の個別試験のレベルに絞り込めれば実施可能になる可能性は増大するわけで、その辺に適切な分担のあり方を模索する余地があるのではと思います。

新テストに関しては、文科省の方から、かなり問題の内容まで踏み込んだ指示が来るのですが、そこは文科省の少なくとも役割ではないだろうというのが、センターで試験・研究統括官として関わってきた私の考え方です。思考力・判断力・表現力を測定するためにどういう試験を準備していけばよいかは、基本的にセンターや大学教員の役割になると思いますが、そのような試験の実施を可能にするような学事暦をどう組んでいくべきかとか、段階評定などの形で資格試験化するのが望ましいということなら、定員という考え方を変えてもらわないと先には進めませんし、そういう制度面のとこ

ろをどういじっていくかというあたりが、それこそ明治以来の学制改革といった可能性に繋がりをうることであって、それはまた、文科省でなければできないことだと思うわけですね。試験問題の内容をいじっただけでは、試験制度が変わらない以上、結局、大きく変わっていくことはないと思いますし、さりとて、今の試験の枠組では考えるよりもスピード優先にならざるを得なかったりして、ねらい通りの情報が得られないということにもなりかねません。今の枠組の下では、センター試験は精一杯いろいろなチャレンジを試みてきて今の形に落ち着いているということですので、その点を的確に把握していただいた上で、入試や教育を大きく変えていくためには、文科省としては枠組や制度を動かしていくといった行政ならではの役割を果たしていく必要があるだろうと思います。

民間の役割については、資格・検定試験は、資格レベルの部分に焦点を当てて、たとえばそこに 2 日間しっかり試験時間を取って測定することができるわけですから、そういうところに精力を注ぐ役割が今まで通りあるはずですね。そういった役割をお互いにきちんと共有して、英語教育そして英語の試験のあり方を検討していくのが大事なことはないかと思います。

南風原：

ありがとうございました。松井先生。

松井：

トモヨ問題ですけれども、私は学生時代

の後輩の I 君という方の影響で原田知世さんのコアなファンでして、その名前を借りさせていただきました。妻の名前ではありません。勝手に使ってすみません。

A2 レベルなら A2 レベルの評価を現場の教員がきちんとできるかという問題ですけれども、たとえば、今日亘理先生の資料だと、A2 のところに入るには、英検の級で言えば 2 級レベルの評価が必要なのですが、たとえばライティングでついこの間行われた 2 級のお題は、“Some people say that playing sports helps children become better people. Do you agree with this opinion?” というもので、私は生徒から教えてもらうわけですが、“become better people” というところでものすごく気になって、それは単に成長するということなのかというライティングならライティングの単発のお題設定が上手くいっていないだろうと。授業だと授業のベースで単元があり、読解のマテリアルがありますのでそれに基づいてライティングやスピーキングのタスクを課して評価することは可能だと思います。ただ、いまのように外部試験の単発のものに合わせてやるとなれば、対策問題集を買うとかということになるでしょう、たとえば GTEC 通信講座など、私もかつて通信講座を作っていた人間ですが、その GTEC のガイドブックには、「オンライン学習がもっと普及すれば学校に通学する必要がないという意見があります。この意見について賛成か反対か、いずれかの立場を選んで、あなたの意見とその理由を書きなさい」、というサンプルがありますが、このお題を「教室現場」ではやり

にくいですよ。

これはお題が日本語です。これはお題を英語で書くとコピペでキーワードが入ってしまうので、これから自動採点がどんどん入ってくると思いますが、そうすると残存する部分の扱いはシリアスな問題が、お題が日本語か英語かでも出てくると思うのです。今の GTEC さんのサンプルですか、ガイドブックなので、これは誰が初等中等教育のどの段階で何を学ぶのかという枠の設定をしないのにオンラインだとか通学だというのはナンセンスです。「もっと」というのは何を基準にして比較するのかというデータも示さないと議論はスタートできないのですが、こんな雑なことは私の授業では絶対やりません。私がやろうと思えるのは、センター試験の第 4 問のようなものです。グラフが与えられて読解のマテリアルが出ますが、ああいうものを基にして、では喋ってみよう、書いてみようとなるのが普通に考えるコミュニケーション型の授業のはずです。

少なくとも私は高校の教諭になって 33 年、そういうことをずっとやってきました。ですから、今日、かつての研究仲間も来ていますが、都立高時代の、私の 2 校目ですから 97 年か 8 年に私の学校は単位制の学校でしたが、そこでは高校 2 年生に対する留学支援の週 1 日 2 時間続きの授業を開講していました。私も担当していましたが、そこでは TOEFL や IELTS に向けて留学支援のための授業をして、当然単位認定されます、それが 20 年前です。だから 4 技能が盛り上がって CEFR が入ったらにわかに活気づいてと言いますが、少なくとも私にとっては、

何をいまさら騒いでいるのか、ライティングの指導をもっとちゃんとやっていればそれほど慌てないだろうと思うのですが、それは谷川俊太郎さん、詩人の話ではないですが、私が幸せなら世界はそれでいいのですかということで、私はそれができますが、それを他の先生方が皆できるのかとなると、やはり、亘理先生が関わっている授業も文科省の事業を受けて県で全面的に動いているわけで、そういうサポートのあるところと言わば下世話な言い方ですが「丸腰」で臨むところではちがうだろうと。たとえば私の学校は進路多様校ですから私がいなくて今私がやっているようなことをやる人はほとんどいなくなるのだろうと思うのです。そうすると、やはり今、受験の地域格差が言われていますが A2 レベルの評価をすとなつた時に、英語科の教員の責任が重くなってくると思います。公立を考えてもたぶんトップ校と言われるような学校は専任比率が高いと思いますが、そうではない学校は非常勤講師の割合もかなり多いと思います。非常勤講師の人がそのクラスをずっと持っているとか。ではその人にヒアリングをして学校長が証明を出すのかということところは未知数で、そこは軽々なことは言えないと思います。以上です。

南風原：

ありがとうございました。では笹先生。

笹：

どうしても全高長という肩書があるので、私が話をすると全国の意見のように誤解さ

れてしまう恐れがありますので、私個人でどう考えているのかということでお話させていただきたい。大学入学共通テストの枠組みの中で、民間試験をしなくても、英語の求めている 4 技能は身に付けられると思います。本校の教員も今日複数来ておりますけれども、こうした話が具体的になる前から、本校は英語のオーラルの授業を、非常に力を入れてきました。現在でも、ディベートやスピーチの授業を 3 年生の時期でもやっています。それは、それが必要だと思うからやっているわけで、子供たちもそれが身に付いていると思います。必要であれば、教員も努力をしますし、それを受けて生徒達も力をしっかりと伸ばせて行けると思います。

そもそも、グローバル社会になっていくのだから英語をちゃんと話せるようにしたいとか、聞けるようにしたい、書けるようにしたいというところがもし目的だとしたら、それは入試で何かをしなくても十分力はつけられると思いますし、高校の先生方の力、授業力は十分対応できるように、急速に変わっていると思います。お答えになったでしょうか。

南風原：

ありがとうございました。亘理先生、今のご質問あるいは松井先生へのご質問に絡んで何か。

亘理：

石井先生が「これは亘理先生にも関連するのですが」、と言ったところがトモヨの話だったので、「原田知世、世代的にも何のか

らみもない！」と思ったのですが、出願資格としての A2 ということについて東大出身者やまわりの人に聞いたら、「東大に関しては、受ける人は A2 くらいなら問題ない」という意見は複数貰いました。ただこれについて 2 つ言いたいのは、1 つは、私は地方国立大学しょっぱい教員代表として話しますが、「A1 以上」と言えるかどうかです。実際はほぼ全ての大学が、いろいろな入試タイプがありますから、英語力で言えば、A1 か、B1 か B2 か、幅広い層を受け入れているわけです。つまりほとんどの大学は、英語でももちろん二次試験で選抜した結果、A2 や B1 がある子を取っていることもありますが、そうではない子も受け入れたうえで、教養の英語教育や専門の英語教育をがんばっているわけです。その時「A1 以上でも受け入れて我々は教育します」と公的に言えるかどうか。実態はそうなっているが表向きは言いづらいというのがある。なぜなら、学習指導要領は高校の終了まで A2 から B1 を求めているわけで、その時に大学がザルで、A1 以上でいいですと言えるのかどうかというのが問題になると思います。つまり東大は問題がないかもしれないけれど、この方式を他の大学が日本全国で真似しようと思ったときに、「A2」と置いてしまうことが持つ弊害があると思います。

もう一つ今日のお話で私は「追い風参考記録」という言葉を使いましたが、現実に笹先生の言うとおりにだと思いますが、静岡県で C2 レベルを測る試験は受けられません。ですから東京や名古屋に受けに行かなければいけない。そうすると交通費がかかりま

す。私も今日、こだまで来ました。静岡にはのぞみは無いので、たまにちらりとひかりが見える、聞こえてくるのはこだまばかりという、これは持ちネタです。

そうすると、静岡で仮に浜松や静岡で英語がものすごく得意で、ほとんどいないとは思いますが C2 レベルの英語能力がある、あるいは帰国子女である、その強みを生かしたいという子がいた時に、他県まで受けに行かなければいけない。しかしその経済力が無い時に諦めるわけです。一方で東京や名古屋からお金持ちの子が C2 レベルをもって乗り込んでくることができるようです。その意味で既に「向かい風記録」になりそうな制度だということを考えなければいけないとは思いますが。以上です。

南風原：

ありがとうございました。時間が迫ってきましたので、せっかくフロアのほうからたくさんのご質問をいただいていますので、セレクトして質問をお願いします。

濱中：

高大接続研究開発センターの入試企画部門の濱中でございます。私からは石井理事、大塚先生、荘島先生への質問について、申し上げたいと思います。

まず、石井理事、そして南風原先生への質問と受け止めていいのだと思いますが、そもそも論に近いところではあるのですが、グローバル人材に「英語力」は必要なのでしょうか。その発想はあまりにも安易ではないのでしょうか。これからの社会におい

て、「英語力」以上に大事なものがあり、それが今回の「改革」によって失われることがあるのではないのでしょうか。その点についてのご意見を伺いたいという声が届いています。

続いて、大塚先生への質問に移りたいと思います。大塚先生のお話に関しましては、何よりもセンターの働きのすごさに驚いたという声が多かったのですが、関連して補足説明が欲しいという質問が多かったように見受けられました。たとえば、センター試験で使用されている語彙が学習指導要領に定められている範囲だということを確認することだけでも実はすごいことなのでしょうが、その確かめるという作業、また作問内容と教科書との照らし合わせに関してどれくらいのご苦労があるのかについて、理解を深めるために補足していただきたいという意見がきています。また「驚いた」という文脈で次にいきますと、マークシートを教員の目でチェックしていること自体が驚きだった。マークシートは機械で読めば大丈夫なのだろうという認識だったが、なぜマークシートですらそのようなことが起きるのか、もうちょっと教えて欲しい。また、内情を良くご存じの大塚先生だからこそご指摘できるスピーキングの採点、記述式の採点の悩ましさについてご意見があれば頂戴したいということ。

そして、3点目なのですが、「文化資産」としての入試センターという点について、もっと大掛かりに公表したほうがいいと思うがそのようなご予定はございますかということで、これはどちらかと言うと参加し

てくださっている報道関係者へのメッセージという側面も含んでいるのかもしれませんが、以上が大塚先生へのご質問になります。

荘島先生へのご質問なのですが、軽くジャブということで、「リスニング四天王は狙っていたのですか」という質問がありましたが、リスニング部会のチャーミングな試みは置いておきまして、荘島先生には2つ申し上げたいと思います。センター作成の新英語は、なぜ「読む (Reading)」に特化したのか。大問1、2には意味があったのではないかということについてご意見を伺いたい。そしてまた、センター作成の新英語は十分な識別力が確保されているのかどうか、それに関しても専門家としてのご意見を頂戴したいという質問が来ております。それでは宇佐美に変わります。

宇佐美：

高大接続研究開発センターの追跡調査部門の宇佐美と申します。こちらから失礼します。これまでの先生方の議論で重複することもあると思うのですが、1つ1つお話をさせていただきます。

まず全体でということでご質問があったのですが、松井先生、亘理先生、笹先生の全体ということですが、「東大のように民間テストの結果に代わり高等学校等による証明書を求める大学があるわけですが、高等学校が共通の評価指標を作成するなど一貫した評価を行うための方策を考える予定はあるのか、あるいは評価は各学校にゆだねられるのか。追い風参考記録の話もありまし

たがそれによる評価のバイアスがあるのではないか。」どちらかというと笹先生にお答えいただくのがいいかもしれませんが全体としてこういうご質問がありました。

次に個別の先生方へのご質問に移ります。松井先生へのご質問です。まず松井先生の方から。現実での使用場面と実際のテストにおける評価場面における英語の乖離についてお話しいただいていると思いますが、では「言語運用能力としての英語力をどう測定すべきか、先生の高校での実例等があれば教えていただきたい」というご意見がありました。

2点目で、「高等学校の中で果たすべき教育の役割は何なのか」というご質問をいただいているのですが、その関連で多かったのが、「6年間学んでも英語が話せないという批判もあるわけですが学校教育を変えれば、または試験を4技能対応に変えれば解消できるのか、そもそも解消すべきことなのかということについて率直なお考えが知りたい」ということでした。最後に、「英語の言葉そのものにもっと関心を持ってもらうために、普段の授業で松井先生が心掛けておられることを知りたい」ということでした。

続きまして亘理先生への質問に移らせていただきたいと思います。「高等学校の中で果たすべき教育の役割という内容かと思いましたが、先生のご発言の中で現在、教育への信頼が低い状況の中でというお言葉があって耳が痛いですがその通りだと思います。では、どのような英語教育があるべき姿で、支持も得られるものだとお考えですか。ま

たその理想に近づくために何が欠けているかということについて率直にお考えが知りたい」ということでした。また「A2以上かという評価を教員に課すことは酷だということも実際のご研究の中でお話しいただいたと思うのですが、それでどうするか」というご質問をいくつかいただいています。さらに、「どのようにすればアセスメントリテラシーを涵養していけるのか、そのための人材育成という話ですが、涵養には時間や経験が必要とのご指摘がありましたが、そもそも実際の英語教員の何割がそういった英語を使用した経験を持っているのかという心配と共に、そういった教員がタスクを作成することは非常に難しく、ユーザーモデルにはなりえないのではないか」という、「人材育成に関するところで先生のお考えがあれば知りたい」ということです。

「CEFR を高校生の能力を測るアセスメントとして使用することにそもそも妥当性があると感じますか」というご質問も複数ありました。あるいは「独自の共通基準を文科省が作成すべきではないか」というご意見もありますがそれについてどうお考えかということでした。

最後に笹先生へのご質問です。これは民間試験の選定や新たな試験のあり方に関するのですが、「そもそも1業者に試験をゆだねることは実施上も大きな問題がありますし、弊害があることは明らか、自己利益に走ることは目に見えている」というご意見です。「では救済措置としてどのようなものを考えているのか。1業者によるテストではなく、たとえば複数業者が資金を出し合

って新しいテストを作るとかいう代替案は出せないのかということについてどうお考えか」というのが1点ありました。

「調査で把握された調査結果をお話しただきましたはその課題について各都道府県の当局や文科省の初中局などにお伝えいただいているのか」という実態についてもご意見がありました。最後に、これも複数あったことなのですが、「本当は文科省に言いたいのですが」という前置きの下でありましたけれども、「民間試験の利用では後戻りできないといったご意見ご指摘がありましたが、本当にそもそもそうなのでしょう。率直に先生として、または高校学校長協会長として先生は民間試験の導入そのものにそもそも賛成なのかを率直にお伺いしたい」という意見がありました。長くなりました、以上です。

南風原：

どうもありがとうございました。どのご質問もしっかりと答えるには時間がかかると思いますが、答えられるもの、答えたいものを選んでいただいて、お一人3分くらいでまとめていただければと思います。石井先生からお願いします。

石井：

グローバル人材に英語力は必要かというご質問ですね。グローバル人材をどう定義するかという、その定義次第だと思いますが、一般的にグローバル化が進んでいるという認識が共有され、そういう場で仕事をする人間が増えている以上、グローバル人

材の定義はともあれ、これから実践的な英語力が必要になるだろうということは否定できないと思います。ただ、あらゆる日本人が、英語力が向上してペラペラになることが必要かと言われれば、そのようなことはまずありえないし、必要でもない。しかし今は、民間試験を導入すれば全ての日本人が英語ができるようになって、グローバル人材になれるかのような幻想に基づいた方向に進んでいる気がいたします。

私が思うに、英語力も大事だけれど、それより日本語の方がよほど大事なのではないか。日本語できちんと思考できない者が、上着を貸すの貸さないのという、タカシとトモヨミみたいな会話を英語でしたところでたいして意味はないのであって、日本語による思考力を鍛えることが、英語で何かをしっかりと言うための基礎になるということは疑いがないでしょう。ただし、だからセンター試験の国語に記述式を入れればいいのかというと、それはまた別問題で、私は反対であるということは申し上げておきたいと思います。

南風原：

大塚先生、お願いします。

大塚：

3つ質問をいただきました。

まず、英語の試験の点検についての質問ですが、語彙のチェック、教科書のチェック、センター試験の場合には他の入試問題とのダブリということのチェックなどが行われていると思います。英語に関して、私自

身が利用したことがあるわけではありませんが、他の教科からの推測の範囲では、教科書や過去の入試問題などについてのデータベースなどが準備されておりまして、キーワード検索などを利用して、そういったチェックを行うことが可能となっています。英語では試験用の文章は問題作成の委員会で独自に作ることも多いので、それほどダブりの問題はないかと思いますが、私の少ない経験でも危なかったのは国語の古文でした。センター試験は、ほぼ2年前から問題を作っていますから、素材を決めて、問題の原稿ができてほぼ問題として固まりつつあるときに、大学の個別試験がありますから、限られたリソースから得られた素材が、ダブっていたということがそのタイミングで判明してしまったということがありました。もちろん、問題漏洩ではありませんので、問題レベルで全く同じということはないのですが、古文の比較的短い素材で問題とするところは限られているということもあって、かなり類似した問題になってしまっているということで、結局、第一委員会が頑張っ、素材から差し替えたということがありました。ただ、もちろん、そうした検索も完璧はあり得ないわけでありまして、「よくぞ見つけてくれた」というのが試験・研究統括官の立場からの正直な感想です。

外国語関係の各点検部会、問題作成部会には、全ての教科書が揃えられ、辞書も何冊もあります。学習指導要領には、高校生が覚えるべき語彙数についての概数が示されていますが、当用漢字などのような指定があるわけではありませんので、どの範囲の語

彙から問題を構成するかは、第一委員会の経験に依るところが大きいのではと想像していますが、一応、辞書には、単語の使用頻度レベルといった指標が示されているものもありまして、ある程度のレベル内の単語を利用しようといった配慮がなされている外国語部会もあるようです。ただ、辞書も改訂されていきますから、そのレベルも時代により変化したりもしていて、点検委員会からの指摘には、「この辞書のバージョンを参照したと思われるが、新しいバージョンでは単語のレベルがこう変わっているので、その言葉を用いるべきかどうか再検討するように」といった指摘があつたりして、そこまで確認するのかと、私の方がビックリすることも少なくありません。

どういう単語や言い回しが高校生にとってなじみのあるかということも時代によって変わりますし、海外の現地でよく使われるオーセンティックな表現に、日本の高校生が学んでいる言葉や表現が追いついていないということもあり得ます。その場合は、日本の高校生が何をどう学んでいるかがまずは問われることになったりします。そういった多様な観点から、点検委員会は問題作成委員会に厳しいコメントを突きつけますので、問題作成委員は大変です。そんなやりとりを見ておりますと、まさにそこにFD (Faculty Development) の真髄を見る思いがいたします。

次に、マークシート採点についてですが、消しゴムでマークを消す際に消し方が甘いとそれをマークと読まれてしまう可能性が残されているということです。今のセンタ

一試験は1つの行に1つのマークが原則ですから、ダブルマークと判定されるとはじかれることになります。では、感度を下げればいいのではという、今度は、薄いマークが読まれずに、空白とされてしまうことにもなってしまいます。そこで、読み取り感度を変えて二段階で読み込んで、結果が違うものはセンターの教職員がチェックします。その意味で、人間の目は優れているなと思いますが、人がチェックすれば、受験生がどうマークしたかの判断がほぼできますので、それで最終の解答結果としている次第です。消しゴムの消し方の例を話しましたが、それだけではなく、消しゴムのかすが付着していたり、鉛筆のすれた汚れ、鼻血などが付いていることもあつたりするようで、さまざまな汚れが人の目による確認で救われているわけです。マークシートは、すべてで370万枚を超えるオーダーで集まってきますので、やはり0.1%オーダーでそういう答案が出て来ますから、数千枚を超えるチェックが毎年行われております。

このように、マークシートの採点も、本当に100%ということはありません。共有しておきたいと思ひますし、ましてや、記述式は、完璧は絶対ありえないという下で導入せざるを得ないということだと思ひます。数学はまだ楽だろうという話もよく聞かれることですが、私が点検委員会の先生方から一番厳しく反対されたのが数学の部会の先生方からでした。なぜ共通試験に数学の記述式を入れるのかということです。各大学の個別試験では、数学はほとんど記述式でやっていると思ひられます

が、その採点の大変さを点検委員の先生方は経験されています。記述式の採点を経験した先生方は、ほぼみなさんが、50万という記述式の採点は不可能であるということをおっしゃいます。そういう意味で、試行調査の記述式採点にかかわる結果がどういう形でまとまるかは注目されるかと思ひております。

最後に、センター試験という「文化資産」の公表に関することについてですが、今、山本理事長から、センターで試験・研究統括官を経験した荒井克弘先生と私を中心に、共通一次試験、大学入試センター試験の総括をするようにということをおっしゃいますので、保証はできませんが何とか私達の視点でのまとめは皆さんにも公表してお伝えしていきたいと思ひているところです。

以上です。

南風原：

荘島先生、お願いします。

荘島：

まずリスニング試験の第1問、狙ってやっているのかということなのですが、私は趣味でイラストを描いているのですが、私の知り合いの中には私が描いていると思ひて連絡してくる人がいるのですが、私ではありません。しかし頼まれればやります。

新英語に関して、第1問と第2問が今までの第1問の発音・アクセント問題と第2問の文法問題が外れることになりました。現行センター試験の英語の信頼性の高さは

主に第2問の文法問題の信頼性の高さが寄与しているものですので、私としては非常に残念だと思っています。しかし、その残念な気持ちは、何ほどのことでもありません。信頼性は、この改革において何物でもないからです。この改革は、センター英語、評価テスト英語の妥当性向上のための改革です。したがって信頼性を多少損なったとしても英語テストの妥当性を上げるための改革なので、そのための第1問・第2問排除だと私は理解しています。これに関しては、私は英語教育の専門家ではありませんので、私はこの改革が妥当なものだとして信じてやるしかないという立場です。ですから英語教育の先生方が引き続き第1問・第2問の是非について議論していただければと思います。

ですが、評価テストの英語にもぜひ期待していただきたいと思っています。今のセンター英語とほぼ遜色のない信頼性であると、試行調査の分析結果から確認しています。いいテストができていますから、来年センターが最後の年ですけれども、そのあと4年間は評価テストの英語が移行措置で実施されますけれども、少なくともその4年間は後続の評価テストが支えますので、ぜひご安心して大学入学評価テストのシステムを信頼してご利用いただければと思います。そして2年後はゴールではなく我々にとってはスタートです。センター試験も30年間の間に看板は変えず中身はどんどん変えていきました。ですからセンター試験の最初の年の問題の中身と30年後の今のセンター試験の問題の中身は全然違います。今後、

評価テストの英語がスタートして、英語だけではありませんが、私達はこれまでの経験を十分に生かしてどんどん至らないところは良くしていきますから、引き続き、ご支援とご理解をいただければと思います。

それから英語4技能試験に関しても、本来はセンターがやるべきだったことを我々の手の届かないところに関して手伝っていただけるという意味でご参加いただきました。にもかかわらずこのような世間の不安や不満の矛先になってしまい、入試センターの者としては非常に申し訳ないという気持ちです。しかしやることは決まりましたので、センター職員一同つつがなく実施することを念頭にがんばって毎日仕事しております。そして、現在、センター試験は非常に信頼いただいているのはありがたいのですが、現役生全体の100万人のうちの40万人しかセンター試験を受けに来てくれていませんので、すなわち60万人をまだ取りこぼしている可能性があります。せめて英語の4技能試験がセンター試験にはまらない子たちがその英語4技能民間試験にはまって、そこで高評価を取れば大学に行くという、センターでは支えきれなかった子ども達、救いきれなかった子どもたちを救えることになればいいのかなと今は思っております。以上です。

南風原：

松井先生。

松井：

英語運用能力の養成や評価に関して授業

での実践例ということだったのですが、私はマイナーですが「英語教育の明日はどっちだ！」というブログを2004年からずっと書いておまして、現職の高校教員でこれだけ赤裸々に普段の授業をつづっている人間はいないと思いますので、ぜひそちらをお読みいただきたいと思います。たとえば90年代には既にクライテリアのモニターにして自分の授業の中で生徒に書かせたものをクライテリアに放り込んで、どのようなフィードバックが可能なのかということをやっています、これが20年前です。今はケンブリッジさんのライト&インプルーブに生徒をグループで分けて、グループで出されたプロダクトをそれに入れどこに課題があるかということをやっています、実際に。

先ほどのセンター試験の語彙に関しても、ケンブリッジさんに「おんぶにだっこ」ですが、イングリッシュボキャブラリープロファイルというものを使って私は自分の高校入試の読解問題はそれでチェックしてB1以上の語彙は使わない、A2にはできるだけ注を付けるという高校入試の問題を作っていたりします。ということでぜひそちらをブログの方で実践例をお読みいただきたいのですが、もう一つは、私はライティングが専門なので民間の試験ではETSさんが統括していたTOEFLジュニアコンプリヘンシブのライティングの問題が一番いいと思っていました、ずっと。これがそのままスライドして入ってきたらうちの生徒でもそれが勧められるかと思っていたら、無くなりました。4技能試験でした、ジュニアコンプリヘンシブは。今は何になったかと言うと

TOEFLジュニアは2技能です。今日、ETSさんが来ているかは分かりませんが、ですからA2行くかどうか行かないかという評価は2技能で十分だということをETS自体が評価していて、そこから先もっと上のところはTOEFLのiBTや、そのブリッジ教材で十分なのではないですかというメッセージだと私は受け取っているのですが、そういったTOEFL iBTと同じテストングサービスが統括しているTOEFLジュニアが4技能から2技能に変わったということは、結構我々が問題を解決する糸口になってくるのではと私は個人的には思っています。以上です。

南風原：

今、17時30分でこのシンポジウムの終了の時刻になりましたが、少しだけ延長させていただいて、最大限10分以内には終了したいと思います。飛行機や新幹線の時間がおありの方はご退席いただいて構いませんので。

亘理：

がんばります。どういう英語教育がいいのかというのは、来ると思ったので雑誌『教育』に原稿がちょうど出ましたのでお読みくださいと逃げたのですが、高校に行って「助言」という堅苦しいことをお願いされることがあって、話をすることが多いのはこんなことです。授業を見ていると、生徒たちが書いたり話したりするのが苦しそうだという時に、ざっくり言うと2つの原因があって、1つは背景知識が無いか、もう1つ

は生活の中でそれを経験したことがないかです。どちらも欠けると辛くて、せめてどちらかがあると、授業の中で先生がいろいろサポートすると、書いたり話したりすることができる。世界の移民問題についてどう考えますかと高校生が聞かれても、背景知識が無いから話したり書いたりできない。検定教科書はそうなりがちな、社会的な話題を入れるとそうなりがちなので、環境問題については中学生・高校生・大学生と必ず出てきて「環境問題はもういいよ」と高校生は思っていたりするのですが、背景知識が無い時に話せない、書けないという問題があります。その時に「英語表現」の授業で、あまり言うと怒られるかもしれませんが、静岡県は Oxford や Cengage という海外の出版社の教科書を副教材として使っているところがあります。海外の出版社の副教材のいいところは、生活経験に訴えたユニットづくりになっていて、たとえば「人に嘘をつくことはいいことか」といったものがある。そうすると、「東大の亙理の講演はどうだった?」「悪くなかったよ」という White Lie ですね。そういう「優しい嘘」は誰しもが何かの形で経験があるので、それについて書いたり話したりはしやすい。そういう意味でどういう英語教育がいいかと言うと、もし話したり書いたりするということを授業の中にどんどん増やしていきたいのであれば、生徒たちの生活経験からスタートしてそこに背景知識を足していくような教育が必要である。

その時に英語というのは結局のところ言語の一つであって、日本語であれ英語であ

れ、どの言語でもいいのですが、自分が使っている言葉、相手が使っている言葉を吟味しながらどういうふうに他人とかかわっていくことが大事なのかということを考え、この社会は今、英語というものに対してどういう見方や考え方をしてどう扱っているのかを考えることが、必要な英語教育だと考えているということを雑誌『教育』の原稿に書きました。

CEFR は高校生に適切かという問題ですが、これも世の中が外国をどう見ているかとかかわっていて、日本の現状で言うと私が静岡県にいて不思議だと思うのは、在日ブラジル人の方や旅行者でも中国の方が多くて、中国語やポルトガル語を勉強すればいいのにそういうコミュニティにはなかなかならない。その現状で、英語だけ騒いでも生活の中には浸透していきません。これが労働力の変化で 2040 年、50 年となれば変わっていくかもしれませんが、今現状として、英語教育が Learning という観点でしかないうちは、CEFR はやっぱりかみ合わないと思います。というのは東京外語大学の根岸先生が言っていることですが、CEFR はヨーロッパの長い歴史の中で English User、というか Foreign Languages User 達のために作られた枠組みなので、Learners のためではありません。そういう意味では高校生にとっても、社会がユーザーとしてある外国語を求めた時には捨てないで欲しい枠組みだと思います。A1、A2 という数字だけが躍っていますが、元々は A、B、C という区切りは Basic、Independent、Proficient です。つまりは、我々が感覚的に

入門、中級、上級と分けているのとそれほど大差はなく、Basic User から始めた学習者が Independent になって社会に送り出すまでは頑張りたいと思います。その点では高校生も無関係ではない。だから、B にまでは到達させたい。私がこうやって言うと下ネタみたいになるから嫌なのですが、A ばかりではなく B にまでは到達させたい。

最後に先生のトレーニングですが現状としてはモデルが足りなさすぎる、つまり英検や GTEC は受けてくるのだけれど、その評価を先生は受け取るだけなのでどういう観点でどのように評価されるかはあまり見ていません。ですから先生にとって、こういうタスクがあれば高校生はこれくらい書けたり話せたりしてこれくらいの評価がつく、ということの事例が足りなさ過ぎます。静岡県では、単元、つまり数時間の授業のまとめごとに、学校ごとの到達度指標と対応させて Goal Activity というのを設定し、そこに向かって授業を構想・展開するというのを積極的に進めており、その延長線上に、今日紹介したパフォーマンス・テストもあります。この Goal Activity やパフォーマンス・テストについて評価の実際や生徒の英語使用の実際を集めて、先生方が共有するデータベースを作ろうと今、動いているところです。先生方が共通に参照できるようなデータのプールがあって、同じテストを次年度同じ生徒たちにまた使うことはできないにしても、実際の生徒がこのように評価されたのだということを皆で共有してトレーニングを、つまり教員研修のプログラムとして充実させていくことによって、

私としては時間がかかっても真正面から先生のアセスメント能力と一緒に高めていきたいと思っているところです。

南風原：

笹先生、お願いします。

笹：

改革に対して「進めてください」とか、「もうやめたほうがいいです」ということを私は言える立場ではないと認識しています。ただ、その英語の試験等を受ける側の生徒を抱えている学校現場として、「大学入学共通テストの枠組みの中」でという枕が付きますけれども、「大学入学共通テストの枠組みの中」で行う民間の英語資格・検定試験に対しては、現状では不十分であると感じています。ですから、いろいろな場面で問題点を示し、どこを改善していただきたいのかということ、ヒントや要望を出し続けていると思っています。その要望やヒントに対して、あと 1 年の間に間に合わせるように本当に頑張っていたいただきたいと思っています。

そして、「どういうところで発言されているのですか」というご質問がありましたが、ワーキング、検討・準備グループ、中教審ではもとより、文部科学省の担当者に対して、直接ものを言い伺ったりしています。それは全高長の会長の立場としてもそうですし、代表校長先生方と何人かで一緒に文科省に話をしに行くという形もとっております。今日、お話したような問題点、課題点を伝える努力はしています。以上です。

南風原：

どうもありがとうございました。本日のシンポジウム、私の方から論点として大きく3つ、センター試験、民間試験、高等学校でのアセスメントという、いずれも高校生が経験する英語アセスメントのあり方について論点を立てました。それぞれについてパネリストの皆さんのおかげでいろいろと有益な情報を得られたと思います。今日の議論を今後の意思決定に役立てていただければと思います。

封入の中に学術会議のパネルディスカッションのチラシが入っています。学術会議のメンバーも長く今回の課題を共有しておられ、このままではいけないということでもかなり問題意識を持っておられ、私も参加して議論を重ねてまいりました。その学術会議のイベントが3月23日に東京大学の駒場キャンパスでありますのでご紹介いたします。また、同じ封入の中にアンケートが入っておりますのでぜひお答えいただければと思います。それでは、これで本日のシンポジウムをお開きにしたいと思います。どうもありがとうございました。

フロアからの質問と回答

フロアからの質問

No.	どなたへの質問ですか？	質問のテーマ	質問内容	あなたのご職業等
1	石井	—	グローバル人材に「英語力」は必要なのでしょうか。その発想はあまりにも安易ではないでしょうか？これからの社会「英語力」以上に大事なものが、それが「改革」によって失われるということがあるのではないかと。	—
2	石井, 大塚, 荘島	大学入試に望ましい英語試験について	これからの世界（と日本）を考えた時、どのような試験が望ましいのか、「5年後、10年後、そして20年後には今と違って、〇〇な日本になっていることを目指して〇〇な試験が望ましい」という形で意見をうかがいたいです。よろしくをお願いします。 つまり、どんな日本社会にしたいと思っているのかを聞かせて下さい。 なお、「〇〇な社会」とは「大卒者の半分以上がTOEIC780点以上」のような話ではなくて、具体的にどんな姿なのかを意味します。	C)民間教育関係
3	石井	東大入試改革と東大英語教育の連携について	東大工学部3年（文二出身）です。センター英語、東大の英語教育を直近に受けた者としての質問です。端的に言えば、「東大内部の英語教育がずさんなのに、入試改革をリードする資格があるのか」ということです。 東大の授業、教養英語は、前近代的な訳読一辺倒の授業。高校の授業との違いに衝撃をうけました。英語教育が自前でまともにできない（FLOW,ALESA/ALESSは外国人教員）教員が入試改革に反対しているのは信用できません。FLOWは1/2学期分（たった7週間）しかなく、その他のスピーキングの授業のパラエティーは非常に少ない。受験英語でリーディングをしっかりとやり、大学でスピーキング力をきたえると受験生のときには信じていたのですが、受験後もリーディング一辺倒。学生からの評判が悪いのに、授業スタイルを変えない東大の教員は、ただ現状にしがみついているだけ。（入試制度をふくめて）英語力の改善に真剣ではないと思います。	D)学生
4	石井, 大塚, 荘島	共通テストの一環として実施される民間試験の法的実施主体について	Q1.「各種の問題やトラブルが指摘されるセンター試験の裏でこれだけのことが行われている。民間試験はどうかのだ!？」という、大塚先生の心の声が聞こえたような気がしました。荘島先生は、「英語の共通テストを廃止してはいけない!」と仰りたかったのだと思います。違いますか？ Q2. で、今後のことですが、共通テストとして実施される民間試験の実施主体は法的にどのように規定される、あるいは、されるべきとお考えですか。	—
5	石井	力学について	政治の教育への介入がヒドすぎます。 国立大学は闘ってほしいです。 学識に基づかない文教政策（新自由主義+国家主義）について意見ををお願いします。	E)その他
6	石井	2018年12月25日の東京大学の方針について	高等学校による証明書はどのようなものになるのか。	B)小中高教職員
7	石井	共通テストの問題??	名古屋大学の「学力証明書」をみると、共通テストも使わず、個別試験のみで合否を判定する、という方向に向かうのでしょうか？	C)民間教育関係
8	石井	英語力の証明について	証明は各大学ごとの「証明書」ではなく調査書を活用する方が良いのではないのでしょうか。	A)大学教職員
9	石井	入試の解答の公表について	英語にかぎるものではありませんが、上記の点に関しての東京大学の現時点の見解をお聞かせ願えると幸いです。	C)民間教育関係

No.	どなたへの質問ですか？	質問のテーマ	質問内容	あなたのご職業等
10	石井	東大の2次「外国語」について	独語、仏語、中国語で受験する方は出願の際にどうすれば良いのでしょうか？	B)小中高教職員
11	石井	外部試験の活用方針について	私の勤務先の大学ではトップダウン的に外部試験を活用することが決まり、「一度活用するという方針を公表した」ということを理由に、活用することが前提の議論しか行われていません。「情報を公表した」という理由に対して、反論できる材料はないのでしょうか。※国立大学ですので、公立大である岩手県立大の事例はあまり効果的な材料にならなそうです。	A)大学教職員
12	—	地方国立大学の英語民間試験導入について	全国の国立大学で文系学部を中心に民間試験導入に反対する動きがあります。しかし最後には「業務命令」「学長命令」で現場の声は踏みにじられます。予算を文科省に握られている、というのがその理由です。国大協はこうした矛盾を十分に知りつつ、何故、動けないのでしょうか。	A)大学教職員
13	南風原	センター試験・大学入学共通テストについて	センター試験・大学入学共通テストそのものをなくしてしまうという案は全く出なかったのか。絶対になくせない理由は何か。	B)小中高教職員
14	石井	東京大学入学に際しての英語力の証明書に関して	既卒生の英語力について 卒業した高等学校（等）の長が英語力の証明をすることについての妥当性をどうお考えか？	B)小中高教職員
15	南風原	東京大学の方針について	様々な問題点・課題が提起されている民間試験について、東大の判断の（1）A2レベル以上相当をあえて選択の1つに認定された理由は何でしょうか？	C)民間教育関係
16	石井	東大自身の個別入試について	①指導要領との整合性（英語のやりとりより日本語記述） ②高校授業への変質（高3では東大対策） ③経済格差（塾や東大模試が大切） →という民間試験への懸念は、すでに東大入試について生じていないか？ 例：東大志望者の多い進学校の高3ではスピーキング、英語でのやりとりを実践する授業より東大入試演習が求められているのが現実であり、学校でそれを行わない（例：国立進学校）なら東大対策塾へ通う生徒が多数。	B)小中高教職員
17	石井	CEFRのCriteriaの妥当性について	CEFRのCriteria、さらには、日本語を母語とする学習者（初学者）にとってCommunicative Approachがどれだけ妥当であるのか、私は自分の学習歴、指導歴から考えて懐疑的です。 少なくともこれだけ全員を対象して推進するだけのエビデンスはないと思いますが如何でしょう。	—
18	—	—	国大協基本方針（2017.11）が、なぜかくも早急に（一週間という期間で）資格試験の利用（併用）を決定するに至ったのか？	B)小中高教職員
19	石井	入試改革の目的について	南風先生から「入試のリスクをゼロに」という話がありましたが、今回の改革が、国際競争力の向上を目的としている以上、どうリスクをとり、ベネフィットを最大化させるかについて考えるべきだと思いますが、いかがでしょうか？ 仮にそうだとした場合、最良の方法（今からでも実現可能な代案）は何でしょうか？	A)大学教職員
20	石井	大学の英語教育について	入学した学生の英語力を高めるための方策について、各大学ではこれまで以上に十分に準備していると思われるか。 東京大学以外の大学についてはお答えできないとも思いますが・・・	E)その他

No.	どなたへの質問ですか？	質問のテーマ	質問内容	あなたのご職業等
21	大塚	センター試験に使用される語いについて	センター試験で使用される語いが、「学習指導要領に定められている範囲」であることは、どのように確認しているのか。 もしも何かリストのようなものがあるとしたら、その公表は可能か？	B)小中高教職員
22	大塚	センター試験の運営について	受験生のマークを確認すると伺いましたが、目で見てチェックまでしているのに、「マークミス」は何故存在するのでしょうか。	E)その他
23	大塚	世間との認識のちがいでについて	入試における、入試センターとしての立場というのをうかがい、大変違和感を持ちました。 マスコミ等を通じて、公に伝えるということがあまりないとは思われますが、大がかりに公表し、受験生や保護者などに周知してもいいとは思いますが。	—
24	大塚	公平性の担保	センター試験における公平性の担保に多々苦心されたと思います が、民間試験が選択試験の一翼を担う場合、どんな工夫が求められるか。	—
25	大塚	「知識及び技能」を問う問題の作成について	新学習指導要領の3要素の1つ、「知識及び技能」をどう共通テストに反映させていくとお考えでしょうか。	E)その他
26	大塚	2024年以降の「センター試験」廃止について	大字が主体となった「4技能」試験を行うことは可能か。	D)学生
27	大塚	数学ⅡBについて	センター数学ⅡBは、他科目と同様に「各科目の平均点が60点程度となるよう配慮されているのですか。 平均点は中々6割に達していないようですが。	D)学生
28	大塚、 荘島	センターで、4技能のテストをつくることについて	現在、民間の検定試験を使うことで、英語共通テストを4技能化しようとしていますが、センターで残りの2技能(ライティング、スピーキング)を測定するテストを作成するという選択肢はなかったのでしょうか？	B)小中高教職員
29	大塚	共通テストについて	プレテストが2度ありましたが、センターを越える良いテストになっていると思いますか。そして、良い点も悪い点もあればそれはどんな所だと考えていますか。	B)小中高教職員
30	大塚、 荘島	スピーキングの「組み入れ」について	今回の民間試験導入の発端は「スピーキング試験を課す」ということだったと思いますか。 たとえば共通テストでも2024年以降も英語を廃止せず、スピーキングのみ「選択科目」として外注するという選択肢は技術的に可能でしょうか？ もしくはセンターでスピーキングテストを行う可能性は？	A)大学教職員
31	大塚	語学検定試験の大学入試における国際的な実施状況について	英語民間検定試験の導入に賛成されている方の論拠として、「世界の大学入試では検定試験を使うのが一般的であり、そのまま日本で使用しないと、グローバル化から取りのこされる」ということがあげられています。(安河内哲也さん) 本当でしょうか？ 留学審査なら分かりますが果たして本当に世界では大学入試に検定試験を使って、語学力をはかっているのでしょうか。 国際的な実施状況について教えて下さい。	—
32	大塚、 荘島	センター試験「英語」の信頼性	40年以上前、英語教育廃止論が唱えられた折、大学入試から英語をなくしてしまえとはならなかった。 センター試験「英語」は、他のどの科目よりも学力測定の信頼性が高いと考えて宜しいですね。	A)大学教職員
33	大塚	センター試験や入試問題の非公開化について	ご講演の中で、CBTの文字が出てきました。私個人としては、アイテムバンクの構築と、それをういたCBT、CATが望ましいと感じていますが、日本の特殊なテスト文化では難しいとも思います。非公開化はできるのでしょうか？	A)大学教職員

No.	どなたへの質問ですか？	質問のテーマ	質問内容	あなたのご職業等
34	大塚	共通テストの実施について	記述式の問題が他教科では導入されますが、その際実施上生じる問題点、特に公平性の問題に関するご意見を伺いたと思います。	B)小中高教職員
35	大塚	センター試験実施におけるコストの問題について	現役生の願書をまとめ、郵送は高校教員が無料で行っております。センター試験の作問・監督・採点・その他、大学教員が行う業務にはきちんと人件費は支出されているのでしょうか？ また、Web出願への切りかえなどの予定はございますか？ 是非、ご検討を頂きたいと思っています。	A)大学教職員、B)小中高教職員
36	大塚	大学入試センターの意見について	今般の入試改革、あるいは英語民間試験の導入について、大学入試センターの研究部門は、どう考えているのか？ それが、表明できないのなら、国内唯一の入試研究機関としての存在意義がないのではないのか？	—
37	大塚	作問について	民間試験の導入により、大学の教員が「作問」に割く時間・手間は、少なくなるのでしょうか。それともかえって多くなるのでしょうか。	—
38	大塚	センターの公平性について	スライド11枚目の「センター試験の重層的～」で高校教育関係者等を中心とする点検協力者によるチェックがなされていることですが、高校生へ指導している教員等に問題をみせて大丈夫なのか。	—
39	大塚	センター試験の作成者側の受験生への広報について	受験生は試験そのものに集中し、作成者のご苦労や配慮などに関してあまり（もしくは全く）しらないようです。 大塚先生のお話が大変おもしろかったので、受験生への配慮などを広報する（もしくはHPにのせる）ご予定はありますか？ 広報して下さると受験生への心理負担がなくなる（緩和される）と思います。	C)民間教育関係
40	大塚	—	質問ではなく、センター英語の重要性がよく分かりました。ありがとうございます。 石井先生にはこれからも東大の入試をひっぱっていただければと思います。	A)大学教職員
41	大塚	波及効果について	「波及効果に関する計画的かつ中長期的追跡調査」とあるのですが、具体的にどのような波及効果があるのか、民間試験の導入によってどのような波及効果が予想されるのか、お聞きしたいです。	—
42	大塚	センターと一見相反する新テストの作問方針について	センター試験の作問に対する配慮について色々お話頂きました。 新テスト（大学入学共通テスト）ではListeningの1回読み問題の導入や記述式問題の導入など、これまでの配慮とは相反する方向へ進んでいるように個人的には感じますが、センターに元々いらっしゃる大塚先生としてはどう思われますか？ (細かい質問なので、時間が許せば大丈夫です)	C)民間教育関係
43	荘島	新テストでセンターが作成する英語について（試行調査の問題から）	①センター作成の新英語はなぜ「読む」に特化したのか。大問1、2は意味があったのではないのか。 ※発音や語句整序が「話す」の直接的測定をしていないという理由は聞いていますが・・・ ②センター作成の新英語は十分な識別力が確保されるのか。 今だけではないお話を伺いたと思います。	E)その他
44	荘島	"リスニング四天王"について	英語は毎年の様に話題をさらう問題が出ますが、何故ですか？	D)学生
45	荘島	民間試験のスコアと共通テスト各科目の得点との関係の分析について	センターの英語（とくに筆記）と他科目との相関関係が強いことはよく分かりました。これから共通テストの枠内で実施される各種民間試験のスコアと共通テストの得点との関係について分析は予定されているのでしょうか？またその分析結果の公表はどのようなのでしょうか。	A)大学教職員

No.	どなたへの質問ですか？	質問のテーマ	質問内容	あなたのご職業等
46	荘島	勤勉性について	一般学力（勤勉さ）と言っておられるが、大学入学共通テストにおいて思考力を見る問題という視点でも、勤勉性という指標が大きい要因としてあるのでしょうか？	B)小中高教職員
47	荘島	英語外部テストの利用について	荘島先生のような専門の方の目からご覧になると、英検やGTECを入試に利用することの最大の問題は何なのでしょう。	B)小中高教職員
48	荘島	英語の大学入学共通テストの廃止について	ご説明ありがとうございます。 センター試験の英語が総合的学力を計る上で非常に重要な科目であることは分かりました。 大学入学共通テストで、この英語が廃止されると、ある意味総合的能力を計ることは難しい気がするが、このことに対する見解をお聞かせいただきたい。 (4技能を計るべきだという強いメッセージがあるとうれしいのですが)	A)大学教職員
49	荘島	階層的因子分析について	英国が基礎学力の下層にあると解釈した理由は？根拠は？	E)その他
50	荘島	センター試験の国語について	ありがとうございました。 センター試験の国語では異なる満点の受験者がいますが、国語の平均点、標準偏差などについて取り扱う上で、それはどのように処理されているのでしょうか。	C)民間教育関係
51	荘島	探索的因子分析の箇所について	古典と英国に差が出る原因として考えられるものを教えて頂きたいです。	C)民間教育関係
52	荘島	センター英語試験の今後について	もし、今後の新試験から英語がなくなれば（すべて民間試験で代用となり、というイミで）どのような影響が出ますか？	E)その他
53	荘島	英語成績の学力代表性について	今、就学前から民間の英語塾等へ通わせる家庭が急増している。 現在英語の学力代表性が高いのは、それが学校教育の効果の代理変数として優れているためもあると思うが、英語を学校外で習得するようになってその代表性に変化はないか。変化してくるのではないか。	A)大学教職員
54	荘島	作成について	大学入試センター試験を作る先生は、どのように選出され、任期は何年で、どこで、方法はいかがでしょうか	E)その他
55	荘島	入試の傾向・対策をとることについて	生徒は過去問を解いて、傾向対策をとるかと思いますが、そのような勉強をしてきた生徒が、果たして、大学の学問に向いているのでしょうか。（大学での学問に向いているのか、素養があるかを見る試験になっているのでしょうか？）	E)その他
56	荘島	センターと民間試験が測る英語力と指導について	「勤勉さ」を測るセンター試験の「英語」と、「言語能力」を測る民間試験の「英語」という役割、よく分かりました。 前者の指導のみでは、「使える英語力」が不十分であり、後者の要素を中高の指導に取り入れることでの改善も図れるのではとも思います。「中高の指導をどう改善するか」に現センターの英語はどう寄与するのでしょうか。	C)民間教育関係
57	荘島	プレテストについて	プレテストの分析の結果など、本日の講演のような内容でお話されることがあればお聞かせください。	B)小中高教職員
58	荘島	民間試験について	多岐にわたるスピーキング（タブレットに話しかける、受験生同士で話す、試験官と話す）、ライティングの4技能、民間試験の結果をセンター「英語」の代わりにすることに私は反対しています。 代わりになりうると思いますか？	B)小中高教職員
59	荘島	共通テスト英語について	2025年度以降、新しい英語テストを作成する可能性はゼロではないですか？	C)民間教育関係
60	荘島	「基礎学力」について	センター試験は、「基礎学力」において、一部の学習機能のみ秀でている者、劣る者（ディスレクシア、サヴァン症候群、学習障害）の潜在能力をどのように計っているのか知りたいです。	C)民間教育関係

No.	どなたへの質問ですか？	質問のテーマ	質問内容	あなたのご職業等
61	荘島	大学入試センター試験 英語問題について	例年はたいへん良問が多いセンターですが、今年は悪問であったとのうわさもちらほら聞こえてきます。何かあったのでしょうか。共通テストのプレテストの作問にお忙しかったのでしょうか。	E)その他
62	荘島	英語試験が勤勉さを測定している可能性があることについて	統計データを用いた発表を興味深くお聞かせいただきました。講演中に「英語試験はある意味勤勉さを測っているともいえる」とありましたが、言い換えるとこれは英語力を測れていないのではないかという反論が予想されます。特に、センターで高得点が取れても英語が話せない学習者がいることを根拠に、センターの廃止と4技能入試の導入を訴える人たちがいるかと思いますが、センターは勤勉さだけでなく英語力も測れているという根拠があればお聞かせいただければと思います。	D)学生
63	荘島	データ公開について	数十年以上前の試験データであれば、匿名化の上公開しても良いと思うのですが、難しいのでしょうか？ 心理統計の非常に重要な資料になると思いますが。	A)大学教職員
64	荘島	点数開示について	センターの点数を予備校が自己採点をもとに出しますが、何故点数を出さないのか？ 入試改革によりどう変わるのか？	C)民間教育関係
65	荘島	会話を入試で学力とみなすことについて	会話は学力とは無縁。学問をする前提要件にならないおしゃべり力を入試で学力とみなすことは、それまでの学習を変え学問をする力の低下につながるのか。	A)大学教職員
66	大塚, 荘島	—	英語の新しい共通テストは、これまでのセンター試験を踏襲するものになるのか？	E)その他
67	—	英作文の指導と評価について	現行の英検やGTECのいわゆるargumentalな問いに対する「対策本」が次々と刊行され、そのknow-howさえ身につければ満点も比較的容易に取れると言われていました。 高校現場の立場からすると、TOEICやケンブリッジ英検等に比べてaccessibleであるという利点とは表裏一体のこの点を考えると、国レベルでの一斉テストにwritingを持ちこむことは原理的に可能なのでしょうか？	B)小中高教職員
68	松井, 亘理	英語が使える人材教育について	6年間学んでも英語が話せない、使えない、という批判があるが、それは学校教育を変えれば（または試験を4技能対応に変えれば）解消もしくは改善できるものなのか？もしくは解消すべきなのか？	E)その他
69	松井, 亘理	共通テスト（=今後センターの作る問題）について	どうあるべきだと思いますか？	B)小中高教職員
70	松井, 亘理	学校で民間テストの（対策のための）指導することについて	民間テストの対策について保護者や校長などの指示（要望）のもと、補講や授業で行うことを求められた場合、英語教育はどのように改善（悪化）されると思いますか？ センターについては、指導要領のもとに作られています、外部テストもそのような形をベースに作られるのでしょうか？ 亘理先生へ 授業における理想的な言語指導について例示して下さい。	B)小中高教職員
71	松井, 亘理	英語教育のあり方について	「4技能」とは何なのか、どの学校段階でどの技能をどの程度育成すべきか、英語教育の目的はそもそも何なのか、といった議論を抜きにして、外部試験の活用の話が進んでいるように感じますが、当事者としてはどうお感じですか？ 外部試験の問題で健全な英語教育の議論が犠牲になっているように感じますが、いかがでしょうか？	A)大学教職員

No.	どなたへの質問ですか？	質問のテーマ	質問内容	あなたのご職業等
72	松井, 亘理, 笹	高校における、生徒の英語レベルの評価について	東大のように、民間テストの結果に代わり、高等学校等による証明書を求める大学がありますが、その場合、高等学校が共通の指標を作成するなどし、一貫した評価を行う予定はあるのでしょうか。あるいは、評価は各高校に委ねられるのでしょうか。 後者の場合、高校によっては生徒の英語レベルがA1レベルでも（高校の利益を優先して）A2相当と評価し、報告することが考えられますが、いかがでしょうか。	A) 大学教職員
73	松井, 亘理	対話をもたらずダイナミズム	4技能を測るための英語試験推進派が見失っている視点は、4技能それぞれの相互作用が果たす役割ではないかと思います。 対話による相互作用により対話者が予期せぬ内容を創発してゆくという対話本来に求められるダイナミズムは数値化できません。 この視点がないと話す力の深みまたは基本は測れないと考えます。如何でしょうか。	A) 大学教職員
74	松井, 亘理, 笹	英語民間試験について	民間試験の導入を中止するしかないと思います。 どうすれば中止に出来るのでしょうか。 現行のセンター試験のまま存続させるように持って行くことはできないのでしょうか。 やはり安倍政権、自民党を倒し、行政を一掃するしかないのでしょうか。	B) 小中高教職員
75	松井, 亘理, 笹	国大協会長の民間試験導入への見解について	週刊文春2019年1月3日・10号において、山極国大協会長が池上彰氏との対談で、英語民間試験の活用について次の様に発表しています。 「民間業者の試験できちんと統一的に計れるのか、まだ良く分かっていないんです。特にスピーキング能力をちゃんと測れるかどうかは未知数で、実際に試行錯誤を繰り返すことが必要でしょう」と受験生をまるで実験台の様に考えているようです。 この後、「入試は混乱するでしょう」という発言もあります。 あまりにも無責任です。受験生にとってはその一年が全てです。高校教員としては許せません。 皆様の見解をお聞かせください。 皆様にも子や孫がいるはず。その自分の子がモルモットなのです。 亘理先生に質問 静岡大学の加点方式の点数の根拠を教えてください。 笹先生に 後戻りすべきだと思うのですが、無理なのでしょうか。 負けると分かって突き進んで、第二次世界大戦の日本になっているのでは？	B) 小中高教職員
76	松井, 亘理, 笹	これからの望ましい取り組みについて	「政策的にはもう後戻りできない」とすると、我々は何をどうすべきか、どのようにする可能性があるのか、ご教示いただきたい。 (全国数万人～数十万人の英語教師の力量upとかの話ではなく・・・)	—

No.	どなたへの質問ですか？	質問のテーマ	質問内容	あなたのご職業等
77	松井, 亘理, 笹	大学入試に望ましい英語試験について	これからの世界（と日本）を考えた時、どのような試験が望ましいのか、「5年後、10年後、そして20年後には今と違って、〇〇な日本になっていることを目指して〇〇な試験が望ましい」という形で、意見を伺いたいです。つまり、どんな日本社会にしたいと思っているのかを聞かせて下さい。よろしくお願いいたします。 なお、「〇〇な社会」とは「大卒者の半数以上が、TOEIC780点以上」のような話ではなく、具体的にどんな姿なのかを意味します。	C)民間教育関係
78	松井	英語の指導について	生徒たちに「英語」の「ことば」そのものにもっと関心を持ってもらうために、普通の授業で松井先生が心掛けている事を教えて頂ければと思います。	E)その他
79	松井	学校英語課題について	長期休みの間、高校生（1年）の課題としてBenesseから買寄せたCDと冊子をやらせる高校があるが、これは技能伸長を目指したもののよりは利益追求にしか思えません。このような現状についてどのようにお考えでしょうか。	D)学生
80	松井	英語力の評価について	言語運用能力としての英語力をどう測定すべきか。先生の高校での実践例等を含めてお伺いしたいです。	D)学生
81	松井	外部試験のライティング問題の問題点について	松井先生が問題だと感じられる点を具体的にご教示頂けたら幸いです。 例) 採点/題の設定/分量 →外部試験で高得点を取った生徒が大学で/仕事で使える英語力を有していると証明できるでしょうか？	C)民間教育関係
82	亘理	民間試験の受検者確保のための易化が生じるか	多々レベルや方向性が異なる民間試験だか、行われるとして、利益が優先され、いわゆる得点しやすい（ちょろい）試験にして、受検者数を増やそうとする傾向はありえるでしょうか？ （特に日本発の民間試験ではありえそう・・・）	C)民間教育関係
83	亘理	静岡大学の2021年度入試に関する予告文書について	大学自体が滞りなく実施されない可能性がある懸念する新制度に則って、自大学の受験性に民間試験を課し、受験生が高い授業料を払いながら、民間試験に振り回されることについて、静岡大の教員としてどう思われますか。 静岡大の内部でこの件について十分議論されましたか。亘理先生はどのような役割を果たされましたか。	A)大学教職員
84	亘理	A2レベルのタスクとしての妥当性の判定について	扱うトピックや、求めるタスクの種類などから、A2レベルとして妥当でない例があるというお話だと理解しました。これが正しいとして2点質問があります。 ①難易度の少し異なる試験を複数回行うことで個々の学生のレベルを総合的に判定できるとは考えられないでしょうか。 ②民間試験は1回の試験でA2からC1までの判定をしています。これは全てのレベルの判定に妥当なタスクになっていると考えられますか。 ちなみに出願資格としては追い風参考で問題ないと考えます。	A)大学教職員
85	亘理	共通テストについて	民間のテストのレベル（難しさ）に対して、共通テストの内容や課題点がありますか。 センターの良さを超えるものになっている所やなっていない所がありますか。	B)小中高教職員

No.	どなたへの質問ですか？	質問のテーマ	質問内容	あなたのご職業等
86	亙理	教師の英語ユーザーモデルについて	アセスメント能力の涵養については時間や経験を要するとのこと指摘がありました。しかし、そもそも英語教員の何割が自ら英語を「使用した（している）」経験を持っているのでしょうか。論文はおろか、リアクションペーパーやEメール、日記などを書いたり、スピーチ大会やディベート大会に参加した経験を持っている教員はどれだけいるのでしょうか。自ら体験・体感した事のない教員が「タスク」を作ることに無理があり、ユーザーモデルにはなり得ない（説得力がない）と感じます。教員採用の段階から、英語ユーザーモデルとしてふさわしい人材のみを選ぶべきなのではと個人的には強く感じています。先生はいかがお考えでしょうか。	E)その他
87	亙理	アセスメントリテラシーの涵養の仕方	アセスメントリテラシーの涵養は極めて重要で、コアカリが定められた時にも1つのコースとして評価法が出来てほしいと思ったのですが、そうはなりませんでした。 亙理先生は、どのようにすればアセスメントリテラシーを養成できると思いますか？ また、保護者のテストへの無理解にどう対応していけば良いでしょうか？	A)大学教職員
88	亙理	A2レベルの判定について	ご発表で例示された生徒のライティングの英文が「A2」に相当しない根拠は何でしょうか。	A)大学教職員
89	亙理	専門家の信頼に関して	”専門家の信頼が失われている”というのは、高校教員だけではなく、言語テストの研究者にも当てはまるような気がします。 言語テストの研究者が行うべきことはどんなことでしょうか。	—
90	松井, 亙理	民間試験のレベルについて	お二人から民間テストに対する批判が出ておりましたが、会場にはベネッセの方もおられるようですので、反論も聞きたいです。	A)大学教職員
91	亙理	高校の英語教育について 民間検定とのすみ分けは可能か	地方（静岡県）の高校英語教員の優れている点は何でしょう？ 英語科教員の自己肯定感が下がっているのではないかと心配しています。 多く、大都市のない地方圏ではだいたい同じことが求められる気がします。	B)小中高教職員
92	亙理	高校生の能力測定におけるCEFRの導入について	CEFRを高校生の能力を測るアセスメントとして使用することに妥当性があると思われますか。 あるいは、独自の共通基準等を文科省が作成すべきだと思われますか。	—
93	亙理	英語教育について	高校と大学の英語教育、小学校・中学校の英語教育のそれぞれの意味、目的を教えてください。	C)民間教育関係
94	亙理	静大：「加点型」	静岡大学は認定外部検定試験を共通テストに「加点する」としたが、 ①「資格型」ではなく「加点型」に至った理由 ②あの配点に至った理由 について伺いたいです。	C)民間教育関係
95	亙理	公教育として国民（財界を含め）から支持される英語教育とは？	先生のご発表の後半に、「現在のように教育への信頼が低い状況の中で」というお言葉がありました。現場の一人として耳が痛いですが、その通りだと思います。では、現在の日本において、どのような英語教育があるべき姿で、支持も得られるものだとお考えですか？また、現場を多くみられている先生は、その理想に近づくために、今何が欠けているとお考えでしょうか？	B)小中高教職員
96	笹	高校長協会として、民間試験導入そのものにはどういう立場ですか	お話にあった通り、これだけの懸念があれば民間試験導入そのものが難しいと考えざるを得ないのではないのでしょうか。”「民間試験活用環境を整備して下さい。」これが高校の要望です。”とのお話でしたが、導入そのものに反対の高校教員がいます。 協会としては、どういう立場ですか。	B)小中高教職員

No.	どなたへの質問ですか？	質問のテーマ	質問内容	あなたのご職業等
97	笹	一都立高校の校長としてお答えください。	仮に笹先生が都立三宅高校の校長だとした場合、生徒達に「民間の英語試験を受けに行きなさい」という指導をしますか？ (各種条件が現状のままの場合)	A)大学教職員
98	笹	高校の反応について	進路多様校や専門高校では、今回、英語の民間試験の導入により出願そのものをあきらめるなどということはないのでしょうか。 校種により反応の違いがあれば教えて下さい。	B)小中高教職員
99	笹	—	大学入学共通テストと学校行事が重なった場合、どちらを優先しますか	E)その他
100	—	認定試験の活用方法の提示について	高校現場が求める認定試験の活用方法の提示は、具体的にどういった内容までを求めているか、教えていただきたい。	A)大学教職員
101	笹	意見	民間試験の課題について、他の学校の校長にも知らせてほしいです。	B)小中高教職員
102	笹	適切な検定料	65頁に適切な検定料最高が25,380円で、2回受けると50,760円、これは受験生に対して経済的な負担をかけるのではないのでしょうか。	A)大学教職員
103	笹	高等学校の姿勢について	校長へのアンケート調査では、英語民間入試導入やむなし、早く詳細や条件提示を高校に示して欲しいという、いささか自己中心的な意見と、一方、民間試験の公正性、平等性に深刻な疑念を示している。どちらも高等学校は本音ではどう思っているのか。 全国高等学校長協会はもちろん、都道府県レベルで国立大学や文科省に批判の声をもっと声高に届けても良いのではないかと。 "導入ありき"の姿勢には(そう聞こえてしまいました)、大変残念です。	A)大学教職員
104	笹	現在の状況について	後戻りはできないと発言がありましたが、誤ったことはすぐに撤回することが大切。それを教えることも教育の本質。 民間試験導入を撤回と笹先生が声を大にして言ってほしいです。 学校会場についても反対しています。年に何度も資格のために平素の教育活動が制限されることはあってはならないと思います。よろしくおねがいします!! 頑張ってください。 GTECのアセスメント(つまり模試)でOKとしている大学がある。それを加点する大学があることについて(2018入試、2019入試)どう考えますか？	B)小中高教職員
105	笹	4技能民間試験受験機会の確保の公平性について	民間試験受験機会については、交通困難地域への対応を当然のことと思われるが、多くの2020年度高3生が2020年6月に受験を希望している状況にあるが、オリンピックをひかえ、首都圏でも適切に受験ができる会場は確保できると考えているのか。 ということが、12月に設置されたワーキンググループで話題になっているのか、また、都立高校の校長先生としてはどうお考えか。 ご教示頂きたいです。	B)小中高教職員
106	笹	入試制度について	都立高校入試で「スピーキング」の導入が検討されているが、大学入試でさえ「このままでは難しい」とされているのに、導入は可能なのか？また、その精度は保証されるのか？	D)学生
107	笹	調査結果について	調査で把握された課題について、各都道府県の当局と文科省初中局にはどのようにお伝え頂いていますか。 当局の指示、指導には、そうした懸念に対する理解が感じられません。	B)小中高教職員

No.	どなたへの質問ですか？	質問のテーマ	質問内容	あなたのご職業等
108	笹	高校を会場としての実施について	・高校は生徒に少しでもよい得点を取ってもらいたいと思うのが自然で、その高校を会場にして大学入試の英語テストをすれば、ほころびが出て、お手盛りがあるだろうと思われると思います。そんなことはないとするためにも、高校で実施することを断っていただきたいと思います。（全国の高校一体で） ・お話の最後のあたり、とても説得力がありました。ありがとうございます。	A)大学教職員
109	笹	会話が苦手で学力の高い子の困惑	その様な生徒も少なくないはず。おしゃべりでない子が英語力の低さ（英会話重視による）により不利にならないか。	A)大学教職員
110	笹	調査結果の解釈について	様々な質問項目において「どちらともいえない」という回答が一定の割合を占めています。この状況をどのように解釈されますか。個人的には、「外部入試の活用という話題が難しいので悩んだ」という声ばかりでもないと思います。	A)大学教職員
111	笹	センターが4技能テストをつくった場合	高校が会場提供するのは「あり」ですか？	—
112	笹	高校現場ができること	本日の他の講演をお聞きになって、高校現場でできることは何だと思われるですか？ ・特にcan-do List（ループリックも含む）の作成を都立高校にもとめておいて、その作成法や指導がないことにも不安をおぼえています。 ・英語科の教員への負担減にはなにができると思われるですか？	B)小中高教職員
113	笹	英語入試改革の実施に対するお立場について	冒頭に、諸々の問題はありながらも、「ただ後もどりはできない」とおっしゃられました。その理由は何ですか？ 指摘のように課題が多く、取り返しのつかない問題が発生するかもしれません。私見では”事故”が確実なら、ブレーキを踏むべきと考えますが、いかがですか？ よろしければ他の皆さんにもお答えいただきたいです。	A)大学教職員
114	笹	文科省のWGの実態について	「もう後もどりができない」とおっしゃったが、この不公正・不公平な民間試験導入を強行すると、全国で紛糾が発生必至です。話し合いの実態を教えてください。非公開はおかしい。議事録の公開を求めて下さい。	E)その他
115	笹	検定料・試験回数について	・民間試験利用はもうあともどりができないとおっしゃいましたが、本当にそうなのでしょうか。 検定料はきちんとした質の担保に必要な人件費、調査費等に基づくものであり、これを下げれば当然質は下がる可能性がある。回数についても同じです。試験官の確保に危機感を抱きます。 ・給付型奨学金を出せる大学・学部には運営・授業に実務経験のある者を一定数以上関わらせるという条件がついています。受験生によっては受けたい大学が経済条件によって選ばれられることになる。 つまり、問題は本質的なあやまりにより起こっている。改善では済まないのでは？ すみません。本当は文科省に文句を言いたいのですが。	A)大学教職員

No.	どなたへの質問ですか？	質問のテーマ	質問内容	あなたのご職業等
116	笹	地方における英語民間試験の公会場確保について	英語民間試験において、「センター試験と同等以上」の受検場の確保が求められていますが、地方においては離島やへき地においてそれが難しいことが考えられます。地方における受験機会を公平にするために受検場の増設、受験料の補助などの具体的な施策があれば教えていただきたいです。 4月から地方の高校の英語教員になるので、その点が非常に心配です。	D)学生
117	笹	中教審での発言を希望する質問	今日のお話は今回のシンポジウムの趣旨に合った様々な問題点の指摘は極めて納得できる内容であった。これを中教審で発言して頂きたい。 いつも傍聴しているが、笹先生からこのような発言を聞くことはない。このような発言を特にワーキングでなさっているのが質問したい。非公開なのでわからない。	A)大学教職員
118	笹	ワーキングについて	関係者の疑問・不安解消に資するのかわかりません。議論の中身を教えてください。	E)その他
119	笹	全国高等学校長協会会長として	結局、資格試験を受け入れていく、という方針の下で、そのためにはどうすれば良いかを考えていく。というものが考えの根底にある、という認識でよろしいでしょうか？	C)民間教育関係
120	笹	学校間の差・進捗について	「進学校・非進学校」「公立・私立」などの違い。 カリキュラムの組み方については、どの程度視野に入れられているのでしょうか。同じ時期でも、公立校生と中高一貫校生とでは、能力も違うように思われます。	—
121	笹	ルール作りについて	国の政策として民間を使うのであれば、ルールを作ったり、チェックを行うのは国ではないでしょうか？ 業者の仕事ではないのではないですか？ 料金も、国が補助するべき？ でないと、不正が行われると思います。	D)学生
122	笹	⑨民間の資格検定試験で心配なことや課題について (P.64)	一業者テストによる外部試験に偏ることによる弊害。 その外部試験を主催する業者が運営、経営する英会話スクール、通信教育、教室など、自己の利益に走ることは目に見えています。 その対策措置はどのようなものがありますか？ 一業者によるテストではなく、複数業者が資金を出し合って新しいテストを作れませんか。	B)小中高教職員

フロアからの質問への紙上回答

シンポジウムにおけるフロアからの質問 (p.95～p.106 に一覧表掲載) に対して、登壇者の方々から、シンポジウム終了後に回答が寄せられましたので、以下に掲載します。

●石井洋二郎 東京大学理事・副学長

「東大の入学試験」についてのご質問をいくつかいただいておりますが、主要な事項についてはすでに3月8日付で大学のHPで公表されていますし、そもそも私は入試担当ではありませんので、お答えする立場にはありません。したがって、教育担当として質問3にのみお答えさせていただきます。

これは東大在学中の学生さんからの厳しいご指摘で、もし東大の英語教育の実態が本当にこのようなものであるなら、失望させてしまったことを率直に反省し、改善に努めなければなりません。

ただ、現在の英語の授業が「前近代的な訳読一辺倒」であるというご指摘については、正直のところ、信じられない気持ちです。東大はもう4半世紀前に教材を一新し、「英語 I」という科目をスタートさせて旧来の「訳読一辺倒」の授業からは明確に方向転換しています。また、2008年度からは理科生向けの英語論文作成必修授業である ALESS、2013年度からはその文系版である ALESA と「英語 I」を発展的に継承した「教養英語」、そして2015年度からは英語で論理的な討議ができる力を鍛える必修スピーキング授業の FLOW を開設し、実践的な英語能力の涵養に努めています。確かにこれらの授業の時間数はまだ十分ではないかもしれませんが、カリキュラム自体が「リーディング一辺倒」というご批判を受けるようなものでないことは自信をもって断言できます（なお、ALESS/ALESA と FLOW については授業の性質上、すべてネイティブスピーカーの外国人教員が担当していますが、授業内容や方法の設計はすべて教養学部の英語教員が「自前で」おこなったものであることを申し添えます）。

ただ、それでもなお、現にネガティブな印象を受けた学生さんがおられるのは事実ですから、その点は大学として真摯に受けとめたいと思います。たとえ1人でも、ご質問にあるような「旧態依然たる授業スタイル」を変えることなく、「ただ現状にしがみついているだけ」の教員がいたとしたら、そのようなご批判を受けることのないよう、全教員が東大の英語教育の趣旨を十分理解して授業に臨むべく、FD（ファカルティ・デベロ

プメント)等を通して改善に取り組んで参ります。その上で、本学の英語教員たちが今回の英語民間試験導入に反対しているのは、決して訳読中心の古い教授法を変えたくないからではなく、すでに各方面から指摘されているような問題点が今なお解消されておらず、このままでは受験生に無用の不安と負担を強いることが確実だからであるということ、どうかご理解いただきたいと思ひます。

●大塚雄作 京都大学名誉教授／大学入試センター名誉教授

質問2 (大学入試に望ましい英語試験について) への回答

私には回答に苦慮する質問です。その理由の一つは、「試験で社会を変える」とか、「社会を変えるための試験」という言い方が私にはピンと来ないからです。試験はできる限り軽量化する工夫をしていくことが望ましく、むしろ、そのことによって教育の部分にリソースを振り分けていくことが肝要と思ひます。それで、児童・生徒たちの「学び」が変われば、それに応じて、試験も自ずと変わっていくものと思ひます。

試験が変われば、教育も変わるということ自体は、否定し得ないことではありますが、ただ、現状では、試験のための教育というレベルにあるからそうなるのであって、教育がその域を脱していかないと、本当に望まれる方向に社会が変わっていくということも覚束ないだらうと思ひます。

また、いかに社会を変えるために理想的な試験であったとしても、多大なマンパワーとコストを注ぎ込まないとできないような試験は、少なくとも共通試験としては破綻することが目に見えています。大学入試センターは、受験料だけで運営されていますから、コストが必要になれば、受験料を上げざるを得ません。しかし、共通試験の趣旨からすれば、そう簡単に受験料を上げることができないということもあるかと思ひますので、コストだけが嵩むことになれば、センター自体が破綻することになります。そうなれば、共通試験は続けられません。

共通試験がそれなりに軽量であっても、それによって個別大学の選抜単位ごとの試験において、ある程度の規模の適格な受験者に絞り込むことができれば、その規模でこそ可能な、また、その分野に必要とされる、より精度の高い個別試験を実現していくことも可能になるだらうと思ひます。自ら進むべき領域ではこのような入試が行われるから、そのためにその領域ならではのこういう学習をしようという流れは、そう無理のないことかと思ひますが、それを共通試験のすべての教科・科目において求める必要はないのではと思ひます。試験全体の中での力点の置き方は、その意味で、共通試験よりも個別試験に置かれるべきということ、現在の入試でも既にそのように捉えられていると思

いますので、言わずもがなのことかもしれません。

一方、紙と鉛筆という入試メディアが廃れて、日常の教育においてもコンピュータが文房具として当たり前になったとすれば、その入試メディアによってであれば、共通試験における記述式をも含むパフォーマンス型の試験も、それほど大きなリソースを投入することなく、多少なりとも実施可能になると思います。「軽量」という部分は、テクノロジーの革新によって、時代によって変わっていくということもありますし、また、実際に、そういう試験が実現すれば、教育課程におけるメディア変革がより浸透していくという循環も生じると思います。

どういう社会になってほしいかという点においては、ほとんどの人はそれほど違ったイメージを持っているわけではないと思いますが、少なくとも、その社会に向けて、「試験」というところに、多くのエネルギーを費やす方式を強引に導入しても、結局、それを実現できずに終わるのではないかと思います。目指すところはほぼ同じような社会像であったとして、それを実現するために教育や入試に何が望まれるのか、教育実践の現場や、とりわけこれから育ち行く若い世代の一人ひとりの立場に立って、地に足の着いたプランニングと方略を講じていくことが大切であろうと思います。

質問 4（共通テストの一環として実施される民間試験の法的実施主体について）への回答

Q1 大学入試に関わる日本の風土を前提として、共通試験に民間試験が参入しようとするのであれば、大学入試センターが経験してきたさまざまなトラブルや課題と、それらへの対応方法、あるいは、懸案事項として残されている課題等について、まずは共有しておいてほしいという願いをもってお話ししたつもりです。

Q2 英語に関しては、成績提供システムへの参加要件が定められていますので、それは法的拘束力まで持つものではないと思いますが、民間試験団体が少なくともそこに規定されている要件を満たしているか、的確な審査が行われていくことが肝要ということかと思います。その参加要件をクリアしていれば、民間試験団体は、一定の質が担保されていることが示されるということになれば、成績提供システムは安心かつ有効に活用されていくことになると思います。

もちろん、その参加要件自体は、センター試験がその長年の経験の中で、問題が生じれば一つひとつその対応を図ってきたように、今後、時代と共に改訂が積み重ねられていく形で、より適切な規程へとブラッシュアップされていく必要があります。また、参加要件への適合を審査する体制についても、今後、より客観的かつ公平性・公正性の高いものへと改善されていくことが求められると思います。少なくとも、世界的には、教育サービスに関わるプロバイダや教育プログラムに関する国際標準（ISO29000 シリー

ズ)なども既に動き出していますので、ハイスティクスな大学入試に関わる試験に関しては、そういった国際的な標準にもこれからは敏感になっていかねばならないでしょう。

民間試験団体は、「日本」の共通試験に参加するために、参加要件を毎年クリアしていく必要が出てくると思いますので、おそらく今まで通りというわけにはいかない部分に相当のコストをかける必要も出てくるだろうと思います。また、共通試験の枠組で、民間試験間の比較が当然のこのように行われるようになりますので、参加すること自体が難しくなる民間試験も出てくるのではないかと想像します。そのような事態は、受検料が値上がったり、目指している民間試験が突然淘汰されることになったり、最終的には、受験生にしわ寄せがくることとなりますので、私は、その辺の状況を的確に把握していくことが、成績提供システムの運営に関わるサイドの基本的な責任として自覚される必要があるだろうと思います。

質問 13 (センター試験・大学入学共通テストについて) への回答

そういう案も当然あったのではないかと思います。当初は、「センター試験は廃止」という言い方が前面に出ていたと思います。ただ、共通1次試験が始まる時には、しばらく共通試験抜きの個別入試だけで行われていたわけですが、当時の団塊の世代という時代背景も相俟って、受験競争激化の中で、入試の難問・奇問化などの課題が浮上していたことへの対応策として共通試験が導入され、その点に関しては、一定の成果が得られたという評価が共有されているのではないかと思います。

特に、今般の入試改革においては、個別試験が、学力と共に、それ以外の「資質・能力」も含めて、多面的・総合的評価が求められており、学力の基礎部分に関しては、共通試験が、「学力の三要素」でいうところの「知識・技能」、「思考力・判断力・表現力」を測定し、個別試験では、「主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度(主体性・多様性・協働性)」により力点を置いた評価を行うというような「役割分担」が強調されてきており、「共通テストそのものをなくしてしまう」という議論や意見表明を私自身はあまり聞くことはありません。

むしろ、共通1次導入当初の一芸入試などをはじめとするユニークな入試方法へのチャレンジの余地を大きくするために、共通テストをしっかりと受験させるということが前提の議論がなされてきていると思います。すなわち、それぞれの選抜単位の、今で言う「アドミッションポリシー」に合った、ユニークな個別試験を行うためにも、共通試験を止めてしまうという選択肢は採りにくいというのが大学の実状であると思われまます。また、個別の大学において、多様な入試のすべてを自己開発し、毎年実施していくことも容易ではない大学も少なくなってきたのも一因になっていることかと思えます。

共通試験が 40 年続けられた経緯からして、今の時点で共通試験をなくしてしまうということは、基本的には論外という風潮にあるのではないかと思います。

質問 21（センター試験に使用される語いについて）への回答

学習指導要領は、比較的抽象的な表現で記述されていて、英語の単語に関して、当用漢字表に相当するものが作られているわけではありませんので、試験に使われている単語が、前段階の学校教育ですべての受験生が学んでいるかどうかは厳密に決められるわけではありません。学習指導要領には、基本的に、学習すべき単語の数の目安程度が示されるにとどまっています。センター試験では、問題作成に関わる委員が、教科書や使用頻度の目安が記されている辞書などはもちろん参考にしつつ、経験的に判断しているものと思います。ただ、点検委員も含めて、試験に使われている単語等が日本の高校生の学習レベルに適合したものであるかどうかについては、毎年作られる試験に関して具体的に検討が積み重ねられ、意見のやりとりも行われてきているということもあって、センター試験に利用された単語集などが作られているのを Web 上で見ることができます。

<http://language.sakura.ne.jp/s/voc.html>

ただし、上記に収録されている 4000 語強の単語以外の語がこれからの共通試験に用いられる可能性もありますし、時代によって、学習すべき事項は変遷していくものであるということは常に念頭に置いておくべきと思います。

質問 22（センター試験の運営について）への回答

受験生のマークミスは多岐にわたります。そのすべてを、大学入試センターでチェックしているわけではありません。

センターにおいて人の目でチェックしているのは、感度を変えて、2 度マークシートリーダーで読み込んだ結果が異なる場合です。該当するマークシートを引っ張り出してから、それについて人の目で確認するということです。感度を変えて異なる結果になるというのは、感度によっては、消しゴムでマークを消した痕をマークしたと読んでしまったり、消しゴムの小さなかすが着いていたり、鉛筆の擦れ痕がわずかに残っていたり、あるいは、何らかの汚れが付いてしまっている場合などでは、ダブルマークされていると読んでしまうということがあり得るということです。また、逆に、マークが薄すぎる場合は、感度によっては、マークしたとは読めない場合もあります。感度を変えて 2 度読んだ結果、異なる読み込み結果となるマークシートが、数千枚オーダーで毎年出現するわけで、それらをセンターの教職員がほぼ総出で、目で見えてチェックする作業をしているということです。

受験生自身の責任で、2 番目を間違えて 3 番目にマークしてしまったといったマーク

ミスがあったとしても、特に間違いやすいのは、「0」と「1」を取り違えるマークミスかもしれませんが、いずれにしても、コンピュータ上にそれが反映されないものについては、マークミスかどうかの判定は不能ですので、マーク修正をセンター側で行うということはありません。

質問 23 (世間との認識のちがいについて) への回答

大学入試は、受験生の立場に立って、円滑な試験を行うことがまずは優先されるべきことであり、大学入試センターは、そこにまずは依拠して、入試に関わる業務を日々積み重ねているところであります。その業務を円滑に進めることは、受験生や高校の先生方、大学の教職員の方々など、入試に関わるすべての立場の方々の協力なくしては困難です。大規模試験を実施するセンターの立場におりますと、何でそんなことが起こるのといったことがいろいろなところで経験されますし、また、そういったことのひとつひとつを潰していくために、センターが人知れず努力してきているということは、あまり知られていることではないと思います。確かに、その点は、受験生や保護者のみならず、本来、社会全体が共有しておくべきことではないかとも思います。ただ、入試という性格上、何でもかんでも公表できるわけではありませんので、その点には常に注意しながら、今回のシンポでも私なりに出してもいいだろうというところを発信させていただいた次第です。できる限り、入試を透明化していくということは、私自身は、これから共通試験に限らず個別試験も含めて、入試に求められる基本になっていくだろうと思っています。

質問 24 (公平性の担保) への回答

「選抜試験の一翼を担う」と言うとき、そのどの部分を担うのかということを確認しておくことが大切であると思われます。民間が共通試験全体を引き受けるという場合も考えられますし、現行のように共通試験の一部の科目(英語)のみを担うという場合もあれば、個別試験の一部を代替するという場合、あるいは、これも現行でやられているように個別試験段階における出願情報の一部に民間試験成績を記載することで活用するという場合、等々、さまざまな担い方があるかと思えます。本来、既にある民間の資格・検定試験を活用する場合は、その試験はある目的の下で試験開発されているはずですから、その目的に適合するアドミッションポリシーなどが示されている個別試験において活用するという事は矛盾のないことですし、本筋の活用のあり方の一つであると思われます。

共通試験の枠組で、目的外に既存の民間資格試験等を活用するという事は、それこそ、公平性という点で問題が生じ得ることです。どの民間試験の成績も「点数」等で表

現できるから使えるというのは、社会に対するまやかし以外の何ものでもありませんし、国際的にも通用性のある活用とはとても言えないと思います。

民間試験団体が選抜試験の一翼を担うためには、当該選抜試験の枠組において、それに適合する試験を改めて開発していく必要があるのだと思います。英語に関しては、成績提供システムの参加要件を満たすためには、現行の資格・検定試験をその要件に沿って改訂していく必要も出てくると思います。大学入試は、学習指導要領や受験者層の変化などに応じて改訂されていくべきものですので、民間団体も同様に、自らの資格・検定試験等をその変化に合わせて不断に改訂していくことが肝要です。そのためのコストがかかるということも、民間団体はしっかりと自覚しておいていただければと思います。

質問 25（「知識及び技能」を問う問題の作成について）への回答

「知識・技能」、「思考力・判断力・表現力」といった表現そのものが、独立した概念ではありません。例えば、一人の個人を想定しても、共通試験レベルであれば、得意な科目の試験は、「知識・技能」レベルの問題になり、しかし、不得手な科目の試験は、いろいろな情報を統合したり、手順を一つひとつ追っていかねばならなかったり、考えなければ答えを導けないということもあるかと思えます。

そのことは、個人差という点でも同様に起こることです。例えば、私自身は、数学は、計算等も含みつつ、論を展開していくことで解に至ることができると思いますが、ある文系の受験経験者が「数学は暗記科目」という言い方をしていたのに驚いたことがあります。確かに、「思考」や「判断」に基づいて解を導くことができそうもないと思われる科目に対しては、事項を丸暗記して臨む以外なくなるということも経験されることだろうと思います。

なお、「学力の三要素」については、学術的にコンセンサスが得られているレベルの概念とは言えないと私は思っていますので、「知識・技能」をどうするかというよりも、共通試験は、基本的に、学習指導要領、教科書を、どう試験に描き直すかということがまずは大切になるだろうと思います。それによって、自ずと、いわゆる「知識・技能」に関わる問題も含まれるようになるでしょうし、また、「思考力・判断力・表現力」に関わる問題も含まれていくということかと思えます。ただし、それもまた、人により、課題により、いわゆる「学力の三要素」のどの要素に近い解答プロセスを経るかは違ってくことだと思えます。

出題する側の出題意図を示す場合は、標準的な受験生を想定して、標準的な解法によって問題解決に臨むことを前提として、といった状況設定をしてのことであって、現実の受験生がどのように解答しているか、また、その解答に基づく得点が何を反映しているかは、出題者の意図をはるかに超えることになるのが通常です。なお、「標準的」とい

うのが何かという点は、これも自明のことではなく、隔靴搔痒の感がありますが、そんな範囲で試験というのが行われているというのが現実なのだろうと思います。

質問 26 (2024 年以降の「センター試験」廃止について)、

質問 28 (センターで、4 技能のテストをつくることについて)、

質問 30 (スピーキングの「組み入れ」について) への回答

大学が 4 技能試験を行うということについては、例えば、個別試験において、せいぜい 100 名前後の受験者から、20 名程度の合格定員を選抜するといった状況を想定すれば、一日程度の試験日であっても、そう不可能なことではないかと思えます。しかし、共通試験において、センターが 4 技能試験を実施するとすると、その採点や面接官、試験監督など、おそらく、大学の英語教員を中心に、教職員が総掛かりで実施していかないとさばききれないということがあるだろうと思えます。マンパワーを大量に注ぎ込まないといけない試験は、早晚破綻するのが見えていますので、実現は難しいとお答えせざるを得ないと思えます。実際に、4 技能試験という方向性が出された 3 年ほど前に、「是非、スピーキングの試験も実現してほしい」という大学の英語の先生方に、「面接官や採点を大学の先生方をお願いすることになりますけど、やっていただけますか」とお願ひしますと、「それだけは絶対に止めてほしい」という返事が即返ってきたという経験があります。私の周囲では、記述式にしても、4 技能試験にしても、「ガレー船」アナロジーというのが一頃はやりましたが、短期間の間に実施と採点を「公正」に実施するためには、「マンパワー」という言葉の背後に「ガレー船」にも似たある種の力関係の下で圧力をかけざるを得ない状況というものが出現することになるだろうと思えます。

そのようなパフォーマンス型の試験においてマンパワーを使わないようにするためには、例えば、CBT の導入が考えられます。CBT によってパフォーマンス型の解答を収集し、ある種の自動採点システムによって算出された得点を、共通試験におけるスクリーニング的な指標として利用することに社会的なコンセンサスが得られるのであれば、マンパワーをカットすることができるだろうと思えます。そのような方式については、大学入試センターの研究開発部でも既にモニター調査などで研究開発を進めているところですが、それを実際の試験に活用できるレベルまで持つためには、少なくとも、研究開発のための十分な時間とコストが必要となります。もし、大規模共通試験に 4 技能試験を本気で導入しようとするならば、その時間とコストを、国はまずはしっかりと確保すべきと思えます。

質問 27 (数学ⅡB について) への回答

平均点は、科目の難易度のみならず、受験者層にも依存します。ⅡB どころでなく、

数Ⅰ、数Ⅱの平均点が低くなってしまっていることも何とかできないものかと思うのですが、数学という科目の性格上、平易な問題が多くなると、逆に平均点が高くなったり、識別力が確保できなくなったりということがあり得ます。数学ⅡBも、平均点がかなり低くなり、それを何とか6割に近付ける努力はされていますが、数学の場合は、得点調整の対象とされていないということもあり、まずは、センター試験の目的である、高校の基礎学力と大学教育への適合性の二つの側面から、大学入試としての試験問題を作成するという考え方が優先されてきています。今のところは、6割そのものではなく、6割にできる限り近づくという程度を目標に定めて問題作成が進められているということかと思えます。

質問 29（共通テストについて）への回答

試行調査は、センター試験とは明らかに違う試験という印象を社会に与えるという文科省の意向もあって、それに沿うために、文章や資料の量の多さであるとか、複数選択問題、複数連動型問題など、かなり無理のある問題が作られてきていると私は思います。センター試験も、すべてがよい問題というわけではなく、いろいろと試行錯誤しつつ、精錬されてきているわけですので、新しい枠組での問題作成も、徐々に改善されて、安定するまでは多少の時間が必要とされることになるだろうと思えます。

質問 31（語学検定試験の大学入試における国際的な実施状況について）への回答

私は、この件について、データを持ち合わせていませんが、少なくとも日本のような大規模共通試験において4技能試験を実施しているところは皆無ではないかと思われまます。むしろ、選抜試験に、目的の違う資格試験を利用するということや、50万人を超える受験生に記述式やスピーキング試験を入れるという無理筋は、世界的にはむしろ無謀の誹りを免れないレベルのことだろうと思えます。留学試験の範囲であったり、高校の卒業試験的性格のものであったり、世界の共通試験で記述式を入れている試験の背景は、日本の状況との差異を感じるものがしばしばありますが、「海外では」とか、「どこどこでは」というように、海外の状況を「では」で紹介するやり方を「出羽守」と、比較教育学の領域では揶揄されるそうですが、「では」の背景をよく踏まえておくことが肝要と思われまます。入試に英語の4技能試験を利用している英語圏以外の国があったとしたら、その国の日常生活における英語の位置づけ(公用語の一つにされているなど)とか、大学教育において英語で授業が行われているとか、受験者数がそれほど多くない範囲に収まっているとか、そういった背景が日本と同様のものであるかどうかという点をまずは確認しておくべきだと思います。その上で、日本にどの部分であれば導入できるのか、よいところは真似することも避ける必要はないと思えます。

質問 32 (センター試験「英語」の信頼性) への回答

信頼性、妥当性に関する比較は、それに関わる要因が多岐にわたりますので、軽々に他のどの科目より信頼性が高いと言い切ることは難しいと思いますが、一定の信頼性が確保されていて、かつ、いわゆる理系科目、文系科目のいずれとも相関のある科目ということではできると思います。そこで、理科や地歴公民の得点調整対象科目の平均点差が、問題の難易に依るのか、受験者層の差異に依るのかについて、一つの目安を得たいときなどには、それぞれの科目の受験者の英語の得点を比較することで、ある程度学力層の差を推測するといったことが経験的にやられてきていることです。ただ、だからと言って、得点調整を英語の平均点差を根拠にできるかということ、そんなに簡単なことではなく、その他にもさまざまな要因が潜んでいる可能性もありますので、もし、そういう差のある可能性が見出されたとしたら、では、当該の科目間平均点差がどんなところから来ているのか、さらに探る次の行動に移っていくことができるという程度にお考えいただければと思います。

質問 33 (センター試験や入試問題の非公開化について) への回答

アイテムバンクの非公開の維持は、ハイステイクスの試験の場合にはかなり難しいことだと思います。現行のセンター試験でも、問題冊子の持ち帰りということもあり、終了後いち早く、試験問題の写真が SNS を席卷するということがあります。私の友人が試験監督をしたときに、試験時間中に何もせずに座っているだけの 30 歳前後風の受験生がいたそうで、彼の想像では、おそらくそれは受験産業関係者で、試験終了後に配布された問題冊子をすぐに予備校に持ち帰り、一早い問題解説などの作業に入るための役割を担っているのではないかということでした。そのエピソードの真偽はともかく、そういうことは、アイテムバンクに記録されるアイテムパラメータ (項目反応理論を適用するために必要な項目特性を表す指標) などの推定のための予備調査などでは、コスト的に監督の目も十分に行き届かない可能性も増しますし、その予備調査が大学入試に利用されるということを隠すわけにもいきませんので、なかなか歯止めをかけるのも難しくなるとおられます。したがって、アイテムバンクの秘匿という点についてはかなり危険があると考えざるを得ません。逆に、アイテムバンクをすべて公開しても、それぞれのバンクに万オーダーの項目数を含めておくことができれば、ほとんど、非公開と同等に試験を行うことはできるのではとったりもしておりますが、公開された項目のすべてを丸暗記するといった学習行動に結び付いたり、それはそれで別の問題も発生することが考えられますので、その辺は慎重な検討がまずは必要となるとおられます。

また、CAT (コンピュータを利用した適応型テスト) についてもいくつか課題が残さ

れています。まず、受験生によっては、能力パラメータの値の推定がバラついて、一定の収束幅に収まるまでにかなり長時間を要するということもあり得ますので、その辺の個人差をどう捉えるかといった課題が残されています。また、ランダムに問題提示するということは、提示される問題に偏りが生じる可能性もあり、学力試験において求められる偏りのない出題をどうコントロールすることができるのかという課題があります。そもそも、コンピュータを受験者数分どのように準備するかということ、コンピュータを用意するコスト、コンピュータの操作ミスなどが生じた際にどう対応するかといった実施面の課題、等々、いろいろと研究課題が残されています。そういった研究開発を十分に経た上で、CBT、CAT の導入を順次進めていくといった段階的なステップが求められると思います。

質問 34 (共通テストの実施について) への回答

記述式問題については、古くから、「採点者信頼性の問題」が常に取り上げられて来ているところです。採点者による誤差の発生は決してゼロにできるものではなく、50 万人規模の大規模試験では、相当数の採点結果への疑義が受験生から出てくる可能性を否定できません。そのために、試行調査では、複数採点者の体制をとったり、条件付き記述式問題などを含めたりといった、採点の信頼性を確保するための工夫をさまざま講じてきておりますが、それでも、センターにおいて、記述式採点結果のサンプリングによる検収において、採点結果の疑義が無視し得ない程度に出現しているようです。海外でも、記述式を導入している共通試験は少なくないですが、採点の期間はそれなりの長さが確保されており、また、受験生が採点結果に納得できない場合は、有料ながら、「アピールシステム」を準備して、採点結果に疑問がある場合は定められた期間にアピールができて、委員会でそのアピールを査定した上で、得点を確定している制度が導入されたりもしています。それによって、結果確定後の長い訴訟などに陥らないような配慮がなされている例も聞くところです。

そもそも、記述式問題の採点は、出題者と受験生の間で、一定の教育文脈が共有されていることが前提で定まってくるべきもので、例えば、授業においてこのように教え、学んでいるはずだからということを前提に、適格な採点基準を設定することができるわけです。無限の回答可能性があるなかで、そういう文脈が全体には共有し得ない状況においては、採点基準を定めることもままなりませんし、結局、条件付き記述式など、記述式問題のよさを捨てていかざるを得なくなります。そもそも、条件付き記述式問題について採点された点数が何を反映するかは、実証的に検討しておく必要があるだろうと思います。条件に表されている要件さえ合っていれば、解答全体が意味の通ずる文章でなかったとしても正解になったりもするというようなことでもあるようで、得点が何を意味する

かが不明瞭な記述式を共通試験に入れることにどれほどの教育的効果が期待できるのかは大いに微妙といわざるを得ません。記述式などの採点にかかるコストは相当なものであり、その負担は受験生にかかってくるということを考えますと、共通試験において、現時点で、記述式を導入することは避けなければならないことと思います。一方、受検料を値上げしないで、大学入試センターに記述式の負担が押しつけられるようなことがあれば、センターは早いうちに経営破綻することは自明です。

個別試験においては、選抜単位がかなり絞られますし、分野的にも一定の範囲に限られることで、受験者に要求するレベルも定めやすく、それに応じて採点基準も決めやすくなりますし、また、採点の過程でいろいろな問題が生じた際に、採点者間の調整を踏まえて採点のやり直しなども可能なサイズに受験者数をおさえることも可能です。

個人的には、解答者からの情報をより多く得ることのできる記述式問題が好みではありますが、大規模共通試験においては、記述式はむしろやるべきではないと思います。ただ、もし、CBTが導入されて、記述式も自動採点が可能になり、その結果に社会的なコンセンサスが得られるのであれば、共通試験においても記述式問題が機能していくことにもなるかと思えます。そのための研究開発による準備をまずは進めるべきと思います。それをせずして、時期を決めて、記述式を始めるとするのは、どう考えても、無謀であるといわざるを得ません。

質問 35 (センター試験実施におけるコストの問題について) への回答

高校の願書の取りまとめは、そのための謝礼や協力費といったものを、それぞれの高校に支給しているという話は聞いたことがありませんので、やられていないと思います。高校でまとめていただくことで、生徒個人に出願を任せる方式に比べて、トラブルの発生確率は格段に小さくなっていると思いますし、また、センターの事務作業も、圧倒的に小さくすることができていると思いますので、大学入試センターとしては、高校の教職員の方々の毎年のご苦労にはただただ感謝のみというところです。

学校を通さずに、個人に任せるとなれば、試験場などは個人ごとにバラバラに割り当てられることになるかと思いますが、高校でまとめていただくことで一つの高校は比較的まとまって、試験場に割り当てることもできているのではと思います。ただ、無償でお願いしていることが、もし、問題あるということでしたら、是非、センターに要求していただき、お互いに妥協点を探っていただければと思います。

なお、Web 出願に関しては、検討をスタートさせていると認識しております。ただ、個人的には、Web 出願のみにするというのは、共通試験では今のところはまだ難しいと思っております。大学に入学希望する者は誰でも受けられる試験であり、毎年、80 歳代くらいの高齢者の受験生もいると聞いております。そういう受験生の存在も、共通試験

は無視するべきではなく、事務作業の負担は増えますけれども、個々の受験生の状況に対応することのできる柔軟性を担保していただければと思います。

大学関係では、作問の委員に来ていただく大学の先生方には、旅費、謝金を支給しております。それだけ、大変な作業をお願いしているからですが、「謝金が出るなら、出張扱いにできないから、有給休暇を取って大学入試センターに行くように」と問題作成委員の先生に申し渡す大学もあると聞きます。その点も、作問委員を集めるのが難しくなっている一因となっています。大学「が」共同して実施する試験ですから、その辺を柔軟に、主体的に試験への協力をしていただけるとありがたいと思っております。

試験監督に関しては、試験会場を提供して下さる大学には、その協力に対して、一定の費用をお渡ししているはずですが、それをどのように処理するかは、個々の大学にお任せしているかと思えます。私の経験では、京都大学の試験監督は、代休を取ることができるとはありましたが、私が試験監督を担当したときには、昼食なども含めて、何の手当もありませんでした。センターから費用が出ていることはその時は知りませんでしたが、試験監督を経験した私の個人的感覚からしますと、大学にはその辺の配慮もしていただけたらありがたいと思えます。

採点に関しては、大学教員は現行のセンター試験に関しては、関与しておりません。大学入学共通テストには記述式問題が導入されることになっておりますが、その採点は民間に外注する予定になっております。

質問 36 (大学入試センターの意見について) への回答

「これは正直、答えにくいのですが」、という前置きで斟酌いただけるとありがたいです。センターの研究開発部教員は、テストの理論には精通しており、基本的に、実証的なデータに基づいて研究成果を表現していくディシプリンに依拠しております。その成果は、入試研究協議会や、日本テスト学会などで発表もされています。

もちろん、入試データを扱っていますから、公表できない研究成果もあります。ただ、入試に関しては、個人情報保護と公平性を基本としつつも、より透明化を進めていくことが、特に最近、不適切入試が社会問題となっている状況を見るにつけ、むしろ喫緊の課題として浮上してきているように思われます。センターの研究開発部の研究成果の透明性も、存在意義云々を言われないように、しっかりと確保されることが望まれると思えます。

質問 37 (作問について) への回答

大学教員の「作問」というのは、個別試験の英語試験でしょうか？民間試験はそれぞれ異なる試験目的の下に作られていますから、大学の選抜単位ごとにどういう英語力を

求めているかということによっては、個別試験の英語試験を別途実施する必要性はなくなるのではないだろうと思います。

共通試験の問題作成ということでありましたら、私はそうなってはほしくありませんが、共通試験から英語の試験を外すという、ある意味無謀な方針に、文科省は何故か固執していますので、そうなれば、共通試験の問題作成の負担はなくなることになります。

ただ、民間試験に任せると言っても、例えば、スピーキングを面接方式で行う試験があれば、その面接官に英語の教員が引っ張り出されるということも考えられますし、また、ライティング、スピーキングなどの解答の採点についても、大学の教員に声がかかるのは想像に難くありません。その点での負担は、民間試験の導入によって、むしろ増していくことになるかと予想されます。いずれにしても、民間試験導入ということがあったとしても、大学の教員は、試験問題の作成や採点等々からまったく無関係でいられるということはないだろうと思います。

質問 38 (センターの公平性について) への回答

「高校教育関係者」という表現を使っているのは、高校で実際に教鞭を執っている教員は含まないということがあるからです。公立の先生であれば、地方自治体の指導主事に出向する期間があり、その際には、授業を持たないということが原則です。また、学校の役職者で、授業をもたないという立場の先生方も、一応、許容されています。そういう先生方に来ていただくこととなりますので、「高校教育関係者」と表現しているわけです。それでも完全ではないといわれればその通りですが、それは大学の先生方にも言えることでありまして、秘密保持については、担当の先生方とのある意味紳士協定として遵守していただいております。数年前に、司法試験の問題漏洩が社会問題になりましたが、「問題を漏洩すれば、職を失う」という現実を経験することができたことで、大学入試センターでは今まで問題漏洩は検出されておりませんが、さらに、問作担当の委員の先生方には周知徹底を努めてきているところであります。

質問 39 (センター試験の作成者側の受験生への広報について) への回答

昨年 of 高校生新聞 (2018 年 1 月 16 日 : <http://www.koukouseishinbun.jp/articles/-/3508>) に、センター試験の問題作成やチェック体制について、私のインタビュー記事が出ておりますので、ご参考いただければと思います。また、講演などの機会にも、そういった情報提供はできる限りしてきております。また、センター試験の総括を進めるなかで、「文化資産」としてのセンター試験の有り様を少しでも忠実に伝えていけたらと思っております。

質問 41 (波及効果について) への回答

リスニング試験に関しても、導入後、その効果についての調査が行われたようですが、事前の調査が行われていなかったようで、事後の調査結果だけからでは、どうしても解釈できてしまうことになったと聞いたことがあります。したがって、試験が変わってからではなく、今すぐにでも、将来を見越して、高校、センター、大学が連携して、調査計画を策定し、実行に移す段階に来ていると思います。このところ、英語に関しては、大規模な調査が行われていますが、単発的に行われているものが少なくないと思います。入試の効果を明らかにするためには、単独の調査ではなく、点を線とするような調査計画が求められます。その際に、波及効果として見ておくべき点としては、入試によって、英語 4 技能がどう変容したかということのみならず、その周辺の変化も重要となるでしょう。どの範囲の情報を収集しておくべきなのかについても、専門家により計画に盛り込んでおく必要があると思います。入試が変われば、受験産業も「傾向と対策」を発信しますし、高校教育以前の教育がどう変わっていくのか、また、民間試験は、必ずしも大学での学びに適合したものばかりではありませんので、大学教育においてどのような影響が及んでいるかという視点も重要と思われる。正負両方の効果が当然あると思いますが、特に、負の部分の効果についてしっかりと把握し、それへの対策を早い時期に講じていくことが肝要と思われる。

質問 42 (センターと一見相反する新テストの作問方針について) への回答

認知科学・教育心理学等の科学領域の発展に伴って、現実の場面で活用できる知識や理解を求める世界的な潮流がありますので、その中で新テストのあり方を模索すれば当然のように導かれる案であると言える部分もあります。ただ、50 万規模の共通試験での実行可能性が伴わないものであれば、一度や二度は実行できたとしても、長続きするものになるとは考えにくいということがあります。その両立を実現するとすれば、入試メディアの変革が近い将来必ず起こっていくことになりますので、CBT という入試ツールの普及が必然と思われる。しかし、CBT を入試に実際に利用する際には、多くの解決すべき課題がありますので、まずはそこに我が国のリソースを投入することが肝要と思われる。また、一気に全体に実施するのではなく、現行のセンター試験で言うならば、例えば、配慮を要する受験者であるとか、「情報関係基礎」であるとか、コンピュータの利用のニーズが高い科目や受験者層から、実際に試験にコンピュータを利用してみて、課題を洗い出していくといったアプローチは、早い時期から始めることのできることでと思います。あるいは、4 技能試験なども、センターで一つの試験を構成するのであれば、英語ではなく、むしろ、他の外国語をサンプルに試してみるということも考えられるでしょう。それでも、1000 人規模の受験生と 50 万規模の受験生では同じとは言

えない部分があることは留意しておくべき点ではあります。やると決まったから、そこで定められた時期からとにかく始めるというのでは、頓挫することが見えています。ステップバイステップの工程を明確に共有して、急がば回れの精神で利用メディアの改訂などは進めていくことが大切だと思います。

質問 44 ("リスニング四天王"について) への回答

センター試験は、教材として、さまざまな教育現場で利用されますので、単に問題を解くのに必要な情報のみならず、問題内容への導入に資するために、学習者が関心を持てるような図や写真、また、リード文などが工夫されるということがあります。また、その問題から発展学習へと深めることのできる可能性をも加味した資料や写真等が利用されるということもあります。

点検委員会からは、問題の解答に必要な情報、受験生が混乱するので、できるだけ避けるようにといった指摘がされますし、また、リード文の流れには必ずしもマッチしない小問もありますが、私も、「それはさておき問題」と呼んだりもして、リード文との関連付けを心がけるようにといった指摘を問題作成部会にしてきております。

私の立場からは、教育に資するというセンター試験のもう一つの目的もあることから、問題量が必要以上に増えたり、解答時間不足になったりしないようにバランスがとれる範囲で、問題の解答に直接関係のない図や写真等の補足情報を問題に含めることは、各科目の部会の判断に任せるという方針をとっていました。

また、リード文の流れに即した小問にするという点に関しては、学習指導要領、教科書などに基づく出題範囲から、偏りなく問題を出すという方針もあり、ある程度は、リード文と小問との乖離は許容せざるを得ないということもあると思います。そんな制約の下、問題作成に苦勞している問作委員の先生方を見ていますと、「学習指導要領に即して偏りのない出題」という方針の捉え方を少し変えてみてはどうかなどと、思い付きのレベルではありますが考えてみたこともあります。例えば、毎年の試験ではなく、数年間にわたっての全体において偏りなく出題されていればよいといった捉え方ができないものかということです。もちろん、今年この部分が出なかったから、来年は必ず順番からここが出題されるぞといった予想などもされてしまう余地が出てきますので、慎重にシミュレーションしないといけないと思いますが、現行のセンター試験の問題作成においても、この種の改善課題は山積していると思います。

課題の内容は科目によって違いますので、学習指導要領から偏りなくということ自体は、英語というよりも他の科目で問題になる課題であると思いますが、少なくとも、英語においても、問題作成の先生方が、大学入試という選抜に資するべき問題でありながら、かつ、教育における教材としても魅力のあるような問題を工夫して出題する努力を

積み重ねてきて下さっており、リスニング四天王をはじめとする「話題」となるような問題は、それを狙っていると言うよりも、その工夫の結果としてたまたまそうなったと私は捉えております。

質問 66 ((共通テストについて) への回答

近々、新テストの問題作成方針などが具体的に、大学入試センターから発表されると思いますので、それを待っていただければと思いますが、ある部分は、同様の問題が出されると言うこともあるでしょうし、ある部分は新傾向の問題に変わるということもあるでしょうし、「踏襲」という意味をどう捉えるかによって、そうとも言えるし、そうとも言えないということになるのではと想像しています。

● 荘島宏二郎 大学入試センター研究開発部

質問 2 (大学入試に望ましい英語試験について) への回答

非常に重要な視点だと思っています。我が国の目指す国家像については、今後、状況の変化によって変わり得るので詳細に答えるのが難しいですが、以下に述べることは、時代や状況によっても変わりそうもない願いとして持っています。それらは、①国力が安定して伸長し、②どの学問分野・産業技術分野・スポーツ分野・ビジネス分野においても、トップと呼ばれる一群の中には必ず日本人あるいは日本の組織があってほしい、ということです。

①については、定期的に我が国を襲う大災害に見舞われたとしても、基本的には経済的に豊かであってほしいということです。簡単に言っていますが、簡単には達成できません。グローバル化により、世界の情勢変動と競争はますます激しくなっているからです。そして、国際的に評価の高い国民性(民度)の高さを保持していただければなおよいです(衣食足りて礼節を知る)。

その上で、②のように、世界における各界のトップ人材を定常的に輩出できるような人材育成の仕組みが国内に整っていると良く、その仕組みの1つの部品としてテストも機能していると良いなと願っています。テストは社会の公具です。人と地域、ひいては国家に資するものであるべきです。

上記を達成するためには、一面的な人材ばかりを輩出してはいけません。一面的な人材ばかりを生成する社会システムは、社会の変動に適応できないからです。多様で優秀な人材を輩出する仕組みを国内にもっておく必要があります。そういう意味では、センター試験一強というのは、あまりよくないことであると思っています。一面的な評

価に陥りやすいからです。このたび、民間試験が参入してきたことは歓迎すべきことであると思っています。ただし、クリアすべき課題がいくつかあるということなのだと思います（私は、値段と実施地域は問題だと思っていますが、それ以外は、特に問題であると思っています）。また、センター試験のような公的テストは、どちらかというところをエリートを見出すというよりは、中間層の底上げに貢献するものです。多様なトップ人材を育てるのは、各大学の果たす役割のほうが大きいと思っています。

20年後は、コンピュータなどのIT技術を積極的に用いたテストになっていると思います。IT技術を用いたテストは音声や動画など、メディアリッチな問題を作れるので、英語学力を測定するうえで今よりも適切な問題作成ができると思います。AIを用いた会話テストなどもできるでしょう。理想を言えば、テストの選抜をくぐりぬける競争力をもっている受験者が、そのまま各方面で世界を相手に戦う競争力をもつようにテストを設計することですが、なかなかそのような設計をするのは難しいと思っています。

しかし、自動翻訳が向上して、旅行や簡単な仕事上のやりとり程度では十分に機能するようになってきました。「翻訳こんにゃく」が夢の技術ではなくなってきました。20年も経つとさらに進化するでしょう。その中で、子どもたちの英語の学習意欲を維持するのが難しくなってくると思います。英語をほとんど使わない人、たまに使っても「翻訳こんにゃく」があるならば、そういう人たちに英語を勉強させるよりも、理系科目などの科目に力を入れさせるほうが効率的であるという他教科の先生方の意見も無視できないくらい強くなっているでしょう。20年後は、英語が最大受検者科目ではないかもしれません。

質問4（共通テストの一環として実施される民間試験の法的実施主体について）への回答

Q1：ありがとうございます。

Q2：当方の能力を超える質問です。申し訳ございませんが、回答を差し控えさせていただきます。

質問28, 30（センターで、4技能のテストをつくることについて）への回答

センター試験で四技能試験が可能かどうか検討されたことはありましたが、当時の（そして2019年現在も）入試センターの運営能力では困難でした。いずれは可能になると思います。しかし、「いつ可能か」となると明確に回答するのは難しいです。

質問32（センター試験「英語」の信頼性）への回答

センター英語が他の科目テストよりも信頼性が高いとは思っていません。しかし、セ

センター英語が他のどの英語テストよりも妥当性が高いとは思っています。信頼性はテスト得点の再現性（モノサシとしての精度）なので、センター英語よりも信頼性が高いテストはあります。たとえば、センター数学は、センター英語よりも信頼性が高い可能性があります（科目が異なるテスト同士の信頼性を比較することにあまり意味がありません）。一般に理系科目のほうが、信頼性が高くなりやすいからです。

妥当性とは、信頼性の上位概念で、いろいろ定義がありますが、簡単に言えば問題の内容に関する正当性です。センター英語は（英語だけではありませんが）、大学の英語教育が専門の先生方が2年も議論をして作っています。内容的妥当性で言えば国内で最高品質と言って差し支えないと思います。同じ理由で、センター試験の他科目も国内で最高の内容的妥当性の高さだと思います。

質問 43（新テストでセンターが作成する英語について）への回答

共通テスト英語では、センター英語の第1問（発音）と第2問（文法）が外れる可能性が極めて高いのはおっしゃる通りです。テスト時間を3時間でも4時間でも設定できるならば、発音問題と文法問題も出題可能だったと思います。限られた時間でどのような問題を優先的に出題していくかの問題です。第2問は、センター英語の信頼性の高さに貢献していたので、共通テストで外れる（可能性が高い）のは残念でした。しかし、信頼性を多少損ねたとしても、テストの内容的妥当性を上げることが、このたびの改革の主眼です。しかし、本当に妥当性が高まったかについては、英語教育の専門家の皆様に引き続き議論していただく必要があります。なお、試行調査の結果、新テストの英語の信頼性は非常に高く、現行センター英語とほとんど遜色ありません。

質問 44（"リスニング四天王"について）への回答

話題にさせていただくのはありがたいです。引き続き注目されるような問題作成を心掛けたいと思います。ちなみに、私も当日にならないと問題の中身が分かりません。

質問 45（民間試験と共通テストの相関関係の分析について）への回答

共通テスト英語と民間英語テストの相関分析は、皆さまの関心は高いと思います。当然、内部的には分析すると思いますが、公表等についてはまだ何も決まっておられません。

質問 46（勤勉性について）への回答

センター試験では、知識や思考力などを問うことに注力しています。しかし、センター試験は、学力テストであって知能テストではありません。つまり、持続的に努力すれば高得点がとれるようなテストでなくてもいけません。努力が実らないようなテストで

あってはいけないからです。持続的に努力すれば高い点がとれるということは、すなわち、高得点者は勤勉者である可能性があるということです。ただし、単純な知識を測定しているわけではなく、思考力を測定しているがゆえに、ある程度知能が高い者には高い得点をとれるテストでもあります。したがって、高得点者は単に高知能者に過ぎない可能性もあります（知識があることをベースとした思考力を測定しているので、知能だけで高得点を取ることはほとんど不可能ですが）。もちろん、高得点者は、高知能者かつ勤勉者である可能性もあり、この場合も非常によく当てはまるように思います。

勤勉である人ほど、社会で優遇される仕組みは残さなくてははいけません。そういう意味で、共通テストでも勤勉である人ほど高得点を取れると良いと思っています。その点、共通テストでも「思考力」を単独で測定しているわけではなく、「知識」をベースとして、そこで培われる思考力を測定しています。共通テストでは、思考力を測定するウェイトがセンター試験より高まりました。したがって、センター試験ほどではないにせよ、共通テストも勤勉性の指標として機能すると思っています。

質問 47（英語外部テストの利用について）への回答

テストの専門家として、各民間テストの（内容については英語教育の専門家でないので判断できませんが）設計、品質、分析、どれをとっても世間が言うほど問題があるとは思っていません。むしろ、国内でも品質の高いテストだと認識しており、国内で各民間テストが活動してくれていることに感謝しています。また、CEFR に一元化して得点の対照表を作っていますが、（英語教育の専門家としてでなく）教育測定の専門家から見て、特に問題があるとは思っていません。むしろ、よくできていると思っていますし、センター英語を補完するべく機能してくれることを期待しています。問題点は、（しかし、それが一番大きな問題ですが）、値段の高さ（経済格差を助長）と実施地域の少なさ（地域格差を助長）だと思っています。

質問 48（英語の大学入学共通テストの廃止について）への回答

現在のところ、センター英語は、学力の代表性が高いことは間違いありません。しかし、自動翻訳機の精度がどんどん高まっている昨今、科目としての人気の高さがいつまで続くのか不透明です。精度の高い翻訳機ができたとき、他科目の教育にもっと資源を投入すべきという意見も起こってくるでしょう。そもそも学力を構成する成分のうち、語学の1つにすぎない英語が、学力の代表性が高いのも少し納得しがたいものがあります。本来は、国語（論理・推論・読解力）と数学（記号操作力・数理力・分析力）が、学力の代表（根本学力）として前面に来るほうが自然な気がしています（英語は読解力も必要だし、アルファベットは記号じゃないか、という意見もありますが、初等・中等

教育における英語の読解力は国語で必要な読解力に遠く及ばないし、記号操作力も数学で必要なほど抽象性が高くないです)。そういう意味で、現状は、英語偏重と言えなくもないです。

ただし、もちろん、英語力はリーディング力とリスニング力だけではありません。四技能テストという大きな流れは間違っていないですし、それについては、疑う余地はないのではないのでしょうか。ただし、現在では、ライティングとスピーキングを測定するのに民間試験を利用するほかなく、測定方法・公平性・公正性・経済格差・地域格差などさまざまな面で、不安視する有識者がいらっしやるということだと思っています。ちなみに、私は、民間英語試験について、経済格差と地域格差のみが問題と思っていますが、あとは大きな問題だと思いません。うまくやっていただけると信じています。

質問 51 (探索的因子分析について) への回答

基礎学力で説明しきれない科目間の相関が「古典学力」における古典と漢文、「英国学力」における英語と国語に残るからです。「古典学力」については、古典と漢文をセットで特にならざる人たちがいることが原因だと考えられます。我々は、内部で「古典女子」などと呼んでいます。古典文学にロマンを馳せる女子が多いことに由来しています。また、「英国学力」については、英語と国語しかやらないという人たちが(無視できないほど)いることが原因だと考えています。

質問 52 (センター英語試験の今後について) への回答

社会経済的には、新試験の受験者が減ることが第一に考えられます。英語のみを受験する層が、センター試験を受けに来なくなるからです。すると受験料収入が減少しますが、今まで通りの品質で問題を作成する必要は変わらないので、一人当たりの受験料が高くなる可能性があります。民間試験も独自に費用はかかるので、家庭の費用は増大してしまう可能性があります。

教育的には、期待通りに進めば、四技能の指導を各校がとってくださることになり、全国の高校生の四技能が伸長するということだと思います。100年後もまさかリーディングとリスニングだけの英語テストではないでしょうから、四技能試験については大きな流れとしては間違っていないと思います。いつやるかとどうやるかの問題だったのです。「今なのか?」そして「そのやり方で良いのか?」ということに関して疑問をもつ有識者がいらっしやるということだと理解しています。

英語教育研究的には、これまで入試センターが、大学の英語教育研究者を20名ほど集めて問題作成をしてもらっていたことがなくなることで、英語教育研究者をつなげる1つのネットワークを失うことになります。また、必ずしもテストの専門家でない英語

教育研究者に、テストのことを学んでもらう機会を失うことにもなります。私自身は、テストの専門家としても、英語部会とリスニング部会に出入りしている身としても、さみしく思っています。しかし、これは私情ですので、これによって教育政策を見誤るようなことがあってはいけないと自らを戒めています。

質問 53（英語成績の学力代表性について）への回答

様々な要因が影響してくるので、きっと影響してくると思います。学力の代表性については、定義があるわけではないので私見ですが、いくつかの要件があると思っています。すなわち、①受験者数が多いこと、②根本学力を背負っていること、です。

たとえば、走力と高跳びのどちらが運動能力を代表しているかと言えば、走力です。高跳びは誰しもがやっているわけではありません（①に該当しない）。その点、高跳びは運動能力を代表する資格が乏しいです。しかし、走力（かけっこ）は、保育園児でも運動会でやります。

また、走力は、サッカーやテニスなど、どんな運動競技にも要素として入っています（②に該当する）。また、どの競技の練習にも必ず取り入れられています。一方、高跳びの能力は、バレーボールやバスケットボールに 응용が利くという意味では基礎を担っていますが、走力ほど幅広くどの競技に対しても基礎を提供しているとは言えません。日々のトレーニングで、「ランニングはやるが高跳びはしない」というカーリングの選手は想像できても、その逆はなかなか想像できません。

英語の代表性はまさしく①によるものです。受験者数が多いことは、当たり前ですが、社会が必要だと認識しているということが影響しています。②については、国語（論理・推論・読解力と言う意味で）や数学（諸科学の基礎、抽象的な思考力、記号操作力・数理力・分析力という意味で）のほうが相応しいと思っています。

単に、受験者数が多いという意味では、今後しばらくは、英語の代表性は揺らがないと思います。しかし、自動翻訳機などが目覚ましく発展している昨今、語学の喫緊性はかつてほど高くありません。また、これまでも世界の第一共通言語たる地位は、ラテン語、フランス語やスペイン語であった時代がありました（現在ほどグローバルではありませんが）。我が国を含む東アジア諸国でも、近代までは中国語が第一共通言語でした。英語が世界における第一共通言語たる地位でなくなる可能性だって、近い将来にはないでしょうがありえないことではありません。

今後、英語の受験者数が少なくなったとき、いつまでも科目の代表的な地位にいるとは思わないです。講演中、私は、「英語は、教科科目の女王たる地位に君臨しています」という表現を使いました。まさしく、民衆（受験者数）によって支持されている代表という意味です。一方、国語は日本語が我が国の公用語でなくなる限り、数学は科学

による恩恵を享受しないと決めない限り、受験者数の増減によって学力の代表性としての地位が揺らぐことはありません。

質問 54（試験問題の作成について）への回答

作題部会は、正式には、教科科目第一委員会と言います。人選は、入試センターが行っています。任期は、通常2年ですが、条件によって3年やられる方もいます。作題は、入試センターの中でやっていただいております。お弁当が出ます！

質問 55（入試の傾向・対策をとることについて）への回答

過去問を解いて、傾向対策を取るというのは、少なくとも「温故知新」の温故に当たり、決して悪いことではありません。未来に習うことが物理的にできない以上、過去に習うしかないからです。未来に直面した際の問題解決方法は、過去の事例の解法の組み合わせであることも多く、過去問をたくさん勉強してくれる子は、それだけで勤勉であると言えなくもありません。応用力というのは、経験によって培われる部分も多いです。

また、一部のトップ大学でも、独創的と言われる子ほど、過去の論文などをよく勉強していたりします（しかし、同時にどこか疑って読んでいますが）。むしろ、自分の学問領域の外の学問を積極的に学んで、自分の学問領域に生かしています。

もちろん、傾向と対策が、受験テクニックに堕してはいけません。受験テクニックで入学した結果、授業についていけなくなった子は、早晚長続きはしないという意味で自業自得ですが、両者（大学と本人）にとって益にならないのは事実ですので、未然にできるだけ避けたいところです。

質問 56, 62（センターと民間試験が測る英語力と指導について）への回答

学力は後天的に養われるものです。先天的に授かっているものではありません。勤勉な者ほど高得点を取るので、高得点を取る人は勤勉である可能性が高いです。民間英語試験だって努力した者ほど高得点を取れるので、ある種の勤勉性を測定しています。センター試験だろうが、民間試験だろうが、学力試験である限り（もっと言えば、「後天的な能力」を測定している限り）、その結果は、純粋に学力の高さだけを反映していることはありえなく、勤勉性が混入してきます。

センター英語は、英語能力を測定しています。センター英語の高得点者ほど、少なくとも英文を読むことと聞くことについては秀でているからです。ただし、付加的に勤勉性の指標にもなっているということです。そして、それは、センター試験だけでなく、あらゆるテストについて、多かれ少なかれ、当てはまることです。それが当てはまらないならば、それは単なる知能テストになってしまいます。

共通テストでは、英語テストは、思考力を問うことを主眼にしています。しかし、民間試験も含めての改革であり、共通テストなのです。共通テストの英語テストがどう寄与するか、ということではなく、民間英語試験も含めた共通テスト英語という大きな枠組みで、「中高の指導をどうするか」ということを考えてくださると良いと思います。

質問 57 (プレテスト「試行調査」について) への回答

試行調査の英語の問題と基礎的な分析結果が、入試センターのウェブサイト(※)に出ています。よろしければご覧ください。内容は、センター英語と比べて様変わりしていますが、信頼性はセンター英語なみに高いです(数値は非公表です)。妥当性についても、センター英語と変わらず、英語教育が専門の大学教員が2年をかけて作題にあたるので、内容的妥当性については全く問題ないどころか、引き続き国内最高の品質であると思っています。

※大学入試センター内の関連サイト

https://www.dnc.ac.jp/daigakunyugakukibousyagakuryokuhyoka_test/index.html

質問 58 (民間試験について) への回答

センター試験をご信頼いただきありがとうございます。しかし、センター英語のみが唯一、英語能力の正しい測定方法を行っているということはありません。そもそも、正しい測定方法などただ1つあるというはずはないし、英語能力の測定方法は多様なやり方があるはずです。現在の仕組みでは、少し大げさに言えば、センター英語に失敗すると国立大学に行けなくなってしまう仕組みになっています(AO入試などを除けば)。

今回、認定された民間英語試験も、英語能力を測定するうえで、程度の差はあれ、妥当だと思っています。センター英語では、能力を発揮できなかった子どもたちが、適切に能力を発揮できて、やる気をもった子たちが、民間試験を通して国立大学に進学し、自己の目的や夢を達成してくれたら良いと願っています。

質問 60 (「基礎学力」について) への回答

ご質問ありがとうございました。当方の能力を超える質問です。申し訳ございませんが、回答を差し控えさせていただきます。

質問 61 (大学入試センター試験「英語」について) への回答

ご質問ありがとうございました。英語教育の専門家ではないので、問題内容の良し悪しについては、当方の能力を超える質問です。しかし、テストの信頼性から言えば、ア

ルファ係数が非常に高く、非常に高い信頼性がありました。

質問 63（データ公開について）への回答

私もそう思います。データ公開については、内部でも議論しています。いずれ、良い知らせをご報告できればと思います。

質問 64（点数開示について）への回答

自己採点が簡単にできるので、点数を開示しておりません。希望者には成績通知を行っていますが、800円かかります（※2019年1月試験現在）。このやり方は、共通テストになっても基本的に変更ありません。ただし、値段は変わるかもしれません。

質問 65（会話力を入試で学力とみなすことについて）への回答

おっしゃる気持ちわかります。しかし、現在の学校教育法や学習指導要領における学力の定義には、「①十分な知識・技能、②それらを基盤にして答えが一つに定まらない問題に自ら解を見出していく思考力・判断力・表現力等能力、③これらの基になる主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度である。」などとあるわけです。このうち、③の人々と協働して学ぶ態度も学力に入っているわけです。

テストは、基本的に「定義されたものを測定する」ものですので、杓子定規ではありませんが、英語を使った「会話力」も英語能力に含まれるというのが現在の考え方だと思います。しかし、学習指導要領の定義をそもそも疑うことはできます。学習指導要領は、定期的に改訂されています。

質問 66（共通テストについて）への回答

問題内容は大きく様変わりします。単純な知識を問う問題は大きく減らし、知識をもとにしながらも思考力などを問うような問題に大きくシフトします。具体的な問題内容は、下記サイト（※）をご覧ください。

しかし、大学の英語教育の専門家が20人くらい集まって、2年かけて入試センターの中で作題するという手続きについては変更ありません。その点、センター試験の後続テストと違ってくださって結構です。

※大学入試センター内の関連サイト

https://www.dnc.ac.jp/daigakunyugakukibousyagakuryokuhyoka_test/index.html

●松井孝志 山口県鴻城高等学校教諭

質問 67 (英作文の指導と評価について) への回答

前段の「満点も比較的容易に取れると言われている」の部分は、根拠がわかりませんのでお答えできません。質問の「国レベルの一斉のテスト」であれ、「教室内でのテスト」であれ、writing をテストすることは原理的に可能でしょう。ただ、現実問題として、異なるテストのスペックは異なる writing 力を測定していると考えべきで、それらを「換算」するのは容易ではありませんし、個人的には妥当だとは思えません。英検なら英検、GTEC なら GTEC の同じスペックでの異なる回の等化と、異なるスペックの試験相互の等化の精度に関しては、「共通テストの枠組みで認められている民間試験」の開発等に関わっていない言語テストの専門家にお尋ねいただくのがいいかと思いますが、「評価」の前に、高校段階でのライティングの「指導」が改善されないことには、テスト依存の「改革」の波に飲まれてしまうのではないのでしょうか。

質問 68 (英語が使える人材教育について) への回答

「英語が使える『人材』」という考え方そのものに賛同していませんので、この質問には回答しません。

質問 69 (共通テスト (=今後センターの作る問題) について) への回答

講演の中で指摘したように、「ことば」として適切に扱うことが望ましいと思っています。ただ、「大学が入学を許可するにあたっての英語の試験」という制約は忘れてはならないとも思います。

私自身が大学受験生だったのが 1982 年で、その前の年の 1981 年に購入して読んでいた読解の問題集というのが米国の GED 対策問題集でした。今は、GED のテストのスペックそのものが変わっていますが、米国の高校卒業同等の資格を得るための試験での「国語」の「読解」の試験対策書と考えてもらえばいいでしょう。そこでの「読解問題」は、つぎのような構成と割合になっていました。

- Practical Reading 15% (求人・求職、広告文など現実の生活に密着した題材)
- General Reading 35% (新聞、雑誌の記事、評論文、論説文、社会科や理科の教科内容なども含む題材)
- Prose Literature 35% (エッセイ、小説・物語)
- Poetry 10% (いわゆる詩)

- Drama 5% (戯曲)
そして設問は、
- Knowledge and comprehension questions
- Inference questions (Inference questions はさらに Meaning (文脈から語義を類推する) Cause or result (因果関係) に分かれている。)
- Application questions
- Evaluation questions

という英語の主立った論理パターンに沿っています。

これは「母語」としての後期中等教育レベルを修めているかを測るテストですから、当然、外国語や第二言語としての読解力を測る試験がこうあるべきだとは思いません。さらに、「共通テスト」の枠組みは、高等教育への接続で課されるテストですから、「母語としての国語の試験」に近づくことが望ましいとは言えないのではないかと指摘しておきます。

質問 70 (学校で民間テストの (対策のための) 指導をすることについて) への回答

次期の「学習指導要領」でさえ、CEFR の C の字も書かれていませんし、CEFR のどこにも、日本の「学習指導要領」との整合性、親和性などの文言は出てきません。小規模校では、専任教員の数も限られていますから、各種の外部民間試験の対策が立てられるような「エキスパート」を自前で揃えることはほぼ不可能だろうと思います。勢い「学校の外」から「商品」として「対策講座」なり、「対策講師」なりを買うことで対応するか、自前で対応可能な特定の試験にだけ照準を合わせた対策をとるようになるのではないかと危惧します。

質問 71 (英語教育のあり方について) への回答

講演で既にお話しした通りです。

質問 72 (高校における、生徒の英語レベルの評価について) への回答

文科省から地方自治体の教委を通じ、上意下達で数年がかりで、高等学校各校に CAN-DO 指標を作成させた経緯がありますが、「全ての高校に共通する英語運用能力の指標」が作成できるのであれば、既に文科省で作成済みなのではないかと思えます。現行の「調査書」の「評定」の数値が持つ意味は学校によって様々で、5 なら 5 が、4 なら 4 が、異なる高校間で全く同じ学力の指標であるとは言えないのと同様に、英語力に限った指標を作る際にも、学校間での差は存在するでしょう。ただ、現在進行中の「高大接続改革」では、調査書の部分にも大きな変化を生もうとしているのが問題だと思えます。

質問 73 (対話をもたらすダイナミズム) への回答

質問の意味がよくわかりませんので回答できません。

質問 74 (英語民間試験について) への回答

次の 75 番の質問に対する回答以上の回答はいたしかねます。ただ、民間試験の導入が今の形になる前の、「高3英語力調査」の結果が最初にニュースになった時に、なぜ皆、そのテストそのものの中身とか、英検のレベルの紐付けや CEFR との換算に疑義を唱えなかったのだろうか、と悔やまれるばかりです。

質問 75 (国大協会長の民間試験導入への見解について) への回答

私は 2020 年からの導入には一貫して反対の意を表してきました。試験相互の「換算」には無理があるだろうと思います。外部テスト自体の問題点は講演でも指摘しましたが、それぞれの大学が国大協のガイドラインを踏まえて、「使い方」を決めた場合、出願資格・要件になることで門前払いとなる受験生と、出願はできるが合否には影響がない受験生とが出てくることとなります。まさに「共通テスト」の枠組みの中で英語だけが「共通ではない」わけです。出願資格が得られないことを確認するために大学入試の受験料以外に高額な民間試験受験料を負担することは望ましいとは思えません。出願はできたものの、民間試験のスコアは合否には影響がないというのであれば、それはまさに「通行手形」の発行料を「大学入試センター」でも「志望校」でもない、外部に払っていることとなります。また加点方式であっても、共通テスト全体に占める外部試験の得点の割合が微々たるものなのに、英語一教科のために、大学入試の受験料の前に、高額な受験料(に加えて交通費、宿泊費)を負担することは大問題だと思っています。「大学独自に民間試験の使い方を決めてよい」というときに、「使わない」というオプションも保証されるべきだと思っていますが、その際に「使う受験生」と「使わない受験生」をどのような物差しで測るか、という部分も大学に任されることになり、受験する側の不安は解消されないでしょう。個人的には、2020 年からの制度の運用そのものを見直すべきだと思います。

質問 76 (これからの望ましい取り組みについて) への回答

「新課程生(といっても、義務教育段階の最終学年のみを新課程で終えた「建前」だけの新課程生ですが)が卒業する 2024 年」までの先送りで、その間に、共通テストの枠組みでライティングとスピーキングの試験を DNC 中心で開発し、ライティングとスピーキングは、現行のセンター試験のリスニングの扱いと同様で、必要な大学/学部が

「オプション」として指定することでの現実的対応が望ましいと思います。

質問 77 (大学入試に望ましい英語試験について) への回答

テーマが大きすぎるので、回答できません。

質問 78 (英語の指導について) への回答

講演の後半でもお答えしたように、私はかれこれ十数年、授業日誌とも言えるブログを書いていますので、そちらをお読み下さい。(<http://tmrowing.hatenablog.com/>)

質問 79 (学校英語課題について) への回答

講演でもお話ししたように、授業は試験対策のためにあるものではない、ということです。

質問 80 (英語力の評価について) への回答

拙著『パラグラフ・ライティング指導入門』(大修館書店)をお読み下さい。まずは、「指導(学習)」ありきだと思います。教師は教室内での「評価」に責任を持って行えばいいと思います。指導したことの全てをテストできるわけではありませんし、一つのテストで、指導の全てを肯定したり否定したりという「指導そのものの評価」ができるわけでもありません。

質問 81 (外部試験のライティング問題の問題点について) への回答

例えば、英検であれば、公式サイトの準2級のライティングの評価の観点では、「(1)内容 課題で求められている内容(意見とそれに沿った理由2つ)が含まれているかどうか」が示されています

(http://www.eiken.or.jp/eiken/exam/2017scoring_p2w_info.html) が、解答の目安が50-60語ですから、二つ理由を書いた場合に、どちらの理由付けも不十分となり、「理由になっていない」「なぜ、それが理由と言えるのか、さらなる情報が必要」という解答で終わってしまう受験生が多いと思われます。この分量であれば、理由は一つで充分で、きちんと書ききることを求めるべきです。

また、準2級と3級の「ライティング」対策のpdfファイルが公開されているのですが、そこで示されている「お手本」や「書き方」がまず大問題で、英語のライティング以前の「論理」の飛躍や欠如が目立ちます。

http://www.eiken.or.jp/eiken/exam/grade_p2/pdf/DrWrite_gradep2.pdf

http://www.eiken.or.jp/eiken/exam/grade_3/pdf/DrWrite_grade3.pdf

準2級の評価観点で「(2)構成 英文の構成や流れがわかりやすく論理的であるか」を謳っていることと大きく矛盾しているように思えてなりません。

GTECであれば、アドバンスレベルが大学入試レベルに対応するものかと思いますが、その公式ガイドブックでは、こういう課題が示されています。

「オンライン学習がもっと普及すれば、学校に通学する必要はないという意見があります。この意見について賛成か反対か、いずれかの立場を選んであなたの意見とその理由を書きなさい」

全て日本語での指示です。

この「オンライン学習がもっと普及すれば」という条件がそもそも不十分で、「誰が、初等中等教育のどの段階で、何を学ぶのか?」「そのオンライン学習のコンテンツは誰が提供するのか?」を枠づけしていない点で、議論のスタートさえ切れないはず。議論を成立させるためには「オンライン学習」の普及ではなく「日本のどこにいても入学が可能な通学を不要とする『オンライン学校』の普及」などというお題設定が望ましいと思います。そして、現状ではそういった「オンライン学校」は全公教育段階において、学校数ベースであれ、児童生徒数ベースであれ、何%を占めているのか、例えば公立学校のうち何%を占めているのか、などというデータが併せて示されなければ「もっと」という比較は不可能です。センター試験第4問のようリーディング+ライティング、といったイメージで問うべきもの、と私が言ったのはそういうことです。

そしてここまで考えてくれば自明でしょうが「オンライン学校の普及」＝「通学不要学校の普及」なのですから、この問いで立てられている「…普及すれば、学校に通学する必要はない」はトートロジーに陥っているわけです。

個人的には英検は英検力、GTECはGTEC力、TOEICはTOEIC力を測っていると思っていますので、異なるスペックの試験は異なるライティング力を測っているのだと思います。英検のライティング力とGTECのライティング力は似ているかもしれませんが、TOEICのライティング力とはかなり異なるでしょう。「お題」設定の問題点は、私はこれまでも学会等で発表、指摘していて、その記録をブログに残していますので、そちらをお読み下さい。

ただ、ライティング力は「即興性」だけで構成されているわけではないので、テストでの高得点が即「使えるライティング力」とはなりにくい技能であり、推敲添削が繰り返し行われて完成に「近づく」のが通常のライティングだと思います。私は今回の講演の原稿を2ヶ月近くかけて、4、5回書き直していますが、それでも100%とは言えないまま当日を迎えました。母語である日本語でさえ、そのような状況ですから、外国語としての英語のライティング力では尚更だと思います。

●巨理陽一 静岡大学教育学部准教授

質問 68 (英語が使える人材教育について) への回答

何のために「英語を話す」のか、また「英語が話せる」とはどういう状態なのかについての考えが人によって異なるので、どうなっても「解消」はしないかもしれませんが、学校教育が改善に資することは可能だし、実際これまでも少なからず貢献してきたと思います(そういう主張をする人たちにとっては十分とは言えないかもしれませんが)。ただそうした批判は学校教育(あるいは試験)だけで「解消」できるものではないし、私自身は、学校教育の一環としての英語教育の目的はそうした即物的で浅薄なところにはないという考えです。

質問 70 (学校で民間テストの(対策のための)指導をすることについて) への回答

教育の過程を顧みず、近視眼的な結果のみを求める傾向が強まるとすれば不幸なことです。長期的にその生徒の言語観や学習観にどういった影響を与えるかをよく考えるべきだと思います。テストが、世界や外国語、他者(とのかかわり)、あるいは自己について豊かな学びを可能とするものになっているのであれば、それを取り上げて授業を行う意義もあるでしょうが、資格・検定試験の性格や歴史を考えてもそれは期待できないでしょう。

授業は特定の文脈の中で生徒と先生で作上げるものなので、「授業における理想的な言語指導」の形を一般化することはできないと思いますが、私の考える対話的実践的外国語教育のモデルは『教育』2019年3月号の拙稿で示しましたのでご参照ください。

質問 71 (英語教育のあり方について) への回答

そのように思いますので、この1年は目的論の考察を中心に研究を進めてきました。「健全な英語教育の議論」がどのようなものかはわかりませんが、「外部試験の問題」はある意味でこれまで英語教育が走りながら抱えてきた諸問題の縮図であり、積年の澱のようなものだと思います。

質問 72 (高校における、生徒の英語レベルの評価について) への回答

講演でお話しした以上の内容について、今の私には答えられるものはありません。

質問 73 (対話をもたらすダイナミズム) への回答

対話のダイナミズムの重要性については強く同意するところですが、その視点があつたとしても、「話す力の深みまたは基本」がそもそも測れるものなのかどうかについて私は懐疑的です。

質問 74 (英語民間試験について) への回答

(a)一度に想定を超える人数が利用してパンクし運営が立ち行かないことが示されるか、逆に(b)ほとんどの人が利用を回避して実質的に無効化されるかすれば中止と同様の結果が得られると思いますが、そのために受験生が犠牲になるのは許されないので、その権限を持った人が賢明な判断を下すことを願うばかりです。当然ながら民間試験の導入をメリットと考える人もいるわけで、現状では(b)の方向で英語教育界や、生徒・保護者がまとまるのは難しいと言わざるを得ません。仮に(a)に近い結果となった時、被害を被るのはどういう人たちかということをもっとよく考えるべきでしょう。

質問 77 (大学入試に望ましい英語試験について) への回答

外国語や教育が商品化・特権化されず、専門家としての外国語教師の見識と判断が尊重され、学校とコミュニティでの実際の言語使用がアセスメントになっていること(つまり、今議論しているような試験がなくなること)が望ましいです。

質問 82 (民間試験の受検者確保のための易化か生じるか) への回答

CEFR との対応がユルくされたという意味でのダンピングは既に羽藤先生(京都工芸繊維大)が指摘するところ(twitter.com/KITspeakee/status/1043508547403698177)で、阿部先生(東京大学)も記事(www.nippon.com/ja/currents/d00413/)でその懸念を示していますが、具体的にその証拠を見聞きしたわけではないので何とも言えません。5年前にイギリスで発覚した TOEIC の不正などを思い返しても可能性としてはもちろんありえるわけですが、現時点では、ピンからキリまである試験団体側が実質と信用を失わないよう水準の維持に努める可能性も同程度にありえるものと考えます。

質問 83 (静岡大学の 2021 年度入試に関する予告文書について) への回答

講演の冒頭で明言した通り、私は現状の外部試験の利用に反対の立場ですので、生徒やその保護者、先生がたを混乱に巻き込むことについて残念でいたたまれない気持ちです。末端の一教員に過ぎない私には、大学本部、あるいは全学入試センターの意向は計りかねるところですが、出願資格とされるのだけは嫌だと思っていたので、注記という形ではあれ、懸念と受験生救済の考慮について明記されているのはかろうじて健全な判

断を感じるようです。

静岡大学の決定については全学入試センターの管轄で、全学教育基盤機構会議という場所で議論されたはずですが、私はどちらにも全くタッチしていません。そこで決定された案について、学部長補佐として出席している教育学部内の会議、および所属している英語教育専修の会議で意見を言う機会はありませんでしたが、言う機会があっただけで、実質的に何の役割も果たしていません。

質問 84 (A2 レベルのタスクとしての妥当性の判定について) への回答

(1) 一般論として、負担や実行可能性の問題を除けば、単独の試験で判断するより多くのことが言えるようにはなると思います。(2) 各試験で問題構成・内容が異なるので一概には言えませんが、それだけ広いレンジの判定をするからには、各技能について、レベルの異なる様々な問題(A2 レベルでもできる課題から C1 レベルの受験生で初めてできるような課題まで)を複数出して判定しているということになるかと思えます。実態としてどうなっているかどうかはわかりませんが。

質問 85 (共通テストについて) への回答

過去2年の大学入学テスト試行調査の各問題について簡単・難しい、面白い・面白くない、好き・嫌いといった個人的感想はありますが、現段階では英語について詳しい結果が公開されておらず、求められる弁別力についての良し悪しについては私はわかりません。すべてのテストに言えることですが、各民間試験や共通テスト、センター試験は一次元の直線上に並んでいるものではなく、テストそれ自体でどちらが良いとかどちらが悪いという性格のものでもありません(だからこそそれを CEFR で無理に対応させることで混乱が生じているわけですが)。「ハサミと爪切りのどちらが良いか」という問いに対する答えが、目的が紙を切ることなのか爪を切ることなのかで変わってくるのと同じことです。各テストにはそれぞれ測ろうとする能力があり、それにどの程度成功しているか(信頼性・妥当性)は問えるにせよ、強みもあれば弱みもあって、英語にかかわるすべての能力を漏れなく測れる完璧なテストなど存在しません。

質問 86 (教師の英語ユーザーモデルについて) への回答

ある人が英語ユーザーモデルとして「ふさわしい」かどうかの判断が誰にできるかはわかりませんが、そのような人がたくさん英語教員になってくれれば大変ありがたいことだと思います。ただ現状として、教員採用側、あるいは教育界がそのような人ばかりを選べる立場(「人材」という言葉に対応させた端的な言い方をすれば「買手市場」)なのかどうかはよく考えたほうがいいでしょう。私の考え方は今も、以前

「『英検』要求の耐えられない軽さ」と題して書いた記事

(www.watariyoichi.net/2015/05/28/miscellaneous025/) およびその補遺

(www.watariyoichi.net/2015/05/28/miscellaneous026/) と変わりありません。

少なくとも私がいま接する範囲では、私が中高生の頃（四半世紀前）よりも英語運用能力の高い先生が多いのは間違いなく（時代の差と、札幌の私が育った環境と、静岡の差という要因の両方があるかもしれませんが）、それで不十分だとしても、今あるところからやっていくしかないし、現状でできることもまだまだたくさんあると思います。

質問 87（アセスメントリテラシーの涵養の仕方）への回答

大学院で「英語科教育課程論」という授業を担当していて、アセスメントから逆にカリキュラム編成や単元構成を考えるとという構成にしています。その授業を5年ぐらいやってみて思うのは、(模擬的にでも) 実際に計画してテストを作り、学習者の応答を集め、解釈してフィードバックを返し、スペックを見直すという一連のアセスメント・サイクルを経験しない限り、アセスメント能力は身につかないし、またその実感には時間がかかるということです。個人が独力でやるのも難しく、同僚や専門家の協働も必須だと思います。要するに、やりながら考えながら漸進していくしかない、というのが今の私の見解です。

保護者のテスト理解については、個々に粘り強く説明して理解を求め、こういうシンポジウムなどを通じて社会全体の共有理解を少しずつ広げていくしかないという、およそ十分とは言えない答えしか出ませんが、教育方法学者としての楽観的な究極的信念を言えば、生徒が授業を楽しみ、学校でのアセスメントに満足している姿を見せ続けられれば、その姿が嫌なものだと思う保護者は少ないと思うので、授業を充実させるのが最も遠くて近い道だろう、というところです。

質問 88（A2 レベルの判定について）への回答

発表で示したのは生徒の英語運用能力の判定ではなく、教員が作成したパフォーマンス・テストが「A2」レベルを測ることのできる課題となっているかどうかの分析結果です。学校側がテスト問題を提出する際に、実際の生徒のライティング・パフォーマンスとして、優れたパフォーマンスと合格ライン上のパフォーマンス（と当該の先生が考えるもの）を提出してもらった、という次第です。

質問 89（専門家の信頼に関して）への回答

月並みですが、(1)精度の高い研究を続け、広くその成果が伝わるようにアウトリーチに努める、(2)専門的見地から納得の行かないことにもっと怒り（ただし SNS で喚いて

炎上することなく) 集団として社会的行動に移す、(3) こういう混乱を招くような人間たちと癒着せず、自らの研究や存在がお金儲けの道具として利用されないようにする、といったところでしょうか。

質問 91 (高校の英語教育について民間検定とのすみ分けは可能か) への回答

県によって人口も採用事情もかなり異なるので一概には言えませんが、以前の記事 (www.watariyoichi.net/2015/07/05/miscellaneous029/) でいくつかの県の公立高校教員の年齢分布を図示しました(英語科以外も含めて全てですが)。これを見る限り静岡県は、他県と同様 50 代の人数が多いものの、大阪府などと比べ、30 代後半~40 代半ばの教員も比較的多くいるというのが強みかと思います。大きな変化に対応し得る力量とエネルギーという点でも、教員間の世代継承を考える上でも、鍵を握るのはその世代だと考えるからです。

逆に私は東京や大阪といった大都市の事情について多くを知っているわけではないのですが、静岡県や三重県の高校の先生がたと仕事をしていると、学校を超えた教員同士のお互いの顔が見えた連帯の強さを感じますし、良い面だけではないかもしれませんが、研修等に真面目に参加される素直な先生が多いと思います。

ベネッセの学習指導基本調査では(「仕事のやりがい」について聞き始めたのが 2016 年調査からなのでこの項目については経年での比較ができませんが) 学習指導に関する満足度はもともと高くなく、それ以外の 2 項目については微減しているので、教科別に見た時に英語科教員がとりわけそうかというのは別途調査が必要だとしても、全体として教員の自己肯定感が下がっている可能性は高いかもしれません。

質問 92 (高校生の能力測定における CEFR の導入について) への回答

この質問については討論で、「今の日本の大勢として、英語が『勉強』という観点でしか捉えられていないうちは CEFR はかみ合わないが、社会がユーザーとしてそれを求めるようになった時には高校生に対しても考慮すべき枠組みだと思う」というお答えをしました。

質問 94 (静大:「加点型」) への回答

質問 83 への回答の通り、私は決定のプロセスに関わっておらず、決定の理由について詳しい説明も受けていないので、わかりません。

質問 93 (英語教育について) への回答

質問 95 (公教育として国民(財界を含め)から支持される英語教育とは?) への回答

学校種を細かく分けて論じたわけではありませんが、今の英語教育に欠けているものや目指すべき姿を踏まえた学校教育の一環としての英語教育の目的論については、講演時に紹介した通り、現時点での私の理論的枠組みとして『教育』2019年3月号に書きましたので、そちらをお読みいただければ幸いです。英語教育の主流とはとても言えない考え方だとは思いますが。

蛇足ながら、そして我田引水で恐縮ですが、私の考え方の根源として『協同学習を取り入れた英語授業のすすめ』に書いた言葉に立ち戻ることが多いです。「外国語としての英語に関する能力は多面的で、人間の多様な能力・価値の一部に過ぎないのですから、それを学ぶ過程は、人間性やものの見方・考え方を豊かにするものではありません」(巨理, 2012, p. 149)。この言葉は前任校で、英語が苦手か嫌いその両方という者が多く、つまり(小)中高の英語授業をうまく manage できなかった学生たちと授業を作る試行錯誤の中で紡いだ言葉なので、新自由主義的な動向の中で支持が得られる気はしませんが、そういう意味で、英語教育に欠けているものについて何がしかの真実を捉えていると思っています。

●笹のぶえ 東京都立三田高等学校長／全国高等学校長協会会長

○全高長の立場は

全高長は、民間の資格・検定試験の活用に関して、この案が出された当初から一貫して経済的、地域的格差等の課題があることを指摘し続けていました。有識者会議や文科省内の実施に向けた会議でも課題については共有され、課題解消に向けた努力を続けることが確認されています。

しかし、登壇の際も繰り返し発言しましたが、現時点では課題の多くが解決されないうまになっていきます。現状のまま、実施に突入し、高校生を「実験台に乗せる」わけにはいきません。一つ一つの不安や課題を確実に解消し、希望する高校生が安心して受験できる環境を作っていくために、どこから不安が生じているのか、解決すべき課題は何なのかを、具体的に提示し、文部科学省や実施団体に迫り、その改善を果たさせる役目があると考えています。できない理由を数え上げるよりも、現時点では、出来るために方法を考えることが求められていると思っています。そのために、総会や代表校長会や理事会や研究協議会や委員会等様々な機会を通して、現場からの声を捉え発信しています。しかし、時間は限られているので、早急に対応しなければなりません。期限を定め、それまでに十分な対応策が提示できない状況が生じれば、実施の延期を申し入れることも選択肢の一つであると個人的には、考えています。

○大学入試英語4技能評価ワーキンググループでは、

WGは、文部科学省・大学入試センター・大学・民間団体・教育委員会・高等学校の代表で組織されています。全国高等学校長協会からの参加委員の二名で、「大学入試英語提供システム参加要件」に照らしてみたととき「英語4技能情報サイト」で示された実態と要件との不整合を問い、懸案の経済格差・地域格差解消への具体的手立てを要求し、実施主体個々に改善を要する点を糾し、文部科学省主体で迅速に対応するように訴えています。会議は非公開ですが、議事次第の限りで公表されている通り、検定試験の第三者評価や実施主体に取組を求めたい事項や資格・検定試験の活用にあたってのトラブルと対応についてなどが、議論されています。民間団体相互の発言は、自団体の課題改善につなげるヒントを得る場にもなっていると見ています。関心の高いWGですので、全高長は、会議内容の公表を繰り返し求めています。

○東京都の対応については、

予定通り進めば、2020年4月から、民間の資格・検定試験の受検が開始されます。ニーズ調査によると、6月と10月に受検希望が集中しています。東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会の開催は、もう少し後ですので、6月の会場確保には直接影響は少ないと予想します。東京都だけの問題ではありませんが、6月は、体育祭やインターハイ予選で、受検日の調整が厳しいのが現実です。受検日が限定されると受検生が集中する可能性はあります。最大何名の受検が可能か、受検申込の集中にはどのように対応するのかについて、WGでも質問していますが、現時点では具体的な回答はいただいていません。

また、東京都は、2021年から、高等学校の入学選抜にスピーキングテストを導入する予定です。詳細は、東京都教育委員会のHPで確認できます。11月末から12月上旬の週休日に、外部施設を使って受検させる予定です。受検回数は1回限り、受検料は教育委員会が負担します。ヘッドセットからの音声問題に対して、タブレットに回答音声を録音する方式です。中学校の教職員は、監督や採点には関与しないことになっています。大学入試における民間の資格・検定試験の活用についての課題点を考慮して、東京都教育委員会が主導してスピーキングテストを設計している様子が見られます。いつ・どこで・いくらで・どんなという課題は、クリアされていると考えます。

○高等学校会場について、

地方では、高等学校を会場に使用することによって、経済格差・地域格差を解消できる場所もあります。一概に高等学校会場使用を否定するわけにはいきません。既に、あ

る民間団体は、HP で「試験監督及び採点の公平性・公正性の担保」と題して、高等学校を会場にした場合について、情報を提供しています。しかし、学校会場の場合、高校教員の関与・サービス管理、施設使用に伴う管理、公平・公正性等で、厳格なルールの策定が不可欠です。都道府県ごとに異なるルールでの実施はありえませんから、文部科学省は、実施団体任せではなく、教育委員会と連携し、主体的にルールを策定し、様々な不安や懸念を解消できる実施体制を確立する必要があると考えます。

アンケート集計結果

東京大学 高大接続研究開発センター主催シンポジウム
「大学入学者選抜における英語試験のあり方をめぐって(2)」
アンケート

(回収数 134, 回収率 32.1%)

1. 本日のシンポジウムの開催をどのようにして知りましたか。

A) ホームページで	22	(16.4%)
B) ツイッター等の SNS で	57	(42.5%)
C) 知人から	32	(23.9%)
D) その他	13	(9.7%)
無回答・無効	10	(7.5%)

2. あなたのご職業等について当てはまるものに○を付けてください。

A) 大学教職員	31	(23.1%)
B) 小中高教職員	47	(35.1%)
C) 民間教育関係	33	(24.6%)
D) 学生	9	(6.7%)
E) その他	14	(10.4%)
無回答・無効	0	(0.0%)

3. 本日のシンポジウムにどれくらい満足しましたか。

A) 満足	81	(60.4%)
B) やや満足	38	(28.4%)
C) どちらでもない	4	(3.0%)
D) やや不満	3	(2.2%)
E) 不満	0	(0.0%)
無回答・無効	8	(6.0%)

東京大学 高大接続研究開発センター主催シンポジウム
「大学入学者選抜における英語試験のあり方をめぐって(2)」報告書

発行： 2019年3月

編集： 東京大学高大接続研究開発センター

発行者： 東京大学高大接続研究開発センター

〒113-8654 東京都文京区本郷 7-3-1

TEL：03-5841-2529

E-mail：koudai.adm@gs.mail.u-tokyo.ac.jp



東京大学
THE UNIVERSITY OF TOKYO

